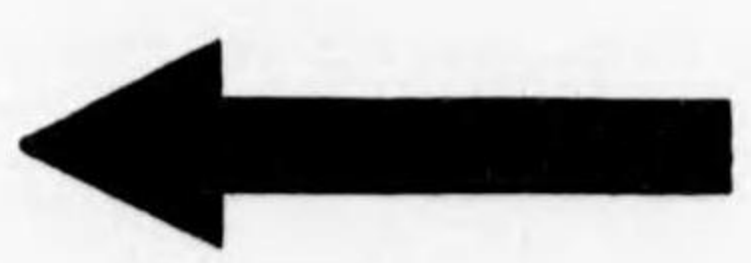
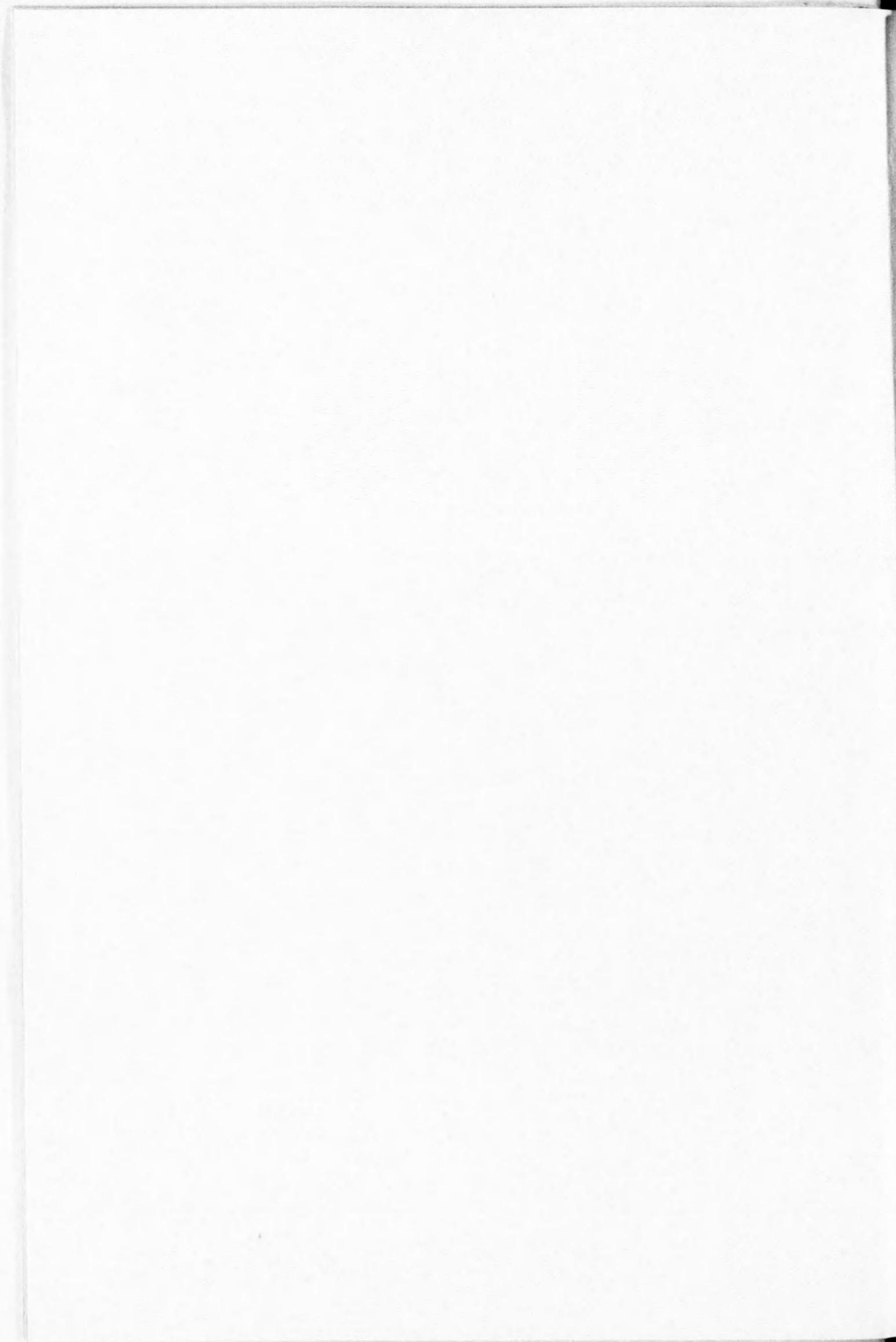


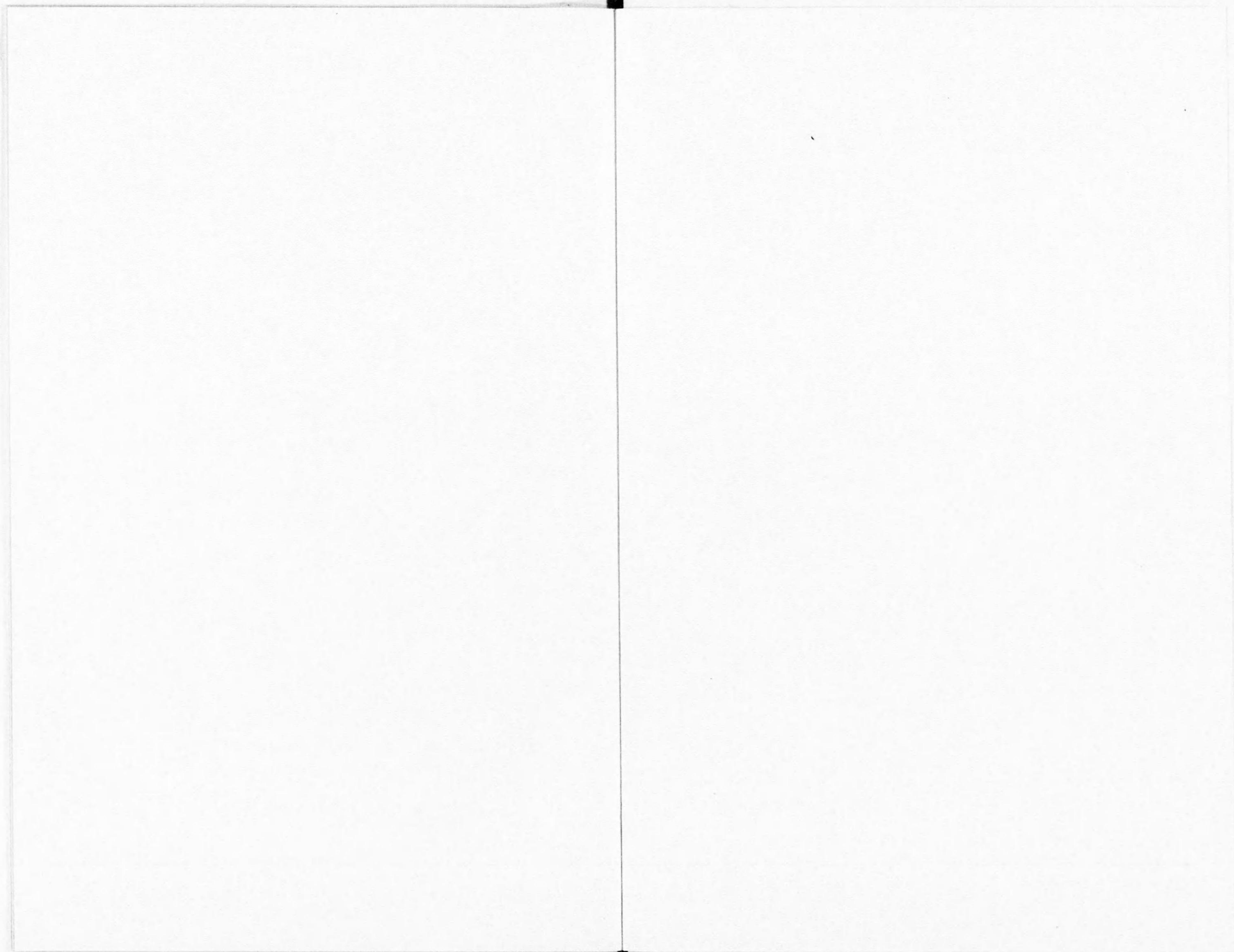
336  
2  
166



始







IT3W-90

笠  
信太郎著

金・貨幣・紙幣

貨幣問題の批判

大畑書店刊行

a 336  
166



564

## 序

世界恐慌最近の段階は各國における本位恐慌としてあらはれ、資本家社會における『貨幣』の問題を今更ながら深刻に提起した。貨幣問題は、いまや單なる謎ではなく、學問的興味の問題ではなく、將又商人的利害の問題でもなく、却つてそれは社會の各階層に向つて積極的にその社會的態度の決定を迫る切實にして巨大な問題である。貨幣問題の批判は、それ自身根本的なる社會批判であるとともに、無産階級にとつてはその實踐に對して一つの基準を提供するものでなくてはならない。ただ、小著が、かかる任務の一端にも堪え得ないであらうといふこと、ことに、それが單なる研究としても極めて消極的を出でないといふことは、誰よりも著者自身がよく承知してをり、慚愧してゐるところである。著者は、その本來の仕事、彼が今後の努力に貽さなければならぬ。

序  
尚ほ、小著に收むる諸論文は、著者が諸雜誌に發表したささやかなる勞作

から貨幣理論並に貨幣問題の實際に關聯するものを集め、これに多少の修正加筆をほどこしたもので、その執筆の動機や發表する雜誌の性質に拘束されてゐるので、全體に不統一であり、論述も精粗一様でなく且つ往々重複せる嫌があるが、今はこのままに上梓するのほかない事情にある。切に讀者諸賢の諒恕を祈る。

一九三三・二

著者

執筆の年月は各論文の末尾に附し、文中にあらはれる爲替相場、物價等は執筆當時のそれをそのままにしてある。

目次

第一篇 インフレーション序説

(一) インフレーションに關する基礎理論

- 1 はし がき……………三
- 2 經濟的範疇の進行……………五
- 3 貨幣の發展における範疇の進行……………一六
- 4 純粹規定としての流通手段の地位……………三
- 5 價值標章流通に關する諸説の立場……………三三
- 6 價值標章流通法則とその立てる諸條件……………四七
- 7 インフレーションの可能性と必然性……………五三
- 8 む す び……………六六

(二) インフレーション下の資本と勞働

六九

1 インフレーションの可能と必然…………… 一六九

2 爲替景氣の根據…………… 一七三

3 爲替景氣の矛盾——信用缺乏…………… 一七七

4 爲替景氣の矛盾——資本の國籍離脱…………… 一八〇

5 インフレーション下の資本の構成…………… 一八〇

(三) 猪俣氏のインフレーション論…………… 一八五

(四) 種々のインフレーション論…………… 一〇三

第二篇 ブルジョア貨幣理論の批判

(一) 『貨幣』に於けるブルジョア・イデオロギー…………… 一三三

1 金の實踐…………… 一三三

2 價值なき貨幣…………… 一三八

3 空幻なる價值…………… 一三五

4 「空幻なる價值」批判——(金の價值)…………… 一三三

5 「價值なき貨幣」批判——(紙幣本位制)…………… 一三九

6 「證券偽造者」の貨幣論…………… 一四七

附 山崎博士の譬喩…………… 一四九

(二) 金本位動搖とそのブルジョアの把握…………… 一五五

1 金の恐慌…………… 一五五

2 理論の恐慌…………… 一五九

3 金本位の崩壊か通貨説の瓦解か…………… 一六〇

4 金本位の必然とその廢棄の必然…………… 一六九

5 インフレーションへ！(その一)…………… 一七三

6 インフレーションへ！(その二)…………… 一八三

(三) 「金準備」の矛盾…………… 一八八

(四) 谷口教授の『ネオ・インフレーション』批判…………… 二〇〇

(一) 『ネオ・インフレーション』の正體…………… 二〇〇

(二) 進退兩難の『ネオ・インフレーション』……………二八

1 『國民大衆』の立場……………二九

2 谷口教授『四段の構へ』……………三三

3 谷口教授の經濟學放擲……………三三

4 谷口教授の『歴史的存在』……………三六

5 『統制經濟』の玉手箱……………三九

6 む す び……………四五

**第三篇 若干の現實問題に關聯して**

(一) 資本逃亡の量と質……………四四

附 金の武裝と金の流浪……………四四

(二) 嵐の中のイギリス金本位……………四三

(三) 預金部資金の問題……………四〇

**第四篇 マルクス貨幣理論に關する文獻若干**……………三五

**第一篇 インフレーション序説**



本稿を私は次の順序をもつて進めよう。

- 1 はしがき
- 2 經濟的範疇の進行
- 3 貨幣の發展における範疇の進行
- 4 純粹規定としての流通手段の地位
- 5 價值標章流通に關する諸説の立場
- 6 價值標章流通法則とその立てる諸條件
- 7 インフレーションの可能性と必然性
- 8 むすび

## (一) インフレーションに關する基礎理論

### 1 はしがき

茲に取扱はんとするインフレーションは所謂紙幣インフレーションに限られる。紙幣インフレーションは先づ信用インフレーションから區別されねばならぬ。後者は前者と理論的基礎を異にし、別個の範疇

にもとづいてをり、現實の過程に於いても固よりその出發點と作用と限界とを異にする。總じて後者は資本家的生産のヨリ高度の發展段階において固有の發展をもつてをり、理論的にもヨリ高度の過程に屬する。更にまた吾々は、一般的に云つて、本來の貨幣(金)のインフレーションなるものを認め得ない。蓋し、流通貨幣の數量は、商品の數量を一定せるものと前提すれば、諸商品の價格の浮動につれて干満するからであり、言ひかへれば、貨幣の流通量はその流通速度を一定とすれば實現さるべき商品の價格總額に依存するのであつて、その逆ではないからである。〔註〕

紙幣インフレーションは一般に何によつて起り、如何なる作用をもつかの問題は、云ふまでもなく單なる貨幣問題乃至は商品流通の問題以上に出で、資本家的生産の總過程に連なる。更にまたヨリ具體的には、その原因と經過と効果と、總じてその資本家的生産に對してもつ意義は、資本家的生産の發展段階に從つて異なる。ここでは問題をかく具體的に全面的に展開するのではない。『單純なる商品流通の地平線』上にあらはれる限りにおけるインフレーションの基礎理論として、マルクス紙幣論の適用を考へてみるに過ぎないのである。従つて、ここでも、マルクスが「經濟學批判」並びに「資本論」第一卷第一篇に展開してゐるやうに、信用の役割はこれを一般的に除外し、ただ必要な限りにおいてのみ觸れることとする。

〔註〕このことは然し、金生産の激増が一般的な物價騰貴を惹起し得ることを拒むものではない。そしてもし「金

のインフレーション」といふことが云はれるならば、それはこのことを指すのほかない。しかし、ここでは金の一般的な價值下落が問題の本質であり、それは一國における單なる金量の問題ではない。一國に存在する金の量は、純粹なる金屬流通の場合においても、その國に現實に流通する金量からは一般に獨立である。

## 2 經濟的範疇の進行

或る理論家は、嘗つて戦後におけるドイツのインフレーションをマルクス貨幣理論の試金石として取上げた<sup>(1)</sup>。吾々もまた商品流通に登場するインフレーションの理論的解明を、まづマルクスの紙幣理論に求める。マルクスは、「經濟學批判」第二章、貨幣又は單なる流通、二、流通手段のうち、「C、鑄貨、價值標章」の一節において詳細に、「資本論」第一卷第三章、貨幣又は商品流通、二、流通手段、「C、鑄貨、價值標章」においてやや簡明に、紙幣の流通法則を分析した。吾々はこの紙幣理論の内容に立入るに先立ち、まづここに展開された紙幣理論が、マルクス貨幣理論の全構造において、いかなる地位をもつかを決定しておくことを必要とする。

(1) エー・ルードウィヒ「金及び商品」(柳田民藏氏譯)大原社會問題研究所雜誌第十三冊所載

「敘述が改善された」とマルクス自身が云ふ「資本論」においては、マルクスは「貨幣又は商品流通」と題する第三章を、三節に分ち、一、價值の尺度、二、流通手段、三、貨幣とする。この節別は「經濟

學批判」第二章においても大體同じであり、ただ「批判」においては第四節に貴金屬が置かれてある點のみが異なる。さて三節に互つて追求されるところは「商品そのものから發生するところの貨幣」であり、そしてその貨幣の把握は、「貨幣に特有なる形態諸規定を純粹に把握すること」によつて果される。かかる形態諸規定を「純粹」に把握するために、ここでは「諸商品の交換から直接に發生する諸々の貨幣形態のみを取扱ふ」ことが「嚴守」される。諸々の貨幣形態は、貨幣の本質を前提するかぎり貨幣の「諸機能」といふ觀點から捕へられ得る。だが機能は貨幣の本質を前提するとはいへ、單純なる諸機能は具體的に發展せる、従つて諸規定の綜合たる「貨幣」の展開を俟たずして先づ展開せられ得る。かくて先づ追求されるのは、「貨幣」ではなくて、商品「金」の果す諸機能でなければならぬ。マルクスはそれゆゑに「金」の「第一の機能」から出發する。「金」の「第一の機能」、「流通の第一過程」は、「價値の尺度」としてあらはれる。金は「先づかゝる機能によつてのみ貨幣となる」。「金は、價値尺度としてこの規定によつてのみ、先づ一般的等價物すなはち貨幣となる」<sup>5)</sup>。かくの如く、機能における定在としての貨幣を、云ひかへれば「貨幣に特有なる形態諸規定」を、マルクスは、第一に「價値の尺度」として、次で「流通手段」として、更に「蓄藏手段」、「支拂手段」として、最後に「世界貨幣」として把持する。然しながら、これらの形態諸規定を、貨幣の諸機能を、マルクスはただ無原理に並べ立てたのではない。それぞれの諸規定は、云ふまでもなく、相互に關連し、一定の秩序において把持されてゐる。だが、如

何なる秩序において、如何なる關連において把握されたかが茲での問題である。最初に貨幣が商品であることを把握するのみでなく、「如何にして、何故に、何によつて商品は貨幣であるかを把握する」の第一に重要であつた如く、貨幣の諸規定間の關連が、如何なる秩序において、如何にして、何によつて、成立せるかが茲で問題なのである。

- (1) 『經濟學批判』河上、宮川兩氏譯、改造社版（以下特に斷らざる限り同譯頁）一四三。
- (2) 同、右、譯頁 一四四。
- (3) 『資本論』第一卷、河上、宮川兩氏譯、岩波版（以下特に斷らざる限り同譯頁）通し頁一四七。
- (4) 『批判』 譯頁 一四七。
- (5) 『資本』 譯頁 一四七。
- (6) 『批判』 譯頁 一四六。
- (7) 『資本』 譯頁 一四五。

云ふまでもなくマルクスは、貨幣が種々なる場面において果す諸機能をそのあらゆる側面から引き出し、これを單に並列するのではなく、諸機能を一つの「發展」の序列において見る。だが「發展」の序列といつても、貨幣の諸機能を單に歴史的過程において敘述するのではなく、これを相互の內的關連において把握するのである。この內的關連を、吾々はいま二つの契機において見る事ができる。エンゲルスの記述<sup>6)</sup>に従へば、この二契機は「歴史的並に論理的」と名づけられる。

ところでかかる内的聯關が理解されるためには、嚴密に云へば、「批判」におけるマルクスの方法が全面的に展べられねばならないが、茲では必要とするかぎりにおいて之に觸れるに止める。吾々は茲で、大體に、エンゲルスが「批判」出現の直後にその方法について叙べたところの見解、即ち「この取扱方（論理的方法）は實際において歴史的のそれに外ならない」と云ふ見地と同じ見解に立つ。然し、ヨリ嚴密には、「批判」の「序説」における「經濟學の方法」の一節におけるマルクス自身の記述の上に立つ。尤も茲では、「批判」の内容それ自身が方法的に考量せられるのであり、従つて、方法論のみを先廻りすべからずといふ注意は、恐らくは無駄にせられなかつた積りである。

(1) エンゲルス「カール・マルクス經濟學批判第一版」(改造社、マル・エン全集第七卷三號、頁三九)。

(2) 同右(マル・エン全集七卷三號、頁三九)。

(3) 樺田民藏氏「福本氏著『經濟學批判の方法論』に就ての一感想」(社會科學、二卷八號)。

さて、「批判」において、また「資本論」において、エンゲルスの所謂「論理的方法」は如何に遂行されたか。「歴史的のそれ」は如何に跡づけられたか。二つの方法は如何に不可分に結ばれてゐるか。

マルクスは、理論的思惟の過程を、「思惟が具體的なものを占有する仕方」を、思惟が抽象的なものから具體的なものへと向上する道程において見る。「思惟においては、具體的なものは總括の過程として、結果として、現はれ、出發點としては現はれない。」<sup>2)</sup>なぜならば「具體的なものが具體的であるのは、そ

れが多くの諸規定の總括だからであり、従つて多様の統一だからである。」<sup>3)</sup>かくて思惟は抽象的な諸規定から出發し具體的なものの再生産に到る。だが、この論理的な思惟の行程がそのままに歴史そのものの成立過程であるのではない。即ち「抽象的なものから具體的なものに向する方法は、ただ、具體的なものを占有するための、即ちそれを一の具體的なものとして精神上再生産するための、思惟にとつての様式に過ぎない。それは決して具體的なもの自體の成立過程ではない。」<sup>4)</sup>

さてそれでは、ここに論理的思惟の過程の出發點となるかかる抽象的諸規定は一體何處から得られるか。ここに論理的聯關における第一の前提が與へられねばならぬ。かかる前提として、マルクスは、「現實におけると同様に、頭腦においてもまた、主體が——茲では近代ブルジョア社會が——與へられてゐる」<sup>5)</sup>と叙べる。ここに、發展せる資本家社會を前提して始めて經濟學における普遍的な抽象物が把持される<sup>6)</sup>ことが明確に規定されてゐる。蓋し、「最も普遍的なる抽象物は、一般にただ、最も豊富なる具體的發展においてのみ成立する」からである。かくして、抽象的なものは、簡單なる範疇は、ヨリ發展せる具體物を前提し、その分析の上において獲得されると同時に、他方、ヨリ發展せる具體物を豫想する限りでは、抽象的なものは、簡單なる範疇は、綜合において具體的なものの再生産に到らねばならぬ必然性をもつ。

(2) 同	右	四四。
(3) 同	右	四四。
(4) 同	右	四五。
(5) 同	右	五五。
(6) 同	右	五一。

ここで問題は「一轉する。かかる簡單なる範疇は、それでは、單に具體的な全體の『抽象的な一面的關係』としてのみ存在するにすぎないのか。云ひかへれば、『これらの簡單なる諸範疇はまたヨリ具體的な諸範疇以前に、一の獨立な歴史的な存在を有つてゐないだらうか。』即ち問題は、論理的把握の歴史的限界にかかはるのである。この問いに對し、マルクスは、これを先づ一定の條件のもとに肯定する。

『簡單なる諸範疇は、ヨリ未發展なる具體物が——具體的な範疇によつて精神的に表現されてゐるところのヨリ多面的な關聯またはヨリ多面的な關係を、未だ定立することなしに——自己を實現してゐるであらう諸關係の表現であると同時に、ヨリ發展せる具體物は、同一の範疇を一の從屬的關係として維持する。』<sup>2)</sup>

このやうな關聯を一つの簡單なる範疇「貨幣」について云へば、

『貨幣なるものは、資本が存在する以前に、銀行が存在する以前に、賃労働等々が存在する以前に存

在し得るし、また歴史上存在してゐた。そこでこの方面からは、次の如く云ふことができる。すなはち、ヨリ簡單なる範疇は、比較的未發展な全體の支配的諸關係——その全體が、ヨリ具體的な範疇によつて表現されてゐる側面へ發展しないうちに、すでに歴史上存在したところの「諸關係」——を表現することができる。そのかぎりにおいては、最も簡單なものから複雑なものへ向上しゆく抽象的思想の法則は、現實的な歴史的過程に相應するものである。』<sup>3)</sup>

簡單なる範疇からヨリ複雑なる範疇への進行は、茲に於ては、歴史的過程の發展段階において即ち歴史的序列において現はれ、その限り現實的な歴史過程を反映する。範疇の進行はかくて茲では歴史的に捕捉されたと云へる。だが諸々の範疇は單に歴史的段階において孤立し固定するものではない。この範疇の歴史的性質は、更にヨリ以上の規定をうけねばならぬ。即ち簡單なる範疇は、歴史的に未發展の段階では全體の支配的諸關係を表現するが、他方に於て、この範疇が、この『集約性において現はれ』、『その内面的および外面的の完全なる發展において』<sup>4)</sup>現はれるのは『歴史的に云へば、社會の最も發展せる状態において』<sup>4)</sup>であり、また『それは、正に複合的(？)社會諸形態のみに屬し得る』<sup>4)</sup>のである。ここでは、簡單なる抽象物は歴史發展の最も複雑なる段階においてもまた存在しなければならぬが、その存在の仕方は、獨立的ではなく複雑なものへの從屬的な地位に於てであり、しかもかくすることにおいて簡單なる範疇自身の最も完全なる發展において存在することが示される。

- (1) 『批判』 課頁 五一。
- (2) 同 右 四七。
- (3) 同 右 四七—四八。
- (4) 同 右 四八。

以上において見得るところでは、マルクスもまた「大體において」<sup>1)</sup> 簡單なるものから複雑なるものへ向上し行く抽象的思惟の法則が、現實的な歴史過程に應じてゐること、範疇の論理的性質はその歴史運動に應じてゐることを認めてゐる。然し、かやうにこの範疇の歴史的發展が、論理的な分析綜合と照應すると云ふことは、一體如何にして可能となつてゐるか。問題は、論理的把握と歴史把握との統一及び聯關の根據に歸らねばならぬ。

〔註〕 大體に於てといふのでは甚だ漠然としてゐるが、その意味は行文の進むにつれて幾分闡明されよう。マルクスは『經濟的諸範疇をして、歴史上それが決定的のものであつた順序を、順次に追はせしむるといふことは、實行の出来ないことであり誤れることであらう』と云つてをり、又『その序列は、むしろそれが近代ブルジョア社會において相互に對して有するところの聯關によつて定まつてをり、そしてそれは、その自然的順序と見えるものの、或ひは歴史的發展の順序に適應するものの、正に逆である』<sup>2)</sup>と書いてゐる。それ故に、吾々がここに經濟的範疇の進行が現實的な歴史的過程に應ずるといふのは、『經濟的諸關係が種々なる社會諸形態の繼起のうちに歴史上占むるところの地位』を追ふと云ふわけではない。主題は、依然としてブルジョア社會であり、『生産の最も發展せる最も多様な歴史的组织體』である。故に、ここに歴史的過程といはれるものは、ブルジョア社會への結

成へ至るかぎりでの歴史的過程であり、換言すればブルジョア社會を編成する諸範疇を前提しこの展開に至るかぎりにおいて抽象された歴史的過程である。ブルジョア社會の編成が前提されるかぎり把握は論理的な契機をもつてをり、それを前提に範疇の發展が尋ねられるかぎり歴史的な契機をもつ。だから、この歴史的過程は、始めから具體的な歴史過程ではなく一つの抽象であることが銘記されねばならぬ。この抽象の領域に入るかぎりでは範疇の進行は同時に歴史的過程である。資本への發展が豫想されるかぎり商品から貨幣への範疇の進行は歴史的過程である。これに反して、謂ゆる歴史上の進行を進むならば、例へば資本の展開に先立つて地代が介入しなければならぬ。しかるに近代社會の前提の上では、この歴史的過程は逆倒する。『資本から土地所有への推移は同時に歴史的過程である』<sup>3)</sup>と、マルクスは『批判』の體系について述べてゐる。

この問題に關聯する最近の解釋の一二を窺へば、(一)河上肇博士は楠田、福本氏等との論争時代(大正十四年前後)以後の著作においても、かなりの修正を経てではあるが、依然として簡單なる範疇の歴史性の否定に傾かれてゐる。曰く『私はかかる理由により資本論の劈頭に現はれてゐる商品も、資本家的社會以前の商品ではなく、資本家的社會の商品(資本家的商品)から種々複雑なる規定を捨棄されたに過ぎぬといふのである』と(昭和三年「資本論入門」第一卷第二分冊、一五九頁)。かくて河上博士においては簡單なる範疇に表現せられるものの歴史的な獨立的存在といふ一契機が否定されねばならないが、私見ではそれが採り得ないことを、私は、貨幣の範疇の進行、殊に流通手段の運動について後記した。(二)ローゼンベルク『註解マルクス資本論』直井武夫氏譯)は、範疇及び法則の抽象的性質とともにその具體性及び歴史性を強調してゐるが、その歴史性とは、ブルジョア社會そのものが歴史的存在であるといふ意味においてブルジョア的生産様式の限界内のみ限定せられてゐる。曰く、『經濟學の歴史的性质は、第一に、その對象——商品資本主義的體制——が歴史的に條件づけられて

あること、第二に、そのすべての範疇及び法則が歴史的に条件づけられてゐること、即ちブルジョア的生産様式にのみ適用されうることのうちに表現される」と。この見解も上記河上博士のそれに近いと見得る。(三)尚ほ同じ問題に觸れたるもの、最近ではタンヒレヴィチ論文、「歴史的なものと論理的なもの」等。ただ掲ぐるに止め  
ておく。

さてこの問題への解決は最も簡單なる範疇が、最も古き經濟的關係に對する表現であると同時に、他面において、それが最も發展せる經濟的關係(「歴史的組織體」)において、最も抽象的に出現するといふ既に述べた關係のうちに含まれてゐる。マルクスは、「一つの全く簡單なる範疇」としての「労働」をもつて、この關係を明瞭に表示してゐる。マルクスは書く、「近代經濟學がその出發點となすところの最も簡單なるこの抽象物は、總ての社會諸形態に妥當する極めて古き關係を表現するところのものであるが、しかも斯かる抽象性においては、ただ近代社會の範疇としてのみ實際上眞實に現はれる」と。最も古き關係たる「労働」が近代經濟學の出發點たり得るのは、それがその抽象性においては近代社會の範疇としてのみ眞實に現はれるからであり、他方、近代社會は古き關係としての労働を前提してのみ存在し得るからである。此の關係は、これを範疇の進行過程において見るならば、一つの範疇は、歴史的には、それに先行するところのより簡單なる範疇を前提すると同時に、しかも同じ範疇は、他面においてより發展せる具體的關係を表現するところの範疇を豫想(unterstellen)するのであり、また論理的には、同じ

範疇はより具體的なものを前提(unterstellen)すると同時に、より簡單なる範疇を豫想すると云へる。範疇に於けるこの歴史的發展は、かくてそれが最も具體的な關係を前提して出發されるかぎり、同時に論理的であり得る。ここに於て論理的なる抽象は單に抽象として固定しない。なぜ固定しないかと云へば、それが一面に於ては其儘で單純なる歴史的具體性をもつと同時に、それが他面において發展せる具體物自體を豫想するからである。かかる抽象的なものは、抽象的なものとして歴史的な存在を主張すると同時に、それがより具體的なものへと發展すべき(より發展せる具體物の中に「一つの從屬的關係として維持」さるべき、或ひは「より具體的な範疇によつて表現されてゐる側面へと發展」すべき)必然性をそれ自らのうちにもつ。かういふ關係に立つ抽象が、マルクスの所謂「歴史的抽象」であらう。この關係においては、例へばその發展において一つの中間的な地位にある範疇は、論理的な姿においては、分析され得るものであると同時に、綜合への一過程の上にあるものであり、歴史的には、それに先行する諸範疇を前提とすると同時に他方では又それへと發展すべきより具體的なものを豫想してゐる、若くはやはり前提してゐる。いはば前と後とに前提をもつのである。かく、分析と綜合との契點に立ち、或は前と後とに前提をもつことにおいて、マルクスの把握におけるあらゆる範疇の地位が、強力なる特性をもつて歴史的に同時に論理的に規定せられる。

(1) エンゲルスは「大體にさうだ(Im ganzen)と書してゐる。(F. Engels Brevier, von E. Drahn. 1920. S. 124)

- (3) 『批判』 譯頁 五七。
- (4) 一八五八年四月二日、エンゲルス宛書簡、M-E Gesamtausgabe 8 abt. Bd. 2, S. 302<sup>2</sup>。
- (5) ローゼンベルグ『註解資本論』(一巻の一)直井氏譯五七頁。傍點私。
- (6) 『マルクス主義の旗の下に』邦譯改編第一冊。
- (7) 『批判』 譯頁 四九—五二。
- (8) 一八五八年四月二日、エンゲルス宛書簡、M-E Gesamtausgabe, ibid. S. 309

### 3 貨幣の發展における範疇の進行

以上、範疇の運動におけるマルクスの方法から吾々はその主要なる一特徴を取り上げたのだが、それはただ貨幣理論における方法論的構造を理解するための一準備にすぎなかつたのである。いま、かやうな關聯を、吾々はマルクスが『批判』第二章「簡單なる流通」(又は「資本論」第三章以下)において叙述せる範圍において簡略に追求してみる。

叙述の表面的な體裁を跡づけてみると、まづ抽象的なものから次第に向上する具體的なものへの過程が見られる。その發展的な叙述の仕方においては、明らかに、ヨリ複雑なる範疇はヨリ簡單なる範疇を基礎とし前提として築かれる。

第一に吾々は「簡單なる流通」への門をくぐらねばならぬ。この門に入るには、まづ商品から貨幣へ

の轉化が必要である。一般に貨幣は商品でなければならぬが、この過程で肝要な問題は、「商品は、如何にして、何故に、何によつて、貨幣であるか」の把握である。マルクスはこの過程を「批判」第一章において、「資本論」第二章「交換過程」において準備する。かくて、「簡單なる流通」の門をくぐつて現れる「流通の第一過程」は、即ち貨幣の第一の段階は、「價値の尺度」としてあらはれる。價値の尺度としての貨幣は、「現實の流通」に對しては「理論的準備過程」にすぎないが、この準備過程としての「價値尺度」が可能となるのは、既にこれに先行する範疇として商品を前提しなければならぬ。蓋し、「價値尺度としての貨幣は、諸商品に内在する價値尺度の、労働時間の、必然的な現象形態である」に過ぎないから。商品の存在それ自身が價値尺度を豫想しなければならぬと同時に、ここでは、價値尺度といふ範疇は、商品に内在する價値尺度を、労働時間を、前提としてもたなければ成立し得ない。

だがこの「理論的準備過程」の進行中に、現實の過程においては、金(まだ具體的の「貨幣」ではない金)が價値尺度となることは同時に諸商品の交換價値が金の一定量に關係せしめられ、それにおいて表現せられることを意味する。交換價値はここに價格となる。このことは、金の一定量が尺度單位として技術的に決定せられることにより、金が尺度單位となること的前提である。尺度單位は價格の單位として役立ち、かくて金の「價格の單位」たる機能は、價値尺度を前提して派生する。



- (1) 『批判』 譯頁 一四四。  
 (2) 『資本』 譯頁 一四七。

價值尺度としての金の「第一の機能」を述べたマルクスは、この「第一の機能」の前提の上に立つて「流通手段」たる貨幣の形態規定を把握する。いま價值尺度の機能、それにもとづく價格の本位たる機能にもとづき、商品の價格形態が與へられる。ところでこの「價格形態は——とマルクスは書く——『貨幣に對する商品の讓渡可能性と、かかる讓渡の必然とを含んでゐる』<sup>1)</sup>と。同じことは『商品は價格賦與の過程において流通の可能な形態を受取る……』<sup>2)</sup>とも表現せられる。價格形態における流通の可能と必然は次の過程をたどる。『商品流通の直接的な形態』 $W-G-W$ は、販賣 $W-G$ と購買 $G-W$ との二つの運動の統一たる購買せんがための販賣 $W-G-W$ とに分たれるが、その第一の過程 $W-G$ において『金が販賣において現實的な貨幣となるのは、諸商品の交換價值が價格において既に觀念的な金であつたからに外ならぬ。』<sup>3)</sup>流通の第一階段における流通手段の機能は、かくて全く金の價值尺度としての機能に依存する。この階梯が終れば、 $G-W$ の第二の過程は早や左程の困難を呈しない。蓋し、諸商品が讓渡された後の一般的産物は、『絶對的に讓渡の可能な一商品である』<sup>4)</sup>のだから。しかも、茲において流通手段としての機能は既に前面に立ちあらはれる。なぜならばこの過程においては『金をば商品自體のただ一時的な貨幣定在 (Geldassain) に轉形せしめる』<sup>5)</sup>からである。だがこの流通手段としての機

- (1) 『資本』 譯頁 一六四。  
 (2) 『批判』 譯頁 一八四。  
 (3) 同 右 一八八。  
 (4) 同 右 一九四。  
 (5) 同 右 八一。

能は、總流通 $W-G-W$ に於て完成する。蓋し、 $W-G-W$ の結果は、結局におして $W-W$ の物質代謝に歸する。即ちここでは商品が商品へ、使用價值が使用價值へと、交換されたにすぎない。そこで、貨幣は物質代謝の單なる一時的な媒介に役立つにすぎない。『かくて貨幣は、諸商品の單なる交換手段として、……流通過程によつて特徴づけられたる交換手段即ち流通手段として、現はれる。』<sup>6)</sup>なほ、流通手段としてのその機能を果すに當つて、金は、この機能にもとづき特殊の形態規定を受けるが、それはいま當面の問題とならなす。

さて流通手段の叙述を終つたマルクスは、更に金の新たなる機能に突き進む。即ち、『蓄藏手段』、『支拂手段』、『世界貨幣』がそれである。この諸機能を果すに至つて金は始めて『貨幣』と呼ばれ、同時に『貨幣』といふ規定のもとにそれらの諸機能が包括される。マルクスは一段とヨリ具體的なる範疇に進んできた。それではこの『貨幣』は何を前提として成立したか。言ふまでもなく、それまで辿り來つた價值尺度と流通手段とを前提として。マルクスは書く。『價值尺度として、及び流通手段として役立つ

特殊商品たる金は、それ以上社會の助けを俟たなくとも貨幣となる。』……だから商品は、先づ價值尺度と流通手段との統一として貨幣となる、言ひかへると、價值尺度と流通手段との統一が貨幣である。』と。「批判」におけるかうした規定は「資本論」(エンゲルス版)では同じ意味を以つて次の如く書かれてゐる——「價值尺度として、そしてそれ故に、またその身をもつて或は代理者により流通手段として、機能するところの商品は、貨幣である。」と。〔註〕上に掲げた三つの機能を營む「貨幣」が、ここで明らかに價值尺度と流通手段との二機能を直接の前提とすることが判然と宣明されてゐる。だが、かくして完成した「固有の意味の貨幣」は、「かかる統一としては、これら二つの機能における定在とは異なる獨立的な存在を有つ」に至る。この、價值尺度とも流通手段とも「異なる獨立的な」機能は、云ふまでもなく、差當り蓄藏手段と支拂手段との機能であり、前者においては、この「固有の意味の貨幣」は「肉體のまま、従つて貨幣商品として現はれざるを得ない場合である」が、それは「流通を停止せる鑄貨」として、それ自身既に流通手段よりの轉形たることを示してゐるのであり、後者においては、それは「單なる使用價值としての總ての他の諸商品に對して特有なる價值の姿又は交換價值の唯一の適當なる存在として、固定せしめられる場合であり」、それは、流通を通じて現はれるが、すでに流通手段としてではなく一般的等價物として現はれる。流通手段としては貨幣は購買手段であつたが、ここでは非購買手段であり、その意味において支拂手段の機能は流通外に横はる蓄藏手段を前提する。かくして貨幣が

ここに、蓄藏手段としての金の肉體として、支拂手段としての絶對的商品として、定立されるならば、貨幣の最後のそして最高の段階における機能の上に立つ「世界貨幣」は成立する。世界貨幣の機能の「充分なる包括さ」は、貨幣の各々の發展段階における諸機能を前提して始めて成立し得る。

〔註〕 カウツキイ版では、ここに表現されてゐる辯證法的な過程が殆んど抹殺されてゐる。マルクスが校閲したと云はれるフランス譯も同様であり、記述は更に簡單である。カウツキイ版は曰く、「これまで吾々は貴金屬を、その二重の性質において、價值尺度としておよび流通手段として、考察して來た。貴金屬は、第一の機能をば觀念的な、觀念されたる、貨幣として果たし、第二の機能においては貨幣章標によつて代位され得る。しかるにかかゝる機能の外に、なほ貴金屬が、かの價值尺度における如くに單に觀念的なものとしてでもなく、また流通手段における如く他によつて代理されるものとしてでもなく、その金(乃至銀)の肉體のまま、従つて貨幣商品として、現はれざるを得ないところの、若干の機能がある。……吾々は、これらの總ての場合において、貴金屬が價值尺度としての、及び鑄貨としての、その機能に對立して、固有の意味における貨幣として機能する、といふ」と。ここでは貨幣の諸機能が單に並行的にならべられただけである。これは「批判」並に「エンゲルス版」において價值尺度及び流通手段が、「貨幣」の、「固有の意味の貨幣」の直接的な前提として述べられてあるに較べて著しく俗流化されたものと云はねばならぬ。だが、問題のこの個所につき、カウツキイ版の邦譯者の書くところによれば、「それは從來の版本におけるものよりも著しく改善されてゐる」と!

⑤『批判』 譯頁 二四七。

⑥ Das Kapital, I, (v. F. Engels) 1921, S. 39.

⑦『批判』 譯頁 二四七。

(4) 『資本』 譯頁 二二五。

(5) Das Kapital, I, (v. F. Engels) 1921, S. 93.

(6) 『資本』 譯頁 二二五。傍點私。

以上吾々の見た把握の仕方では、貨幣の諸機能は、明かにそれに先行する前提をもつてゐる。無論、かかる仕方においても、貨幣の諸機能を並列するに止まる乃至は諸機能を單に個別的に攻究するに止まるところの資本家經濟學の仕方とは甚しき懸隔にある。だが、發展が單にかやうに跡づけられるだけでは、最も發展せる具體的な諸關係と、最も古き關係の表現としてみられる簡單なる關係との必然的な聯關は見出されない。そこには單に一面的なつながりが見出されるに過ぎぬ。「謂ゆる歴史的發展なるものは、一般に、最後の形態が過去の諸形態をば自己に對する諸階梯と看做し、それらを常に一面的に理解するといふことに基づく」といふマルクスの言葉は、ここにも當てはまる。ところで、經濟學の任務は、「近代社會の經濟的運動法則の曝露」であり、茲では「近代ブルジョア社會」そのものが主題であり、同時に、それにおいて諸範疇が「相互に相對するところの關係」が問題である。經濟的諸關係が「歴史史上占むるところの地位」がここで「問題」なのではない。それ故に問題は、先づ吾々に「主體が——近代ブルジョア社會が——與へられてゐるのだといふこと」から、出發されねばならない。従つて又、經濟上の所謂「諸範疇」も、「この一定の社會の、この主體の、定在形態を、存在規定を、往々にしてた

だその個別的方面のみを、表現するものだといふこと」を「牢記」してかからねばならず、従つて「經濟學」もまた科學的には、これらの範疇が斯かる範疇として存在するところからは着手されない。〔註〕「一般に、人間生活の諸形態に關する考察は、従つてまたそれらの科學的分析は、現實の發展とは逆の道を進む。』それ故に肝要なことは、ここで「經濟學の理論的方法においてもまた、主體が、社會が、つねに想像に浮べられてゐなければならぬ」といふこと。云ひかへれば、發展せるブルジョア社會が、その經濟的事實が、ここでは經濟學の前提であり、この最も具體的な經濟關係を豫想して始めて諸範疇の道行きが尋ねらるべきだといふこと。従つてヨリ簡單なる範疇は、茲では、前に吾々が辿つた道とは逆に、ヨリ複雑なる範疇を前提 (unterstellen) するかぎりにおいてのみ、論理的であると同時に、ブルジョア社會の展開にとつての歴史の意義をもつ。されば、この關聯は、最も典型的には「最も普遍的なる抽象物は、一般的にただ、最も豊富なる具體的發展においてのみ成立する」といふ姿においてあらはれる。

〔註〕この譯文は河上・宮川兩氏譯と猪俣氏譯とは全く相違する。三枝氏の譯文は猪俣氏譯に近いがまた異なる。英譯は猪俣氏のそれに近いやうである。<sup>5)</sup>ところで、この大體三種の譯文は意味が全く異なる。いま猪俣氏譯を掲ぐれば「そして「經濟學は」それだから科學としてもまた決してそれがかかるものになつたと今言はれてゐる時に初めて起原するものではない……」<sup>6)</sup>この文意では、經濟學の起原は經濟學が云爲され出す以前にあると取れる。これは、經濟學の篇別に關するマルクスの考へと矛盾する。文法的には猪俣氏譯は無理がなく、意味では河上・宮

川兩氏譯をとるべきものと思はれる。私はいま後者に従ふことによつて文意を解釋してゐる。更にこの原文の解釋について、もし大膽な提案が許されるならば、カウツキイが括弧で挿入した die Ökonomie をこの一節の主題となつてゐる Ökonomische Kategorie に變更することにより、河上・宮川譯文の文法的な無理が排除され而も文意は一層通ずるのではあるまいか。

吾々はいまこの關聯を極めて簡単に貨幣の諸範疇において瞥見する。

近代ブルジョア社會における貨幣の最も具體的な従つて「多くの諸規定の總括」たる範疇は、「世界貨幣」の範疇において現はれる。「貨幣の定在の仕方は、茲においてか、その概念に適はしきものとなる。」しかし、この、多くの諸規定の總括たる世界貨幣において「最も普遍的に抽象的なもの」が包含される。「世界市場に於て始めて貨幣は、その自然形態が同時に抽象性における人間労働の直接に社會的な實現形態であるところの商品として、充分なる包括さにおいて機能する。」<sup>7)</sup> 茲では即ち、最も普遍的に抽象的なものを含む世界貨幣が、他方においてその具體性の故に「充分なる包括さにおいて機能する。」この「充分なる包括さ」は、窮局において、ここで最も抽象的なものとして現はれてゐるものの發展に外ならない。同じ視點から、吾々は、支拂手段と蓄藏手段との貨幣の機能が、先に吾々の見たところとは逆に、世界貨幣を前提として把握されるのを見る。マルクスは書く。「世界貨幣は一般的な支拂手段として、一般的な購買手段として、及び富一般の絶對的な體化として機能する。」<sup>8)</sup> 即ち、支拂手

段は、ここでは一般的な商品流通の上に立つ世界貨幣のヨリ一般的な機能に依存し、直接的には、範疇「世界貨幣」に包括せられる一般的な支拂手段たる機能の、特殊領域における定在(例へば銀行券)として分析せられ得る。支拂手段はここに論理的に世界貨幣を前提する。或は、支拂手段の發展は國內流通が世界市場へと展開するに伴ひ、世界貨幣の中に解消する。さて、蓄藏手段に至つては、他方に於て支拂手段を前提し、それと同時に直接に世界貨幣を前提する。一。蓄藏手段と支拂手段とのこの場合における關聯は、先に吾々の見たところとは正に反對で、さきには支拂手段の機能を前提としたが、ここでは逆に、金が不動化され蓄藏されるのは金が支拂手段たることを前提とするからに外ならないといふ關係に立つ。發展せるブルジョア社會を前提するとき、この關聯は益々明瞭とならう。マルクスは書く。「致當手段として機能する抽象的な形態における貨幣蓄藏は、ブルジョアの生産の發達するにつれて減少するが、交換過程によつて直接に必要とされるこの貨幣蓄藏、或はむしろ、一般的な商品流通の領域内で形成され支拂手段の積立準備金として吸収されるところの蓄藏貨幣部分は、増加する。」<sup>9)</sup> 二。かやうに蓄藏手段は支拂手段の機能を前提するが、同時にそれは直接に世界貨幣の機能をも前提する。そのことは、上の引用句の後半がそれを示してをり、更には次の言葉に最も明瞭に呈示される。「如何なる國も、その國內の流通に對してと同じやうに、世界市場の流通に對しても、或る準備金を必要とする。かくて蓄藏貨幣の諸機能は一部分は國內の流通手段および支拂手段の機能から發現し、一部分は世界貨幣としてのその

機能から發現する。<sup>10)</sup>

更に進んで、價值尺度並びに流通手段の機能はここで如何なる地位をとるか。

既に吾々は、價值尺度と流通手段とが「固有の意味の貨幣」、「貨幣としての貨幣」<sup>11)</sup>のなかに統一せられること、その中では「尺度としての貨幣」と「交換手段としての貨幣」とが「單に機能として存在する」ことを見た。一。いま流通手段としては、「貨幣は諸商品の單なる交換手段として現はれる」、即ち「交換手段一般としてではなく、流通過程によつて特徴づけられたる交換手段」として現はれる。かかる意味の交換手段、限定されたる交換手段（マルクスがエンゲルス宛書簡で述べた「批判」の腹案では流通手段は明かに交換手段 Tauschmittel と呼ばれてゐる）は、貨幣が「流通過程によつて特徴づけられないところの交換手段として即ち一般的交換手段として登場するところの一般的商品流通から、國內流通が抽象されるとき、即ち「國內流通が一般的商品流通から眼に見えて分離する」ととき、はじめて現はれる。單なる交換手段＝流通手段として。これ、「貨幣が單なる流通手段として獨立化し得るのは、一般にただ國內流通の範圍にのみ限られる」<sup>13)</sup>所以である。二。價值尺度は直接に流通手段たる貨幣を前提する。さきに流通手段が價值尺度を前提しそれから直接的に發展する關聯を指摘したとき吾々は次の句を引用した。——「價格形態は貨幣に對する商品の讓渡可能性と、かかる讓渡の必然性を含んでゐる」と。しかるに、「他方において」と、マルクスはその先をつづけてゐる。「金は、ただそれが既に貨幣商品

として交換過程の内にうろつき廻つてゐるが故にこそ、觀念的な價值的尺度として機能する<sup>14)</sup>」と。この後の句は、價值尺度が現實の流通を前提すること、この流通を分析してはじめて價值尺度の機能が握られることを明示する。「だから」と、マルクスは更につづけて、「觀念的な價值尺度のうちには硬貨が待伏してゐる」と書いてゐる。この最後の句は、價值尺度がただに流通手段を前提するのみでなく、手に觸れ得るところの、肉體をもつ、謂はゆる「貨幣としての貨幣」をも前提してゐることを示す。そのことをヨリ確認するためには、ただ世界貨幣が「抽象性における人間労働の直接に社會的な實現形態たる商品」であるといふ本質規定を想起すれば足る。この關聯に對する認識の缺如は、商品は欲して貨幣を欲しない空想家達や「貨幣を攻撃し、商品を稱揚する」<sup>15)</sup>ブルードン主義者達の誤謬を生んだ。マルクスはそれを幾度も指摘した。<sup>16)</sup>

(1) 『批判』 譯頁 五四。

(2) Zur Kritik, 1930, XI, III, 河上・宮川兩氏譯文に據る。

(3) 『資本』 岩波第一分冊、譯頁 一一二。

(4) 三枝博音氏『資本論の辯證法』頁二二。

(5) A Contribution of the Critique of Political Economy. Transl. By N. Stone. P. 302.

(6) 改造社マル・エン全集、第七卷、頁四〇六。

(7) 『資本』 譯頁 二九九。傍點引用者。

- (8) 同 右 二四一。傍點引用者。  
 (9) 『批判』 譯頁 二二〇。傍點引用者。  
 (10) 『資本』 譯頁 二四二。傍點引用者。  
 (11) エンゲルス宛書簡 M-F. Gosamtangabe, ibid. S. 311.  
 (12) 『批判』 譯頁 二三四。  
 (13) 『資本』 譯頁 一六四。同様のことが『批判』譯頁 一五四。  
 (14) 『批判』 譯頁 一一三。  
 (15) 『批判』 譯頁 一五三並に一七八—一八三。『資本』譯頁 一四八、一五〇。『哲學の貧困』第一章第三節も参照。  
 (16) 『批判』 譯頁 一五三並に一七八—一八三。『資本』譯頁 一四八、一五〇。『哲學の貧困』第一章第三節も参照。

これまで辿られた方法論的管見から吾々は次のやうな示唆を獲る。

問題は「貨幣に特有の形態規定を純粹に把握すること」にあつた。しかし、ここで重要なのは、かく純粹に把握された形態規定が同時に「抽象から具體への向上」の道程において、その本來の地位を見出すことであつた。ところで、そこでは、「純粹」(抽象的規定)は、それ独自の領域を主張すると同時に、他方、そのなかでひとり孤立することを得なかつた。蓋し、純粹なる一範疇は、その發展においてその前段階をその前提としてもつと同時に、他方、ヨリ具體的なる範疇を前提とした。それは、そのヨリ具體的な範疇への展開が豫想されるかぎりにおいて抽象されたのであるから、そのヨリ具體的なものへの發展は必然である。それ故に、かかる抽象が、若し單にそれ独自の領域に固定せしめられるなら

ば、かくてそれがヨリ具體的なものの眞理として適用せしめられるときは、ここに一つのイデオロギーは形成される。例へば、貨幣の觀念的尺度單位論。諸商品は價格としてただ觀念的に金に轉形されるし、従つて金はただ觀念的に貨幣に轉形されるにすぎぬといふ事情——かういふ事情、即ちマルクスの所謂「流通の第一過程」のみが把握され、それが固定され、直接に普遍化されるとき、謂ゆる貨幣の觀念的單位説は生誕する。

然しながら、この關聯においても繰返し注意さるべきは、「最も普遍的なる抽象物」こそ「最も豊富な具體的發展において成立する」といふ關聯である。貨幣においては、この關聯は簡單なる範疇としての「一般的等價物」乃至「價值尺度」が世界貨幣において始めて「實際上眞實に現はれる」といふ姿において呈示される。だが、このことはまた、ヨリ簡單なる範疇が、ヨリ發展せるヨリ具體的な關係において自己を主張するときは、必ずやヨリ抽象性において現はれるといふことを意味してゐる。従つて、既にやや複雑化せる範疇は、それ自身において、それに適應する一段階の全體的な支配的諸關係を表現すると同時に、それが更に發展せる具體的關係において自らを現はす抽象性は、ヨリ簡單なる範疇がここにおけるほどしかく完全ではあり得ない。それでもかかる中間的な範疇がヨリ發展せる具體的關係において、その「從屬的關係」として、その「側面」として維持せられることは明かであり、その意味では尙ほ抽象性において現はれざるを得ない。この關係を、マルクスは、既に掲げた次の言葉をもつ

て表現した。

「簡單なる範疇は、ヨリ未發展なる具體物が……そのまま自己を實現せるでもあらう諸關係の表現であると同時に、ヨリ發展せる具體物は、同一の範疇を、一つの從屬的な關係として維持する。」<sup>1)</sup>

「ヨリ簡單なる範疇は、比較的未發展な全體の支配的諸關係を表現し得る。即ちこの當の未發展の全體がヨリ具體的な範疇によつて表現されてゐる側面へと發展しないうちに、すでに歴史上存在したところの諸關係を表現し得る。」<sup>2)</sup>

簡單に云へば、ある範疇は、歴史上支配的な具體的關係を表現し得ると同時に、それはヨリ發展せる具體的關係にあつてはそれの側面的存在として、一つの抽象的定在を表現するといへる。この關聯は、

——別の言葉をもつてすれば——歴史的に支配的な地位を表現する或る範疇は、ヨリ具體的な範疇によつて表現されてゐる關係においては何らかの制限を受けることを意味する。

一例。蓄藏手段としての貨幣は、商品交換社會が未發展の状態にある時代には主として致富手段として獨立に「抽象的形態」において實在した。しかるに、ブルジョアの生産の發展につれて——支拂手段としての機能が展開するにつれて——かかる獨立な致富手段としての貨幣蓄藏は消滅し、支拂手段の準備たる形態における貨幣蓄藏が増大する。<sup>3)</sup> かつて獨立に作用した蓄藏手段の機能が、支拂手段の機能のもとに「從屬」して機能するのである。獨立な蓄藏の機能は「古代及び中世においては、一般的であつ

た。」發展せる近世の生産段階では、「今ではたゞ第二次的に、銀行制度のなかに存在するに過ぎない。」更に一例。簡單なる金屬流通において規定された通貨量に關する流通手段の法則は、周知の如く、貨幣が支拂手段の機能を營むに及んで「大いに修正される。」<sup>4)</sup> 更に第三例。——これを吾々は、次に、吾々の當面の問題の中で見ると。

(1) 『批判』譯頁 四七。傍點引用者。

(2) 同 右 二八六。『資本』譯頁 二三八。

(3) エンゲルス宛書簡、一八五八年四月二日 M-E Gesamtausgabe, ibid. S. 311. 傍點引用者。

(4) 『批判』譯頁二八七。

#### 4 純粹規定としての流通手段の地位

かやうに見來ると、吾々が當面の問題とする貨幣の流通手段としての形態規定の地位も、もはやほぼ明瞭となる。

既に述べたやうに流通手段としての貨幣の規定は、既に一方に價值尺度を前提し、他方に「貨幣」を、「固有の意味での貨幣」を豫想してゐる、乃至は前提してゐる。だが、それにも拘らず、「流通手段」なる規定のもとにおいては、「單にこの流通自體の單純な形式のみが考察されるべき」であつた。そして「こ

の流通をヨリ以上に規定する諸々の事情は、この流通の外部に存し、従つて後に至つて始めて考察に入らる。<sup>2)</sup>蓋し、それは「ヨリ發展せる諸關係を前提する」からである。これが「純粹なる形態規定」の當然なる要求である。この純粹なる形態規定においては、「範疇」と同時に「法則」もまた、一つの純粹性において把へられることが要求せられる。「謂ゆる法則に關する經濟學者等の主張の大部分は、貨幣流通をその固有の限界内に於てではなく、ヨリ高い諸運動に依つて包攝せられ規定せられたものとして考察してゐる。」<sup>3)</sup>反對に、マルクスにおいては、「法則」はまづ以つてその固有の限界内において考察されることが要求されてゐる。「法則」がヨリ具體的なものに包攝せられて觀察されるとき、却つて混亂と紛糾とを呼び起し、謂ゆる「現象の皮表的な連絡の範圍のみをうろつく」俗流者の經濟學が生れる。それ故に、流通手段の純粹規定に對する要求を、マルクスは次の如く述べた。「かくの如きはすべて排除しなければならぬ。(一部は信用論に屬し、一部はまた、貨幣が再び現はれて來るところの、しかしヨリ以上に規定せられて現はれてくる) 諸點において考察すべきだ。」<sup>4)</sup>茲では流通手段(鑄貨)としての貨幣を考察すべきだ。」と。

ここで牢記さるべきこと。流通手段に關する「法則」は、法則としてそれが確立さるべきかぎり、それは貨幣流通の一般的法則でないのみならず、その法則は、貨幣がヨリ以上規定されて現はれる段階においては、そのままに實現し得ないといふこと。第一に、鑄貨従つてまた紙幣の流通に關する法則は、

「商品界の一般的流通と自らを區別する」ところの「國內的商品流通」において妥當する。かかる國內的商品流通は、歴史的にはそれ自身獨立的に存在し得たであらうが、發展せる近代資本家社會、更には世界市場の確立を前提しては、それは一つの「從屬的」存在であり、部分であり、一つの抽象的領域として出現する。この主體——發展せる資本家社會——を前提するかぎりでは、「比較的未發展の全體の支配的諸關係」たる國內的商品流通は、いまや「その全體がヨリ具體的な範疇によつて表現せられてゐる側面へと發展し」、そして、そこで、「一つの從屬的關係として維持」されるのである。かくて、「固有の限界内」において純粹に把へられた流通手段殊に紙幣の流通法則は、それ自身歴史的且つ自然的に具體的であり得るにも拘らず、その限界を突破した一般的商品流通の中では、ヨリ具體的の規定の中に立たざるを得ない。

(223) エンゲルス宛書簡 M-E Gesamtausgabe, ibid. S. 310.

3) ibid. S. 310.

## 5 價值標章流通に關する諸説の立場

さて吾々は主題に這入らう。

既に述べたやうに、インフレーションの、商品流通乃至貨幣に關するかぎりでの基礎理論は、まづ以



つて流通手段殊に價值標章としての「紙幣」の流通法則に關する。だが肝要なのは、インフレーションが紙幣流通の領域に起るからと云つて、紙幣流通の法則が貨幣問題としてのインフレーションの全基礎となるのではないといふことである。この問題は、要するに、紙幣流通法則をいかなる地位において把握するかといふ、これまで述べて来た方法的考察と密に關聯する。

「マルクス批判の常套手段だが、マルクスの體系をその個々の組織部分に分解し、その各の思想をマルクスの先際に歸せしめ、そしてお終ひに、どうぢやとばかり、「では一體、真正正銘にオリチナルと云つていいのは何だらう？」と皮肉に問ひかくる。」<sup>1)</sup> かくいふマルクス批判家ヘルベルト・ブロック自身が、マルクスの貨幣理論をマーカンティリズムや生産費説や數量説や銀行説に片々に打碎くのはいと容易であると宣べてゐる。<sup>2)</sup> この調子ではマルクスの紙幣理論が「數量説」を取り入れたとなす主張は、恐らくマルクス批判家には當然すぎるほどの結論であつたらう。

然し乍ら紙幣流通には特に「數量説」が妥當するとなす主張は、ただにブルジョア經濟學者たちのみに止まらない。ヒルファディングがこの問題に對してとつた態度はむしろ有名である。<sup>4)</sup> 彼のマルクス紙幣理論解釋は、要するに、紙幣流通について價值尺度としての金の機能をも排除せんとしたかぎり、その説は根本から數量説と何ら選ぶところなきに至つた。この限り、ただに貨幣理論一般についてでなく、紙幣流通に關するかぎりでも、ヒルファディングの解釋は依然として抜き難い誤謬の上に立つことを吾々

は確信する。

だが、紙幣流通が現象の表面上において「數量説的」な運動を行ふことは否定し難い。が、さればと云つて、紙幣流通の法則が理論として數量説の上に立つとは云へない。ヴァルガは、戦前に於て「……數量説は、粹純の不換紙幣本位制または自由鑄造禁止銀本位制に對してだけは正しい」<sup>5)</sup> (一九一一年)と云つたが、それは單に不換紙幣流通に數量説的現象が妥當するといふに止まり、ヒルファディングがその「金融資本論」で遂行したやうに、事實に於て紙幣流通の原理を數量説をもつて基礎づけた譯ではなかつた。否、言葉の上では彼は、戦後になつてであるが、紙幣についても數量説の不可なる所以を指摘したと云はれる。<sup>6)</sup> 所謂マルクス主義者ではないが、フリードリッヒ・ポロックは、戦前のヴァルガ同様、マルクスは「數量説の妥當する領域として強制通用力ある國家紙幣の流通を證明してゐる」と書いてゐるが、ここでも説明が缺けてをり、必しも紙幣流通を數量説の上において見たとは非難し得ないやうだ。

<sup>1)</sup> H. Block: *Marsche Geldtheorie*, 1926, S. 33.

<sup>2)</sup> *ibid.*, S. 101-102 (ポロックはマルクス紙幣論のみならず貨幣論の全體が數量説的基礎にあることを主張するものの如くである。尙、同書 S. 111-112 その他参照。)

<sup>3)</sup> „Finanzkapital“ S. 22 ff.

<sup>4)</sup> 拙譯『金と物價』頁 四。

<sup>5)</sup> エルードウィヒ『金及び商品』(柳田民藏氏譯)大原社會問題研究所雜誌第十三册一八四頁参照。

然しながら、これらの場合にあつても、紙幣流通の法則としてマルクスが「鑄貨・價値標章」の一節において展開する法則が、紙幣流通の法則としては普遍的性質をもつといふことに對しては、恐らく問題をさしはさんではゐない。といふ意味は、紙幣流通に於ては貨幣流通の法則は逆倒するとマルクスによつて書かれたテーゼが、紙幣流通の現象については如何なる場合にも適用されるとする解釋が、一般に取られてゐるといふのである。従つて、この解釋では、紙幣法則は紙幣インフレーションの原理に對して全基礎を與へることとなる。ベネディクト・カウツキイは先頃發表した論文「金本位かインフレーションか？」<sup>1)</sup>において、インフレーションの基礎を次の如く考へた。

「金價値からの離脱は、金兌換が停止せられ、そして商品流通にもとづかざるところの變化が貨幣量に起るとき、はじめて現はれる。教科書的な例をあぐれば、國家支出をまかなうための紙幣の増加である。しかし、銀行券に對する私的な要求も、もし、それが商品流通から出現しないかぎり、同様にまたインフレーションを導き得る。かくて例へば、戦後のドイツ・インフレーションの間にフーゴ・スチンネスが融通手形(だから商業手形ではない)をやりくつてライヒス・バンクに向けて要求したその投機資金用の紙幣が、本質的に貨幣減價を促進したことは周知である。商品流通の要求を越えて——紙券が過度に發行せられる結果は、前に引用したマルクスの法式に從つて容易に計量することができ

る。(引用されたマルクスの法式は、「流通過程の或る一定の期間にとつては、流通手段として機能する貨幣の數量は、諸商品の價格總額を同一稱呼の貨幣片の流通回數で割つたものに等しい」)「紙幣の實際の總價値は、その名目價値がどうであらうと、もし紙幣なかりせば商品流通のために要求せられるであらう金の總價値によつて決定せられる。」<sup>2)</sup>金若しくは金と同價値の銀行券に對する紙幣の減價は、かくしてその分量と直接の關係に立つ。」<sup>3)</sup>

ここに注意を要するのは、ベー・カウツキイは、いまマルクスの紙幣流通法則をそれ自身として論じてゐるのではなく、ヨリ具體的に、インフレーションにおける紙幣の運動を述べてゐるのだといふことである。このベネディクトの叙述は、その引用句にも示されてゐる通り、その父カール・カウツキイの考へと根本において等しい。カール・カウツキイは、嘗て戦後の過渡經濟に關する述作<sup>4)</sup>の中で、紙幣減價の問題を取扱ふに際し、ヨリ具體的な關係を考慮に入れ、殊に對外關係をも考慮に入れてこの問題に觸れてゐる。さてそこでの問題は次のやうな點に發してゐる。紙幣減價の場合には労働者の實質賃銀は下落する。労働者はここでは不可避的に收奪される。が、その限りではこの貨幣減價によつて第一に利益するものは外國の搾取家である。然しまたその活動領域が國內市場だけに止まり世界市場とは全く關係のない國內資本家も利得する。蓋し外國との貿易關係をもつ資本家は貨幣の内外における價値の開きの間の絶えざる變動のために常にその利得をおびやかされるから。……かういふ事情を證明するため

に、カウツキイは、紙幣流通の内外における聯關を次のやうに述べるのである。云ふまでもなく吾々當面の問題は、擗取關係の如何にあるのではなく、流通それ自體の把握にある。さてカウツキイは述べる。

「世界市場にあつては依然として金で支拂はれねばならぬ。いま商品生産の發展してゐる或る國が、外國と交通することになり、彼れに商品を送り、彼から商品を受けるといふことになるから、茲に觀察してゐる紙幣經濟の場合には、この國には二種の價格が、金價格と紙幣價格とが、出来る。後者は國內の取引に通用し、前者は外國との取引に於て通用する。これ等二種の價格は、相互に少しも緊密な關係に立つてゐない。金の價值は實際上短期間には決して變化しない。これに反して紙幣の價值は、それが流通界の要求の限界以上に發行せられるかぎり絶えず動搖する。それ故に、個々の紙幣の價值は、もうその代理としてその紙券に表現された額面によつて作用すべきであつた金量の價值によつては決定せられない。それは、今やこの貨幣の市場價值をもつと下落せしめるやうな新しい紙幣の束が引つづいて市場に投げ込まれないでも、動搖する。紙幣は何ら內的價值をもつのではない。その總量の價值は、流通せる商品價值の總量によつて、また貨幣の流通速度によつて、即ちヒルフ、ディングの謂ゆる「社會的必要流通價值」によつて決定せられる。この價值は常に變化する。蓋し、貨幣の流通速度と同様に商品價值の總量なるものは不斷に變動し、また商品界の流通過程は忽ち擴大し

忽ち縮少するものだからである。

金の市場價值と紙幣の市場價值との間の比率は、だから、常なる變動に曝らされてゐる。この變動は屢々不意を襲ふて現はれる……」<sup>5)</sup>

さて吾々はこの叙述を少々立入つて吟味してみる。文章の後半は、ヒルフ、ディングの社會的必要流通價值の理論と全く一致するかに見ゆるが、必ずしもさうではあるまい。蓋し、カウツキイは根柢においては紙幣の價值が流通に必要な金量に依存することを認めてゐるのだから。(同書一二三頁)。いま、そのことを許して、殘る問題を拾へば、この見解は凡そ次の如く特徴づけられる。

一。茲では對外關係が問題に取入れられてゐるにも拘らず、そして、既に金價格と紙幣價格とが持ち出され、従つて、貨幣の對内價值と對外價值との關聯が當然に前面に表はれざるを得ないにも拘らず、ここにおける一切の問題が不思議にも完全に迴避される。曰く、「金價格と紙幣價格は相互に少しも緊密な關係に立たない」と。この迴避は、ただ「金價格」なる概念を創造することによつて達成されてゐる。それでは「金價格」とはいつたい何ぞや。價值尺度「金」の一定分量によつて表現された商品價值である。或る國が金兌換を停止し、紙幣を流通せしめるとき、この國の商品價格は紙幣の分量によつて決定され、紙幣の實際上の價值は同一名目の金の價值から離れる。このとき、この金との打歩を計量すれば、商品の金價格は得られる。戦後インフレーション時代のドイツの經濟統計は紙幣マルクの外に屢々

「金マルク價格」を掲げてゐる。この金價格は、云ふまでもなく、商品の價值と金自身の價值に變動がなければ不變である。かかる金價格は確かに紙幣價格とは全く別個の運動をもつ。だが問題は、かかる「金價格」はこの場合如何なる存在であるかである。紙幣流通下の國內においてはもとよりかかる「金價格」は行はれない。金價格は「外國との取引において通用する。」かう、カウツキイは云ふ。これが問題である。もしさうならば、爲替相場の變動といふものは別段の問題とはならないであらう。例へば、金本位の時に百圓の内地價格をもつ商品が、兌換停止後紙幣が必要流通額の二倍に膨脹したために二百圓に騰貴しても、又、紙幣量が五倍に膨脹して五百圓に騰貴しても、いつでもカウツキイによればその輸入價格は金價格五十ドル（金による百圓）であり、不變である。ところで紙幣國日本の輸入商人は金價格五十ドルを何で支拂ふか。彼は、日本の紙幣をもつて、該商品の相場（紙幣價格）が五百圓のときは五百圓（金價格百圓）を支拂ひ、紙幣價格二百圓のときは同じく紙幣二百圓（金價格百圓）をもつて支拂ふ。これを言ひ換へれば、爲替相場は紙幣の價值下落と同じ比率をもつて下落するてふことを意味するのである。これは又、國內でも國外でも價格は變らぬ、價格は一つである、といふことを意味する。だが兌換停止下の現實においては、これとは逆に、内地紙幣價格が不變でも爲替は激しく變動する。國內通貨の膨脹が起きず従つて國內紙幣物價に目立つた變動もないのに、日本の對米爲替は最近六〇％に低落し得た。この爲替は紙幣流通額とは獨立的に變動し得る。「外國との取引において通用する」といはれ

た不變的な「金價格」なるものは、外國貿易の實際の中には、實は何處を探してもない。それは國民の頭腦の中にのみあり得る。經濟統計表の中にのみあり得る。カウツキイは、かかる金價格を創造する煉金術によつて、貨幣の對外價值即ち爲替相場の事實を虚空の中に煙消せしめる。金こそ確かなものであり、爲替相場は影の如きものであると見えたのである。だが煉金師が創り出す金は、手を觸るれば煙の如く消える。ここに於ける「金價格」は、現實にはそれを通して取引せられざる價格である。カウツキイは國內は國內だけで紙幣を流通せしめ、對外的には純粹に金で賣買することを空想してゐる。國內流通の領域と世界市場とがここでは全く別々のものとなり、內的聯關なく現はれる。この二つの領域をつなぐものが所謂爲替相場であり、それが紙幣問題の核心だといふことは考へられてゐないのである。逆理的に云へば、カウツキイは紙幣流通に國境のあることを忘れてゐるのであり、彼は紙幣流通の領域として越ゆべからざる國境を無意識に踏み越えたのである。だから、對外的にも對內的にも同じ商品に對しては同じ量の紙幣をもつて支拂はれる。茲では爲替は送金技術に過ぎぬ。かうすれば貨幣の對内及び對外價值の分離と聯關をつかむ代りに、これらを紙幣價格と金價格とに轉換しつつ、しかもそれらを相互に無關係なものとして表明することができる。このことは、窮極において紙幣流通法則の抽象性に對する認識の缺除を曝露するものに他ならないのであり、それは次の第二點に關聯する。

二。金價格といふ觀念的な把握のもとに結局貨幣の對外價值と對内價值を同一視せざるを得なかつた

カウツキイは、對内及び對外價値の開きによる爲替景氣や投機の事實を證明するために、金價格が動かすしてただ紙幣價値の側のみが絶えず「動搖」するといふ現象を持ち出して来る。この紙幣價値「動搖」の主張が、カウツキイの不換紙幣に對する全不安を表現してゐるのだが、この點こそ、カウツキイがまさに盟友ヒルファディングに學んだものである。だが、第一に、この「動搖」は、紙幣價値については本質的な問題ではない。この動搖には限界がある。マルクスは、この紙幣價値動搖の問題については、「流通の水路が……商品流通の變動で氾濫するかも知れぬ。さうなると最早や限度はなくなつてしまふ」と云つてゐるが、その後で直に、それが紙幣流通の現象としては依然としてヨリ以上の「内在的法則」によつて貫かれることを説いてゐる。

「しかし紙幣は、たとひそれがその限度を、即ち流通し得べき等しき稱呼の金貨の量を、超過するにしても、一般的信用破壊の危険を度外視すれば、商品世界の内部においては、依然としてただその内在的法則によつて規定されるところの、従つてまた他のものにより代理され得るかぎりの、金量を表示するにすぎぬ。」

紙幣流通の場合に「動搖」するのは對内價値ではなく、却つて對外價値（爲替相場）であり、對内價値は紙幣の數量によつて規定せられる。しかるに、カウツキイにおいては、この紙幣量の不變なるにも拘はらずその價値の動搖することが、紙幣經濟の維持され難い唯一の根據となつてゐる。だが、國內流

通の領域について云へば、紙幣は、その數量の膨脹することによつてのみ減價する。従つて、紙幣數量の膨脹が繼續される限り紙幣流通それ自體の廢棄に至るわけであるが、いま對外價値の變動をただ一面的に紙幣流通量のみ依存すると見る限りでは、紙幣數量の膨脹が紙幣の對外價値の變動に依存する他の一面を受け入れることが出来ない。しかも紙幣數量の繼續的な膨脹は國內流通そのものからは必然的には起り得ない。だから、カウツキイにおいては、紙幣減價の必然性は、紙幣流通そのものの過程からは起り得ず、従つて紙幣流通の廢棄は紙幣價値下落にもとづかず、ただ紙幣價値動搖にもとづく。かくて、紙幣に對する不安がその價値動搖に集中せられ、直接にその分量に向つてゐない。

このことは、要するに、カウツキイがマルクスの價値標章の流通法則を一つの抽象性におけるものとして捕へず、却つて對外關係を取入れたヨリ具體的な場合にもそのままに妥當せしめんとしたためであり、前の問題と同一の方法論的缺陷の上に立つことを示す。

① „Goldwährung oder Inflation?“ Der Kampf Nov. 1931.

② K. Kautsky: Sozialdemokratische Bemerkungen zur Uebergangswirtschaft. 1918, S. 123.

③ Der Kampf. Nov. 1931, S. 486.

④ 上掲 Sozialdemokratische Bemerkungen.

⑤ Kautsky: ibid. S. 125. 傍點は私。

⑥ 『資本』第一卷譯頁 二二一。

同じ問題に關して吾々は最近の一文獻を取上げてみる。「ディー・インターナショナル」誌所載「マルクスの貨幣論に就て」(Ch. W.: Zur Marxschen Geldtheorie)。

その第三章は「インフレーションの本質」といふ問題に當てられてゐる。そこには紙幣價値の變動について八個の設例が擧げられ、それが討究されてゐる。吾々は假にその一例を取り上げるだけに止めるのであるが、その設例の前提としてまづ次の事情が規定せられる。

「假りに、現に流通せる商品價値が生産手段、消費手段、運輸手段、並びに土地をも含めて一千億マルクに達すると前提する。いろいろの商品の流通の度数は違つてゐるに相違ない。一部の商品量は一年間に幾回も流通し、他の部分は數年間にたつた一回流通に現はれるであらう。また現金なしの取引を考慮に入れて、これら商品の流通に要する流通手段を五十億マルクとする。この五十億のうち半分は金貨 (Goldstücke) で、他の半分は金貨と同價値の紙幣 (Papiergeld) だとして置く。」

以上の假定のもとに、「紙幣相場は如何なる事情のもとに、どう變化し得るか」が問題とされる。いま「第二例」とされてゐるものを取つてみる。それによると、好景氣でまづ流通商品量が増加する。流通紙幣量並に貨幣の流通速度には變化がない。さて、

「商品量は今度は一千二百五十億に、即ち二五%だけ多くなり、貨幣量は依然五十億であるとする。しかし今や流通は十二億五千萬の追加貨幣量を必要とするであらう。流通貨幣量は當然六十二億五千萬

に増加しなければならぬ。しかし、いま國家即ち發券銀行は、少しも新たに銀行券を追加しない。さて茲にいかなる事態が起るであらうか。生産増加の結果は疑ひもなく外國貿易の増加となるであらう。そこで必要な追加貨幣量が外國貿易によつて國內に流入することが考へられる。また以前に退藏されてゐた貨幣も追加貨幣として流通に這入つてこよう。他方では、有價證券や手形などがますます支拂手段として機能を果たすやうになるであらう。しかし、それでもなほ均衡がとれなかつたとすれば、ここに流通しつゝある貨幣はパー(名目相場)以上に騰貴することにならう。……假にこの場合、手形發行の増加及び退藏貨幣の流入によつて七億五千萬だけ貨幣流通に流入され得るとする。さうすると尙ほ五億だけ不足するであらう。これが外國貿易によつて流入しないとすれば、金屬貨幣も紙幣もともにその相場は一時的に約一〇%だけ騰貴するであらう。かうした種類の例は幣制史に顧みられる。」

右の結論中直ちに浮ぶ疑問は、金屬貨幣(ここでは金貨)の相場が騰貴するといふ結論である。それ自身價値尺度であり價格の本位として流通しつゝある金の相場が、どうして紙幣とともに騰貴し得るのであるか。

ここに、論文の筆者は、最初粗雑なる規定をもつて出發したるにもかかはらず、知らずして次の前提の上に立つてゐた。一。金貨 (Goldstücke) 或は金貨幣 (Goldgeld) と規定しつゝ實は純粹に金鑄貨を前提してゐる。二。この金鑄貨の流通手段として機能する領域を純粹にその本來の領域に、即ち獨立的

な國內流通の領域に限定し、それを恐らく無意識に前提してゐる。かかる前提は、流通手段の機能が純粹に現はれる抽象的な領域が問題とされるときはじめて可能なのである。筆者が幣制史にその例ありといふのは、恐らく前世紀末におけるインド及びオーストリーにおける自由鑄造禁止銀本位の歴史などを指摘したものだと思はれるが、しかもその場合に騰貴した貨幣は金ではなく銀であり、のみならず當時は世界市場においては既に價值尺度としての金の地位が確立しつつあつた時である。この場合におけるルビーやグールドンの騰貴はいはば補助貨幣たるその地位から完全に説明し得られる。然るに、いま筆者が問題とする金においては、事態は全く異なる。ただかかる假定は、上に述べた如く流通手段の法則の抽象的な純粋な適用においてのみ起り得るのである。それ故に、筆者が、貨幣流通をかかる排他的流通手段の流通する抽象的限界において究明する場合にのみ、上の結論は正しいとも云へよう。しかるに事實においては、筆者はこれを支拂手形、信用、更に外國貿易（そこでは世界貨幣が作用する）までも導き入れた遙かに具體的な關聯のもとに展開した。ここにおいて金貨の相場騰貴といふが如き、發展せる一般的な商品流通の具體的關聯のもとでは起り得ない不合理を導くに至つたのである。

誤謬を明瞭に指摘するために、ここにわざわざ貨幣價值騰貴の場合の事例をとつたのであるが、根本の事態は紙幣價值下落の場合においても同様である。要するに筆者は、發展せる商品流通のヨリ具體的な關聯を前提しつつ、紙幣流通の抽象的法則をかかるものとしてではなく一つのそれ自身の普遍性にお

いて展開してゐる。かかる仕方における紙幣流通法則の展開は、更に如何なる結果を導くに至るか。次でこれを一般的に考察するのであらう。

- (1) „Die Internationale“ Nov—Dec, 1931.
- (2) Ch. W. Ibid. S. 532.
- (3) Ch. W. Ibid. S. 533. 傍點は私。

## 6 價值標章流通法則とその立てる諸條件

問題は新たに次の如く設定され得る。

價值標章乃至紙幣の流通に於ては「眞實の貨幣流通の諸法則が轉倒し逆立ちせるかに見ゆる。」茲では、流通する貨幣の分量が諸商品の價格の落騰につれて増減するといふ一般法則ではなく、價格が流通する紙幣の分量につれて騰落するといふ特殊法則が妥當する。物價が騰貴するから通貨が膨脹するのはなく、ここでは通貨が膨脹するから物價が騰貴するものでなければならぬ。……かうした紙幣流通における特殊法則は、一體、いかなる妥當性をもつか。これが當面の問題である。そしてこの問題は、當然に、紙幣インフレーションの可能性並びに必然性の問題に導かれる。

これまで紙幣流通に關するマルクス説の解釋について吾々の見來つたところでは、いづれも、この特

殊法則をそれ自身の地位から乃至それ本来の領域から引離して、ヨリ具體的地盤の上でその運動法則をそのままに眞理として是認しようとする傾きにあつたことを知る。そこで、そこに導き出される一つの主張は、不換紙幣流通の場合には、いかなる時、所においても、紙幣數量が増加しなければ物價騰貴は起らぬといふ固執である。しかも、まさにその通りに、マルクスもまた書いてゐるやうに見ゆる。マルクスはこれを『流通に内在する諸法則』と云ひ、この關係を次の設例をもつて記述する。

『商品流通のために必要な金の總額は一、四〇〇萬ポンドであり、國家は一ポンドの稱呼を有する二億一千万の紙幣を流通に投ずるものとすれば、この二億一千万の紙幣は千四百萬ポンドの金の代理物に轉化せしめられるであらう。これは、國家がポンド券を金の十五分の一の價値しか有たない金屬の代理物にしたのと、あるひは、以前の十五分の一の量目の金の代理物にしたのと同じことである。變動したものは價格の本位の命名だけであらう。價格の本位の命名は云ふまでもなく慣習的のものであつて、その變動が貨幣の金品位の變動によつて直接に生ずるか、紙幣の數が新らたなる低き標準のために必要なだけ増加することによつて間接に生ずるかは、どうでもよいことである。今やポンドと云ふ名稱が以前の十五分の一の金量を指示してゐるのであるから、總ての商品價格は十五倍に騰貴し、従つて今や、以前千四百萬のポンド券が必要であつたやうに、實際二億一千万ポンド券が必要であらう。價値標章の總額が増加すると同じ割合で、個々の各標章の代理してゐる金量は減少するであらう。』

う。物價の騰貴は、價値標章がその代りに流通しようとする主張してゐる金量と價値標章とを強制的に等置するところの、流通過程の反作用に外ならぬ。』

この叙述につづけてマルクスは書く。『價値標章が——紙であらうと品位の惡化された金および銀であらうと——鑄貨價格に従つて金および銀に代理する比率は、それ自身の實材によつて定まるのではなく、流通に存在してゐるその分量によつて定まる』と。マルクスは、『この關係を理解することは困難だ』といひ、またそれは『普通の人間の理解には矛盾』した關係として現はれると説いて次の如く云ふ。『金が單に觀念されてゐるのではなく、一つの現實的な物として他の諸商品と並んで存在せねばならぬところの、流通手段としての金の機能においては、その實材はどうでもよいものとなり、總てはその分量に依存する。尺度の單位によつては、それが一封度の金であるか銀であるか銅であるかが決定的である。しかるに鑄貨をこれらの尺度單位の各々のそれぞれの現實化たらしめるものは、單なる數量であつて、鑄貨自体の實在が何であらうと關係はない。』更に語をついで、『だが、單に思考されただけの貨幣にあつては總てがその物質的實體に依存し、感覺的に存在する鑄貨にあつては總てが觀念的な數量關係に依存する、といふことは、普通の人間の理解に矛盾してゐる』と。

なぜこの關係の理解が困難であるかは、この關係がここでは純粹に抽象的に、即ち流通手段たる機能が、この機能が純粹に活動し得るための地盤をなす一定の段階の上で、規定されてゐるからに外ならぬ



い。例へば、現實に——即ち發展せる世界市場を前提しては——或る一國における金鑄貨の價值がその増發のためにその實質價值以下に下落するといふことは、事實として起り得ないと云はねばなるまい。しかし、この現象は一定の條件の上では起り得る。例へば、國境によつて遮斷された孤立的な一國家と、そこで金鑄貨が排他的な流通手段として機能することを條件とすれば。マルクスはここで、流通手段なる機能をその純粹なる形態規定に於て把握したのである。純粹なる形態規定は、しかし、それ自身必然的に流通の一定の發展段階に立たなければならぬ。さうだとすると、マルクスは、この流通手段なる範疇とその運動法則とを事實いかなる條件のもとに把へてゐるか。

一。流通手段を把へるに當つては、すでに流通の「理論的準備過程」たる價值尺度の機能は前提せられる。價值尺度がなければ、價值標章によつて代理されべき貨幣(金)の分量の規定は把へ得ないし、従つてそれを基礎とする價值標章の運動は規定され得ない。かくて又、この價值尺度が確立する基礎領域としての「一般的商品流通」の領域が前提せられる。

二。然し、次でこの一般的商品流通が共同體乃至國家形態へ包括されるヨリ具體的の領域が、直接に前提される。即ち流通の領域が、國境に圍まれた國內的商品流通として商品界の一般的流通から自らを區別したものでなければならぬ。「貨幣が單なる流通手段として獨立化するの」は、一般にただ國內流通の範圍にのみ限られる。<sup>3)</sup>流通におけるかかる發展段階が必要とせられるのである。これ、鑄貨が「國

家の制服」をつけてゐる所以であり、鑄貨は價值標章へと發展し、價值標章は強制通用力ある國家紙幣において完成する所以である。

三。この段階における貨幣の運動は、「ヨリ發展せる具體物」——發展せる世界市場、發展せる一般的商品流通の領域の上——においては、「一つの從屬的關係として維持」せられる。國內流通はもと／＼一般的商品流通を前提しそれを國家形態のうちに包括したものに外ならなかつたが、流通のヨリ複雑なる發展においては、國內流通領域の發展とともに、その基礎であつた一般的商品流通の發展を齎す。所謂世界市場が展開する。國內流通はここでは逆に世界市場へ依存の關係に立つ。この意味に於いて、流通手段の運動は、それをヨリ多面的な關聯において包括するところの、發展せる流通の段階たる世界市場を豫想してゐなければならぬ。

價值標章の運動法則は凡そ以上の如き規定の上に立つてゐる。そこで、流通貨幣の數量が商品の價格總量に依存するといふ流通の一般法則については、「この法則は一般的に妥當する」と云つたマルクスが、またこれを「最も重要なる經濟法則の一つである」と云つたマルクスが、價值標章の流通については、次の如く、謂はば假象として、現象として、これを總括するのである。即ち、「批判」第二章「鑄貨、價值標章」の節を結ぶ最後の一齣において、マルクスは書く。

「價值標章の流通に於ては、現實の貨幣流通の諸法則が轉倒して逆立ちをして現はれる。金は價值を

有するが故に流通するのだが、紙幣は流通するが故に価値を有する。諸商品の交換価値が與へられてをれば、流通する金の分量はそれ自身の価値に依存するが、紙幣の価値は流通するその分量に依存する。流通する金の分量は諸商品の価格の騰落するにつれて増減するのに、諸商品の価格は、流通する紙幣の分量の變動するにつれて、騰落するかに見える。商品流通はただ一定分量の金鑄貨を吸収しうのみであり、従つて通貨の交替的な收縮膨脹は必然的法則として表はれるのに、紙幣はいくら膨脹しても流通にはいり込むかに見える。國家はその名目上の内容より僅かに百分の一グレインだけ少ない鑄貨を發行しても、金銀鑄貨を偽造したことになり、従つて流通手段としてのその機能を攪亂することになるのに、鑄貨名以外には何等の金屬をも有しない無価値紙幣を發行しても、全く正しいことを行つたことになる。金鑄貨は明かにただ、諸商品の価値そのものが金で評價され、または價格として表示されるかぎりでのみ、諸商品の価値を代理するのであるが、価値標章は商品の価値を直接に代理するかに見える。<sup>54)</sup>

マルクスはここで価値標章の諸運動を「かに見える」(scheinend) <sup>55)</sup> といひ、一つの假象としての表現を用ひてゐる。殊に曰ふ、「諸商品の価格は、流通する紙幣の分量の變動するにつれて騰落するかに見える」と。この表現を、「一般的に安定する」と規定される一般法則と對比するとき、既に茲に、ヨリ具體的な段階を前提する流通が、ヨリ眞實の流通の姿が、豫想されてゐると解するは無理であらう

か。

- (1) 『批判』譯頁 二四〇—二四一。
- (2) 同右 二四二。
- (3) 同右 二三四。
- (4) 同右 二三四—二四四。
- (5) Stone の英譯では Seem to となつてゐる。

## 7 インフレーションの可能性と必然性

問題を進める。

さきに吾々の見た諸見解では、世界市場を前提する現實なる紙幣流通の解釋について、殊にインフレーションの如き具體的な過程のマルクス主義的解釋について、価値標章の運動に關するマルクスの純粹なる分析が直接的に適用せられてゐた。そこでは、要するに、紙幣流通の場合には通貨膨脹して物價騰貴するといふ法則が文字通りに適用されるとするにあつた。しかし、この法則の一面的展開にはその方法論的な性質にもとづいて超ゆべからざる必然的な限界がつきまとう。

一例をあげてみる。

もし紙幣の總量が適當なる限度の二倍に達すれば、例へば十圓は一匁の金を表示することになり、以

前十圓の價格に表現された商品は今や二十圓の價格表現をもつやうになる。同様に、紙幣流通量が膨脹せる額の二分の一だけ減少するときは、同じ價値の商品は十五圓の價格をもつ。要するに「變動したものは價格の本位の命名だけであらう。」その價格の變動が、貨幣の金品位の變動によつて直接に生ずるか、或は紙幣の數量が新たなる低き本位のために必要なだけ増加することによつて間接に生ずるかは、どうでもよいことである。』<sup>1)</sup> 新たなる紙幣の束が流通に投げ入れられるならば、ただ價格本位を變更せしめる結果を生むだけで、流通はそれ自身としては再び安定する。蓋し紙幣量と物價とは、比例的に一つの均衡の關係を保つのである。そこで、もしこの法則が紙幣について普遍に妥當するとなれば、凡そ次のやうな結論が導き出されねばなるまい。

一。紙幣の膨脹及び収縮による物價政策が國家により自由に且つ安全に遂行され得る餘地が存する。更には、紙幣本位制が永續的に維持せられ得る。蓋し、「紙幣は正しき分量で發行された場合には、價値標章としての紙幣に特有でない運動を行ふ」のみならず、若し紙幣量の増減の操作が國家の力にあるならば、紙幣發行が正しき適當の限度を超えた場合にも、なほその量に應じて貨幣價値の安定を保ち得る筈であるから。

二。従つて、國家は過度の紙幣インフレーションの發展を防止し得なければならぬ。蓋し、紙幣の流通は、それだけとしては單に本位を引下げたのと同じであり、新たなる紙幣膨脹の必然性をそのうちに

含まないからである。

然るに歴史と現實とは吾々に示す。一、紙幣インフレーションの進展過程は、殆んど常に國家の意志に反して展開し發展する。二、資本家經濟に於ては紙幣本位の必然性は、乃至は長期に互る維持の可能性すらも、現實にはあり得ない。差當り對外支拂手段としての金の不可缺といふ事情が直接的にそれを示してゐる。また紙幣の流通量収縮による物價政策も容易に遂行され得ない。それは、既にインフレーションが國家の意志に反して發展する事實によつても見られる。だが、果してさうならば、吾々はこの事實をマルクス紙幣論の上に立つて如何に理解すべきであらうか。

吾々が上にマルクス貨幣理論の方法論的な管見において示した仕方に誤りがなければ、この紙幣理論、殊に紙幣の運動法則——即ち排他的なる流通手段としての定在における貨幣の運動法則——は、これをヨリ發展せるヨリ具體的な流通の段階において、それに從屬せしめて把握するとき、始めてその運動の眞實に近づくであらう。それによれば、價値標章の運動は、いまやこれを「固有の意味の貨幣」の運動に從屬せしめて把握されねばならない。かくすることによつて、「國內流通の領域」は、發展せる「商品界の一般的流通」において、「世界市場」との聯關において、「一つの從屬的關係として維持」され、前者は後者の「側面へと發展」し、しかもそこで、かかる國內的流通と價値標章とは、「その内面的及び外面的の完全なる發展」に達するであらう。

商品界の發展せる一般的流通領域——世界市場の舞臺に立つとき、貨幣はただに國內流通における價値をもつばかりでなく、また對外價値（爲替相場）をも持つ。貨幣の對内價値と對外價値との分離は、價値標章が貨幣として國內に流通するとき完全に成立する。そこで、紙幣流通の單純なる問題に對して、ここに新たに貨幣の對外價値の問題が交叉する。問題は、かくして、一、貨幣の對内價値と對外價値との交渉。二、かかる交渉の根柢に見られる流通の内在的關聯。さうしたものへと發展するであらう。

これらの問題は、先づ貨幣の對外價値そのものは何を窮局の據り所として決定せられるかといふ問題から這入らねばならぬ。對外價値は云ふまでもなく外國爲替に現はれる。外國爲替相場は國際支拂差額によつて決定されると云はれる。だが、そのことは貨幣の如何なる職能と關聯してゐるであらうか。外國爲替は世界貨幣「金」の一般的支拂手段たる職能にもとづく一つの信用貨幣であると見られよう。だが「信用貨幣それ自身は、その名目價値の高さにおいて絶對的に現實的貨幣を代表する限りにおいて貨幣たり得る。」或る國が金本位を停止し、金の海外輸出を禁止し、そしてそれによつて恐らく爲替相場が下落するならば、外國爲替はもはや本來の信用貨幣たることを止めるであらう。然し、このとき、外國爲替は、この國の國際貸借が平衡乃至それ以上の順調にあるならば、事實その名目價値の高さに於て現實的貨幣を代表し得よう。然るに、國際貸借の平衡乃至支拂差額そのものは、當該國資本主義の生産

力の發展とその世界市場における地位とに依存するものであり、しかもその直接的な——少くともその主要なる——表現は當該國の保有する絶對的商品金を措いてはない。そこで、たとへ國際貸借が現在の國に支拂超過であつても、その超過が、當該國の擁する金によつて決済されるかぎり爲替下落せざること云ふまでもなく、たとへ金本位を停止してもその保有する金量が相對的に巨額であるか、乃至はその資本主義的發展が非常に好調子にあるといふやうな場合であつたならば、多少の支拂超過があつても窮局における爲替の金決済は事實的に保證されてゐるわけであり、爲替相場の下落は起り難いであらう。だが、資本家國が、金本位停止、對外金輸出禁止の政策に出づるのは、戰爭その他の非常の場合でないかぎり、正に國際貸借逆調のときであり、金保有において比較的劣弱の状態にあるときである。この場合には、爲替の金決済に對する可能性は、事態の好轉なきかぎり愈々奪はれる。嘗ての「信用」貨幣は、事實において完全な信用を保ち得ない。蓋し、資本家社會においては「信用」は金の重量に還元せられる。

さてこの際、爲替によつて代理される關係にあるところの金量なるものは、國內流通紙幣が代理するところの金の必要流通量の觀念的、的とは異り、現實なる金量である。この現實なる金量の減少に應じて——少くともそれを主要なる指標として——爲替の相場は下り、貨幣の對外價値は下る。だから、この方面からは、貨幣の對外價値は、國內流通に必要な金量の關係からは、直接には獨立して定まると

云へる。貨幣の對内價值は、紙幣の分量が國內流通に必要な量を超えることにより、その超過する割合によつて減價するが、對外價值はこの關聯とは一應別に、現に國內に保有される金量（それによつて表現される當該國資本主義總體の發展傾向）を基礎として動く。そしてこの現實の金量には必要の限度といふものではなく、この關聯においては多々益々辨すること云ふまでもない。反對に、紙幣の國內流通に關する限りでは、現實の金保有は必然的には要求せられない。この關聯から、吾々は、紙幣の對外價值の下落は、その對内價值とはまづ獨立に生起し得ることを結論し得る。

いま吾々は、かかる對外的價值の獨立な下落から考察を進める。かくてここでの問題は、かかる對外價值の下落は國內流通紙幣とは如何なる關聯に立つか、といふことになる。

吾々は最近年における資本家諸國の經驗をここに移して、金本位停止と同時に爲替相場場の下落を將來した事例を典型的に考へてみる。金による對外支拂の停止とともに、爲替相場が暴落した。假りに、昭和六年十二月の日本の經濟情勢が既にヨリ劣悪であつたため對米爲替が忽ち二十ドルに低落したとしよう。このとき、もし國內の物價が紙幣流通量に變化なきため従前通りに保たれてゐたとするならば、日本の商品はこの爲替下落を通じて盛んに海外に流出しよう。むしろこの輸出の増加は爲替低落の程度如何によることであり、現在の如く高率關稅が爲替ダンピングを有効に防止する事情のもとでは、輸出の激増を見るまでの對外價值の低落程度は可成り大きいものでなければならぬ。だが既に吾々の見たやう

に、この對外價值の低落は國內の紙幣流通量から先づ獨立に起り得る。扱ていま紙幣の對外減價が激甚なるに従つて、日本商品の輸出は激増し得るが、このことは、單に日本の生産物の海外流出を意味するのではなく、それが價值以下に貨幣化される過程を通して、多かれ少かれ日本において生産されつつある餘剩價值乃至價值の海外流出となる。むしろ謂ゆる滞貨となつてゐる價值として實現される見込の全くなかつた商品が、とも角も輸出されるといふことならば、それが實現する價格の如何にかかはらず、その國の資本家的生産に對しては消極的に好結果をもつであらう。しかし、さうした過程は固より一時的に止まるであらう。暫らくにして生産の車輪は新たに廻轉しはじめ、新たなる生産物の輸出は始まる。それは表面上新たな利潤の流入と見えるし、事實個々の資本家の帳簿上の計算は利益をあらはしてゐる。しかし、それがこの資本家にとつて利益であるのは、この資本家がその輸出した商品の對價として獲た貨幣（紙幣）を、その紙幣が對外的に下落したと同程度には未だ騰貴してゐない國內の商品に、勞働力に、對置せしめる限りにおいてのみである。しかるに、この國の資本家的生産の全過程にとつては、云ふまでもなく輸出は等價物との交換においてなされたのではない。それは反對給付なき價值の流出を條件として促進されるものにほかならない。このことは、他方における輸入原料品の騰貴を考慮の外においても、窮局のところ、それだけで支拂差額を更に悪化せしめる結果を——間接的に——導く一モメントたり得るであらう。しかも他方に、輸入原料品の騰貴は固より必然に附隨してくる。されば、

かうした流出増加によつて賃借が改善せられるのは單に一時的の現象にすぎない。かくして、もし内地物價が不變のまま紙幣の對外價值下落が續くならば、日本資本主義が生産する剩餘價值乃至は價值の一部は流出し、そのこと自身更に對外的な貨幣減價を導かざるを得ないだらう。

さてこの事態に直面して日本の資本主義が執り得る唯一の方策は、物價を引上ぐるか、紙幣を造出するかによつて、この外國資本の收奪に對抗せしめるにある。しかも、このことを、日本資本主義は、恐らく次の二つの過程を経て必然的に遂行することを餘儀なくせられるであらう。

一。爲替下落に應じて政府並に私人の對外債務支拂額は膨脹する。この膨脹は、政府をして公債發行等の方策による通貨の造出へと導く可能性をもつ。だからここでは爲替下落は直接に紙幣の増發を刺戟する要因をつくる。

二。爲替下落によつて、その生産品を生産價格以下に賣却せざるを得ない資本家、即ち從來の手取金五十ドルがいまや二十ドルに減少した輸出業者—産業資本家は、勢ひ生産品の内地貨幣名價格を引上げざるを得ない。一方、輸入原料品の値上りは、必然これに拍車を加へるであらう。かくて輸出品並に輸入品の値上りは、一般物價の上昇を促す。もしこの際、流通紙幣量の不變のために内地物價が上騰しなかつたとすれば、商品價值以下による外國資本家の收奪は續けられるであらう。この收奪がつづくかぎり、物價の上騰はどうしても強要されざるを得ない。かくて、茲では、對外價值下落は直接に内地物價

の昂騰を刺戟する原因となる。

この物價騰貴がここで内地流通紙幣量から先づ獨立に強要せられるといふ所以は、この物價騰貴そのものが貨幣の對外價值下落の獨立の性質を通じて起るからである。言ひかへれば、この物價騰貴は、紙幣の對外價值を媒介として外國貨幣の本位と結びついてゐるからである。従つて紙幣の對外價值が獨立的運動をたどる限りにおいては、この物價騰貴は、内地の紙幣流通量からの獨立性とそれ自身の自己規定性ともつ。この運動は、かくして國內紙幣流通の限界内において見られた抽象的な物價運動とは一應異なる平面上立つてゐる。

さて、以上に見た貨幣量を通じてと物價を通じてとの二つの原因系列は、ここで交互作用を行ふ。

一。上の第二の過程から起る物價騰貴は、通貨の増發を刺戟する。増大する商業手形の割引を通じて、また、物價騰貴を原因とする國家財政支出の増大を通じて。一般に金融逼迫と信用不足を醸成することに依つて。インフレーションの展開過程においてさへこの信用缺乏の聲は高し。

二。他方において、國家の紙幣造出が、直接物價騰貴へと作用する過程は、改めて云ふまでもない。かくて二つの原因系列は、ともに紙幣のヨリ以上の對内價值下落へと導く。

以上、貨幣の對外價值下落の側面から來る紙幣の對内價值下落の過程を見たわけであるが、むろん、貨幣の對内減價が直接その分量増發を原因とする今一つの過程は豪も否定されなければかりか、紙幣の増

發そのものが却てその對外價値の破壊を促進する過程もまた改めて云ふまでもない。そのことは本論文においては當然に前提されてある。だが、ここで重要なのは、その國內流通紙幣の法則のみがかかる關聯のなかを排他的に作用するとは見るを得ないといふ點である。後者の法則の下では物價騰貴は先づ紙幣増發を俟つて始めて起り得る。然るに紙幣の増發そのものは國內の單純なる流通過程そのものからは必然的には起り得ないし、また繼起し得ないであらう。然らばここでは紙幣價値の繼續的の下落は可能的であるにすぎない。しかるに對外價値の運動を導入するとき、茲に始めて通貨膨脹がまづ紙幣減價そのものを原因とする方面をも認めざるを得ない。謂ゆる紙幣膨脹＝紙幣減價の過程の端初が以上二つの原因系列の何れの側から惹起せられるやは具體的な事實の問題であること云ふまでもない。ここに取扱はれる一般的な理論の上では、その何れの場合もあり得るといふのはあはるまい。一旦惹起せられた紙幣の膨脹は、一方に紙幣の對内價値を下落せしめるとともに、他方にその對外價値を低落せしめる。もし對外價値下落の度が對内價値のそれよりも大であれば、それは對内價値下落＝紙幣増發へと反作用する。それは、資本の國外逃亡や換物運動の展開に伴ひ紙幣をして益々純粹なる排他的流通手段に轉化せしめることによつて促進されるであらう。かくてこの紙幣増發は爲替下落へと作用し、相互に交互作用を行ふわけであるが、もし國內流通そのものの側に繼起的に紙幣増發を起さしむるやうなヨリ具體的事情なきかぎり、紙幣膨脹は、窮局のところ、對外價値の下落がつねに對内價値の下落を越えんとすると

きのみ繼起的に進行し得るであらう。そこで、この場合における紙幣膨脹の發展傾向は、この對内價値を越ゆる對外價値の低落の大きさ並びにテンポ等の具體的事情に依據すること云ふまでもない。従つてその發展傾向は、國家の老成なる財政破綻を直接の原因とする場合とは異り、極めて、徐々たるテンポをとることもあり得よう。ただ、紙幣減價の窮局における必然性を云爲するといふことになるならば、紙幣の對外價値下落の必然性を問題とせざるを得ないであらう。

かくて最後に解明さるべき問題。かくの如き兩側面よりされる運動はその根柢において如何なる關聯の上に立つてあらうか。

國內流通の抽象的限界においては、紙幣は流通に必要な金量を代理し得るのであり、その限り生身の金を必要とせず、單に價格の本位としての金を觀念的にもち得れば足る。だが、紙幣の對外價値を通じて國內流通が發展せる一般的商品流通と關聯するかぎり、この關係は一の補足を必要とする。既に述べたやうに對外價値は詰るところ現實の金基礎に依存すると見なければならぬ。一方、國內流通が世界市場とつながるかぎり、紙幣の對内價値は對外價値を反映せざるを得ない。その對外價値が金基礎に依據して運動するかぎり紙幣の對内價値もまた窮局においては、現實なる金の基礎に立たざるを得ない。換言すれば、このことは、國內流通の紙幣の價値は、當該資本家國が世界貨幣金の一定量を現實的にか乃至は可能的に保有せざるかぎり窮局においてこれを同一名稱の金價値と等しく維持し得ないといふこと

を意味する。紙幣は固より兌換を要求せられるものではないが、しかも現實には金の基礎に立たざる紙幣はこの關聯を通して窮局において減價せざるを得ないことを意味する。茲に於いては、紙幣の對内價值は單にその流通分量に依據するに止まらず、更にその根柢において現實の金量に依存することが曝露せられる。價值標章流通の法則は、茲において、世界市場の領域の上でヨリ具體的な世界貨幣の機能の中に包攝せられると同時に、金を通じてそれは資本主義總過程に深く喰入るものであることが闡明せられる。<sup>〔註〕</sup>

〔註〕 價值標章の流通法則がより具體的には世界貨幣の機能に含まれる運動法則の中に包攝せられるといふ關係が無視され、かくて世界貨幣と價值標章との運動法則が個々別々に表はれるものとして把握されるとき、紙幣減價問題の本質は全く歪曲されねばならぬ。嘗てマルクス貨幣論の修正に對して開つたカール・カウツキは、この問題においては自ら修正主義者として現はれたかに見ゆる。彼は、戦後の過渡經濟の諸問題に對する社會民主黨の諸見解を述べた前掲の書物の中で、國際貸借と爲替問題を論じてゐる。問題は次の如し。……戦後の交戦列強は戦時中に作り上げた一切の不具畸形化した經濟を矯正しなければならぬ。國際貸借においては列強の多くが支拂超過であり、貿易は逆調である。加之、各國は金本位を停止し金の輸出を禁じてゐる。従つて、各國爲替相場は亂調に陥り、底なしに下る。この事態を矯めるためには、何よりもバランスを順調に引直さなければならず、そのためには輸出増進、輸入防止でなければならぬが、原料の輸入は國內工業發展のためやむを得ないし、製造品の輸入防止は他國においても同じ方策を以て應へられる。かくて輸出増進のためには原料輸入は絶対に必要である、それは輸出工業再建のため必須條件である。けれども、そのための支拂は、外國借款の困難なる現状

では益々バランスを遂に導くであらう。『だが、だからといつて絶望の要はない。外國に借款の期待ができないで、各國は尙ほその國內で、世界貨幣として使用され得る相當量の金を、退藏金を、調達することができ』——カウツキは始め「もし或る國に金がないならば」といふ前提で出發したにかかはらず、ここで退藏金を探し出してくるほどだからその量は恐らく貧弱であると見られよう——ところで、銀行家の貨幣論はこの蓄藏金に手觸れてはならぬと考へる。が、——カウツキによれば——吾々は、紙幣本位の擁護者をもつて任せずとも、また貨幣制度の不可缺の基礎が金であることを十分承認しつつも、しかも『金蓄藏への癡癡的な執着を完全な誤謬だと宣言し得る。かうした執着は、銀行券（茲では不換紙幣化した銀行券を指してゐる）の價值が、流通せる商品量の價值とその銀行券の分量とに依存するにあらずして、その金屬準備の高さに依存する、といふ誤れる見解に基づく。實際において、金保藏は、銀行券の價值を高く保つためにあるのではなく、對外支拂が相殺されざるかぎり金によつて決済されねばならぬとき、これに對する準備金として存在するのである。その任務といふのは、正に、他の方法では返済できぬ外國へ、金で支拂ふことを可能ならしめ、かくて國際貸借を均衡せしめるにある。……茲にカウツキによつて世界貨幣金の機能と紙券の流通法則とが全く別に引離されてゐるのを吾々は見ると、かくて、金が國內紙幣の流通と何ら關はるところなしと見るこの考へは、『金保藏が忽ち空になるかもしれない』危険を冒しても、豫備軍の運用を誤らない練達なる將軍のやうに、適宜に金の輸出を行ふことを奨める。ただカウツキにおいては、『國家がこの金輸出にあつて、その全部の金保藏を失くしはしないかと恐れる要がない。むしろそれは仲々無くないだらうといふ危険があるのだ。』何故かといふに、『各國に於ける貨幣流通は、一定の條件のもとでは、金或は金價值の一定分量を容れることができる』からであり、従つてまた『金を積み上げた國はその使ひ道に困る』からであると。ここでは、金の一般的支拂手段たる機能が完全に無視され、従つて一



國に於て金保蔵が無限に増加し得る可能性と、他方、他の國に於ける金喪失の可能性とが、無理矢理に曲げられてをり、同時に、保有金の減少がいかなる結果を齎すかが少しも恐れられてゐない。かくて、世界貨幣金をめぐる紙幣減價の必然性は見失はれ、金を通じて現はれる爲替問題と一國資本主義の總過程との關聯も斷ち切れ、従つて爲替問題と無産階級搾取條件との必然的な關聯も曲げられる。

(1) 『批判』譯頁 二四〇。

(2) 『資本論』第三卷、下、高島氏譯、新潮社版、頁 七九。

(3) E. Ludwig: Die Geldentwertung. (Die Internationale. Jahrg. 5. S. 136) 並に K. Eisler: Von der Mark Zur Reichsmark 1928, S. 199—200.

(4) 拙譯『金と物價』六三頁以下、カウツキイ論文「金、貨幣及び商品」

(5) Kautsky: Sozialdemokratische Bemerkungen. S. 139—143.

8 じ す び

これまで述べてきたところから吾々が導き出し得る一、二の歸結は凡そ次の如きものであらう。

一。紙幣流通においては貨幣流通の法則が逆倒し、通貨膨脹して始めて紙幣減價すといふ價值標章の流通に關する特殊法則は、發展せる一般的商品流通——世界市場——の具體的關聯の中では、一つの從屬的關係において維持せられる。しかもそこにおいて價值標章のヨリ多面なヨリ眞實の運動が展開せられる。同時にこの特殊法則の孤立的に支配的なる存在は歴史的には近代世界市場の完全なる展開に先立

9

つ。従つて、この特殊法則を紙幣現象について常に妥當なものとして適用することは、方法論的にも、且つ事實解釋としても、問題たらざるを得ない。

二。紙幣減價の問題は、最も具體的には、窮局において「富一般の絶對的に社會的なる體化物」たる現實的な「金」を基礎とするかぎり、資本主義總過程の一モメントとしてその中に織込まれる。そのことは、紙幣減價に對する單なる通貨政策的操作には一定の限界があることを表示する。

三。以上の一と二とから、紙幣減價問題は世界資本主義の各發展段階と緊密なる關聯に立つことが示される。

四。マルクス貨幣理論における價值標章の運動法則においては、紙幣インフレーションについてはその「可能性」が展開せられるに止まり、世界貨幣の機能の規定において始めてその「必然性」が裏づけられ得る。むしろ、「單純なる流通の地平線」上に問題の投影される範圍において。インフレーションそのものの眞實の必然性は、既に指摘したやうに、資本主義總過程に依存する。等。

x

x

x

以上において私は、私見の諸家と異なる點を聊か明かにしたつもりであるが、問題は深くして私見は尙ほ透徹を缺く。多くは尙ほ諸説に對する疑義たるの程度を出でない。殊に、我が楠田民藏氏が、這般の問題に關聯する氏の斷章の中で、「不換紙幣流通の場合の現象は明かに通貨が膨脹すれば物價騰貴であ

る」と云はれ、また「無價値の紙片は何故に價値をもつか……。これ今日爲替問題の基本理論である。吾々は之れを、「經濟學批判」價値標章の一節に於て學び得る」と述べられるにおいて、諸説に對する疑義は、却つて卑見自身に向ひ來るかの思ひがする。これ、疑問を疑問として、ここに公けにする次第である。

(1) 『通貨原理に關するマルクスの書簡』大原社會問題研究所雜誌第六卷一號。

附記

— 一九三三・四 —

本稿はもと「マルクス紙幣論解釋に關する一疑問」といふ副題の下に發表したものであるが、遺憾ながらそれは今もなほ私において「疑問」以上のものたり得ない。幸に先輩の批判叱正を得て自らの蒙を啓きたいと冀ふ。

## (二) インフレーション下の資本と勞働

### 1 インフレーションの可能と必然

現下の日本資本主義が、問題としてのインフレーションに直面してゐることは云ふまでもない。現在(昭和七年五月)では、むしろ、それへの突入がほとんど抜き差しならぬ不可避の事態にあるかに思はれるのである。インフレーションは單に可能ばかりでなく、むしろ必然であらうと考へられる。

それではインフレーション實現を意味する表象的な事實は現在において何だと云へば、何人の目にも觸れてゐる通り、第一には、現に實現化の道を辿つてゐる日銀保證準備限度の擴張、兌換券(保證及限外)發行税の減額がそれである。保證準備の擴張は、兌換券停止の現在においては、ただ變則的な限外發行を正常化すると同時に、現在よりは三、四億の通貨増發を合法化し容易にすると云ふ意味をもつてをり、他方、限外發行税の減額は紙券増發に對する前者よりもヨリ積極的な用意を意味すると解せられる。第二には、政府の公債發行が差迫つた事實として存在する。昭和七年の實行豫算は既に總計約三億圓の公債財源を計上してゐるが、六月以降の軍事費膨脹や借替公債を計上すれば、七年度の公債發行は

恐らくこの三倍の額に達するであらう。この巨額の公債の日銀背負込みは實に重大である。更に第三には、現在の爲替の地位と引つづくバランス悪化の一般的状態がある。最後のものは對外的であり、アメリカその他帝國主義の状态と關聯して相對的に動くが、同時にそれは國內通貨の動きをもするどく反映する。このインフレーション實現への最も重要な指針は、いま微動を示してゐる。その微動は、國內における通貨増發そのものによる決定的衝戟を待ち受けてゐるかに思はれる。さてその通貨増發の問題であるが、背負込みによる紙幣發行が、必ずしも常にインフレーションを導くとは限らない。蓋し、商品流通の現實の増大がこの紙幣増發を起しつゝあるのならば、云ふまでもなく紙幣インフレーションではない。しかし、例へば軍需品の調達のために膨脹させられた紙幣は、この軍需品そのものが滿洲の野や上海の空で煙と消えた後には、ただ商品流通に過剰の紙幣として残される。赤字補填のために新たに印刷される紙幣もまた大體同様の運命をもつであらう。かやうな公債發行に紙幣増發は、明かにインフレーションへと導くであらう。

ところでかうした見解は、増發された通貨が産業振興に企業擴張に適用されねばインフレーションの効果を起さないと見る人々の見解とは正に反對であり、吾々においては、企業振興に適應せしめられない紙幣の増加こそまさしく紙幣インフレーションを起すと見られる。それ故に、日銀の保證準備大擴張の實現可能性と公債増發の不可避とを確信しながら、わが財界の依然たる不況の故に、事業界の依然

たる採算難の故に、従つて一切のインフレーション準備が企業を動かし得ないといふ理由をもつて、インフレーションは『可能でなし』とする主張について見るに、その理由は、實は何らインフレーションの不可能を示してゐるものでなく、却つてそのままにインフレーションの可能を表示してゐるのである。蓋し、いま日本資本主義が當面してゐる紙幣インフレーションは、商品價值の上昇にもとづく物價昂騰を意味するのでは決してなく、商品價值そのものに微動なくしてしかも貨幣減價そのものを表現するに止るところの物價騰貴を意味するに過ぎないのだからである。

インフレーション不可能の主張は、それ故に、紙幣インフレーションと信用インフレーションとを原理的に混同し、前者を後者の原理をもつて理解したと見てよからう。だが現下の日本は紙幣日本であり、その通貨及び物價の運動はまづ紙幣流通の原理の上に立つてゐる。だから、同じく資本家的な見解においても、この際は、謂ゆる數量說の見解を眞向から振りかざして紙幣膨脹によるインフレーションの必至を説く人々の方が、結論そのものとしてはむしろ正しいと云はねばならぬであらう。

ところで、インフレーションは可能でありむしろ必然であらうと吾々は云ふが、しかし必然といつてもその出現がいま焦眉に迫つてゐるとは必しも云へない。その實現化には上に吾々の見た各種政策の遂行とそれを遂行せしめた諸條件のヨリ以上の進展が必要であり、それまでは、インフレーション的操作はただ潜在的にのみ發展するであらうし、かくてその實現化には相當の時間を要するであらう。その現

實的な出現は、對内的には産業及び國家財政の破綻の深刻化の程度が問題であり、對外的には世界資本主義における日本の相對的地位が問題である。現下の日本のインフレーションへの過程は、戦後のドイツ・インフレーションとは色々の點で固より趣きを異にしてゐるが、特に現在のこの危機が主として世界恐慌そのものに直接發してゐるといふ點において、問題の深刻さがあると同時に、インフレーション實現化もまた可成の時日を要するやうに思はれる。ドイツ・インフレーションの特徴的な要因の二が、對外債務の増大によるマルク崩落にあるは云ふまでもないが、しかもそのことは、窮局において、ドイツが戦敗國として負はせられた政治的經濟的桎梏のもとに帝國主義列強に對する競争力を喪失してゐたことであり、云ひかへればドイツ帝國主義の再建の不可能といふ客觀的な狀勢に基づいてゐた。それは、戦争によるドイツ自身の經濟的並に財政的破綻に加ふるに、他の帝國主義的列強の執拗な經濟的並に財政的壓迫によるものであつた。かういふ事情は、現在の日本にはない。だがその代りに、ヨリ以上に狹隘化する世界市場と植民地的領域の上に立つ深刻なる世界恐慌があり、その恐慌の中に手をつなぐ資本家諸國の劣弱な一環としての地位がいま日本に與へられてゐる。インフレーションはこの客觀的狀勢の上に具體的に發展する。従つて、その過程は又おのづから特殊であらう。

我國のインフレーションが如何にして、何時、實現化し、更に如何なる發展過程を辿るであらうかは、いまここに當面の問題とするところではない。

茲では私は、インフレーションの展開過程における資本と勞働との運動を、主として、一九二二年を中心とするドイツの事情に顧みつつ述べて見ようと思ふ。短文のことで勢ひ抽象に流れるが、今吾々の上に襲ひ來らんとするインフレーションの過程を知る上においても、それを環ぐる客觀的狀勢の差異を考慮において考へるならば、また幾分の示唆たり得るであらう。

## 2 爲替景氣の根據

インフレーション展開過程における資本の運動は、まづ「爲替景氣」といふ資本主義の特殊なる症狀の下に包括される。では爲替景氣とは一體何か。この問題を闡明すること自身が、同時に紙幣インフレーション進展の本質にも觸れるであらう。

紙幣インフレーションは本來國內流通の獨立なる領域の埒内に於て起る。紙幣の價值は、その發行される分量が、「紙幣によつて象徴的に表示されてゐる金が現實に流通するだけの分量」に限定されるときにのみ、その額面通りの金價值を維持し得る。紙幣發行量がこの分量の限界を突破するとき、その超過する分量に逆比例して紙幣の價值は減少する。紙幣は、いくら膨脹しても、その分量を以つてして、現實に流通すべき金量の價值しか代表し得ない。紙幣がかかる金量の價值の二倍の名目だけ發行されるば紙幣の價值は半分に減價し、三倍發行されるれば三分の一に減價するだけである。それは「價格の標準

の命名が變つただけで、それ以外にはすべては元通りである。』かくて減價した貨幣で秤られる物價は、品位の低下した鑄貨で秤られると同様の理由で、騰貴する。かやうな紙幣膨脹がまさしく本來のインフレーションである。

だが、かゝる紙幣膨脹は一體何によつて起り得るか。それは、國家が商品流通の必要にもとづかざる紙幣を流通に投ずるからであり、そしてかかる紙幣増出の必要は主として國家財政の大穴を埋むるためか、乃至は、現實の商品流通にもとづかぬ信用の要求に應じて例へば商業手形ではなく純粹の融通手形に對する割引貸付を行ふために起るものであらう。これによつて紙幣は、明かにその「限度」を超えて發行され、そしてその價値を減少させる。が、この場合に次のことが特に注意さるべきである。例へば、國家支出補填のための紙幣造出は、普通には、それによる貨幣減價のために財政支出は更に追加紙幣の發行を強要され、紙幣發行はおのづから後を追ふて行はれ勝ちになるであらうが、この意味での紙幣發行は必然的に繼起し連續しなければならぬといふわけではない。なぜならば、例へば税制の改革等によつて財政の基礎が他の方面から改善されるれば、それに基づくインフレーションは一應停止し得るであらう。ただそれが困難なのは、一に國家財政そのものの状態に依存するので、必しも最初の紙幣増發そのものに必然するのではない。

しかるにインフレーションは、ヨリ現實的には、もう一つの側面をもつてゐる。即ち紙幣の對外價値の下落といふ側面これである。對外價値下落は紙幣膨脹それ自身を原因としても起り得るが、またそれ自身獨立な固有の原因にもとづいても出現する。國際貸借の逆、對外債務の増大・累積、等を表面的な理由として、結局において一國の資本家的生産力の現實的な發展傾向がその根據となる。かくてこの對内價値と爲替相場との二つの運動は、もとより相互關係裡にありとは云へ、また別々に生起し得るし従つてその間に或る程度の開きをもつことができる。この開きは、その國の資本主義的發展傾向が他の列強に對して相對的に劣悪であればあるほど、對外價値の下落が對内價値のそれを超過する形において現はれるであらう。一九二二年のドイツが正にそれであつた。

さてかやうに爲替が國內における紙幣價値より或程度甚しく低下しておれば、この國の國內生産品は世界市場價格以下に止り得るし、輸出は激増し、輸出工業は俄かに活氣づき、従つて爲替及び株式投機が狂亂し、やがてそれは一切の産業に波及する。かくて、爲替と對内價値との間の開きが存在する限りここに謂ゆる爲替景氣は持續される。

だが、この爲替景氣は、それ自身のうちに解き難い矛盾を包藏してゐる。言葉をかへれば、この爲替景氣をつくるどころの對内及び對外價値の開きを生む同じ原因は、同時にこの開きを止揚せしめようとする原因として作用するのである。その理由はかうである。元來、對内價値の下落率を越ゆる對外價値の下落率が始めて輸出を促進せしめるわけであるが、他方においてこの爲替低落は輸入原料を騰貴せし

め、輸出の激増と相俟つて内地価格を騰貴させ、従つて貨幣の對内價值をヨリ以上に下落せしめるから對内對外の價值の開きは常に接近し止揚されようとする。輸入原料品の暴騰のみですら、爲替景氣の限界をつくつてゐる。かくてこのそれ自身のもつ矛盾は忽ち爲替景氣を解消するかに見える。しかし、他方で、國內の物價騰貴即ち紙幣の増發は、對外價值のヨリ以上の下落を常に刺戟する。この對内價值を追ひ越す爲替の繼續的な下落が、この矛盾を再び排除するのである。かくて國內の再生産は、かうした關聯を通じて紙幣の膨脹が必然的に繼續し、對外價值が下落をつづけ、インフレーションが發展の一途を辿るかぎりにおいて繼續される。だがそれはただ上の矛盾の擴大再生産においてのみ可能なのである。

これが爲替景氣であり、それは當該資本主義國が世界市場との依存關係が深ければ深いほど深刻に現はれる。そこで、資本はただ紙幣の對外價值の繼續的な崩壊を條件としてのみ廻轉し得る。しかもこの場合、對外價值の下落は一の必然的な過程として不可避的に起る。それ故に矛盾は不可避的に擴大する。そしてこの矛盾は、餘剩價值の無償による國外流出として累積され擴大されるのである。ただこの矛盾の累積と擴大は、其效果として經濟恐慌の爆發をただ未來へ未來へと押しやることのできる。

けれども全幅の餘剩價值をのぞむ資本はこの爲替景氣のジレンマと不安を一刻も早く脱出しなければならぬ。そこで問題はかかる矛盾の渦からのがれるため資本は新に如何なる運動を起すかであり、又如何なる資本がかかる運動を起し得るかである。

この運動は、まづインフレーション下における狂暴なる信用需要として現はれ、この信用需要が對外信用の需要へと轉化する過程において現はれる。

### 3 爲替景氣の矛盾——信用缺乏

紙幣インフレーションの捲き起す現象が信用インフレーションのそれと異なる特異な一つの點は、紙幣インフレーションにおいてはその發展の途上において猛烈な信用の缺乏を呈することである。それは信用恐慌の如き現象を呈する。蓋し、紙幣インフレーションは、元來、通貨の潤澤乃至は豊富なる信用の供給といふ假象のもとに、實は貨幣價值の萎縮そのことに起因するからである。むろん、この通貨減價は紙幣増發に基づいて起るのではあるが、どんなに増發されても紙幣總額の價值は増加しないのであり、のみならず一定額の紙幣の所有者にとつては、貨幣の増發はその所有の實質價值を甚だしく減少せしめるにすぎない。それは價值安定の通貨の増加又は信用の供給とそれ故に全く異つてゐる。信用インフレーションの場合には先づ利率が低下する、反對に、信用の缺乏と信用の要求は、紙幣インフレーションそのものの發展から、貨幣減價そのものから、切迫的に増大する。金融は逼迫し利率は昂騰する。これはまさしく一九二二、三年におけるドイツの實際であつた。一九二二年六月にはライヒス・バンクは既に一九一四年以來の商業手形割引率五%を破棄し、八月には七%、九月には八%へ、十一月には一〇%へつり

上げたが、更に二三年に入つて一月の一二%、四月一二%を経て八月三〇%、九月九〇%に達してゐる。この結果はライヒス・バンクにおける商業手形の巨大な堆積である。これと同時に、私經濟の信用缺乏と密接に關聯してドイツ帝國の信用も減少し、その大藏省證券は急激にライヒス・バンクに流入した。ライヒス・バンク内の浮動公債は激増した。

かやうにして信用の缺乏は一時緩和されるが、しかしマルクと共に減價する國庫證券への貨幣投下は愈々不可能となり、また商業手形もその流通中の貨幣減價から免れ得ない。結局、公私の信用需要が紙幣増發によつて賄はれるかぎり、信用供給はそれ自身の目的を果さなくなる。

ここに於て信用需要は方向轉換を餘儀なくされる。即ち信用需要は國內流通手段への需要から價値安定せる外國の支拂手段への需要に轉向せざるを得ない。かくてドイツでは周知の如くマルクのポイコトが起つた。ここに爲替景氣は、マルクから逃避することにその矛盾からの逃げ口の一つを見出したのである。しかしこの矛盾の止揚は、實は更らにヨリ大きなチレンマを含むものに過ぎなかつたのである。吾々はこの矛盾の道行きを辿つてみよう。

#### 4 爲替景氣の矛盾——資本の國籍離脱

不斷に減少し萎縮する國內貨幣から價値安定の外國貨幣への逃避は、流通並に再生産からの當然の要

求として現はれる。資本家がその實現する貨幣において損失をまぬがれるには、乃至はそれにおいて同時に利潤を實現するには、彼は減價する貨幣を避けて價値安定の貨幣に逃げる事によつてのみこれを達成する。かくてドイツではドルやスイス・フランへの追求が起つた。殊にドルは價値安定期の世界市場における代表者であつた。ドルは、ドイツ・インフレーションの進行に伴ひ、單なる價値尺度からドイツの對外取引における計算貨幣となり、更に計算貨幣からドイツの對外貿易における流通手段並に支拂手段となる。そのことは勢ひドルをして遂にドイツ國內における大工業資本家及び大商業資本家間の流通手段及び支拂手段たらしめる。かくて、價値安定の外國貨幣が、この國の支拂手段として國內に侵入してくる。このことは、確かにその目的通り資本の再生産過程を安固にし個々の資本家に利潤を確保せしめるに役立つ。だが、この自國貨幣よりの逃避と外國貨幣の侵入は一方においてこの國の資本の對外的地位に重大な結果を齎らすのである。資本の國外逃亡、資本の國籍離脱がそれである。

資本の國籍離脱は何よりも第一に自國資本の國際的地位を變化せしめる。

ドイツ・インフレーション時代には、この資本運動は云ふまでもなく顯著であつた。原料を輸入する工業家は、その支拂のための外國爲替をまづ外國でドル、ポンド、フラン支拂で賣るその輸出品の手取で調達したが、お終ひには、國內ですら大資本家は賣上の手取金を外國貨幣で受け入れた。一方、外國貨幣による手取金のうちスイス、オランダ等に殘されてゐるものはドイツ企業家がスイス、オランダ、ス

エーデン等の銀行乃至特殊會社に参加することによつて、ドイツ資本が新たに外國貨幣の装ひをとつてドイツに這入つて來た。マルク廻避資本が外國資本のドイツ侵入と一味となつて再びドイツに侵入して來たのである。さてドイツに侵入して來た外國貨幣資本は、ただにドイツの生産品のみでなく、その生産手段をも捕獲する。ここにドイツ生産手段の國籍喪失が起り、ドイツの土地のオランダ資本化が起り、ドイツ企業のドル化が起つた。ドイツの産業資本乃至金融資本が益々國際的金融資本家の傘下に從屬せしめられる。このことはドイツに生産される剩餘價值がドイツにおいて蓄積せられずに、直接的に國際金融團によつて奪收されることを意味し、それは更にドイツの國際貸借の惡化として現はれ、結局においてマルクの對外價值の破滅的な低落を強要するに至つたのである。

かくて爲替景氣の矛盾は、こゝではドイツ重工業の國際金融資本殊に直接的にはフランス金融資本への屈從のうちに一つの解決を見出す。ドイツ・インフレーション劇の主役を演じたフォーク・スチンネスの獨佛鑛業トラストが、このことを代表的に物語つてゐる。けれどもこの解決は、ドイツの爲替ダンピングによる侵略がいまや世界市場から退場し、それに代つて爾餘の強力なる帝國主義が再び世界市場の覇者として現はれたことを意味したに過ぎないのである。

## 5 インフレーション下の資本の構成

爲替景氣としてのインフレーションの矛盾の展開は更にもう一つの解決を用意する。吾々はこれを、

この狂暴なる資本の運動に引づられゆく労働の動きにおいて見るのである。

インフレーションが労働者並に俸給生活者、更に金利衣食者とその實收入の蠶食によつて如何に收奪するかは周知であり、殊にドイツの事情については殆んど紹介しつくされてゐる。そこで我々はいまこの問題に深入りせず、むしろそれは前提されたものとして進まう。

インフレーションの不可避的發展は、矛盾の擴大再生産の形で爲替景氣を再生産することにより、それは一方に原料及び生産設備確保を目ざす巨大なコンツェルンを生み、資本の集中を促進する。だが、大資本がそれに成功し得るのは主として紙幣を放棄して外國貨幣を握り得るからに過ぎない。ところが、外國貨幣の大量的侵入と國內紙幣の支拂手形及び流通手段からの排除は、實は、紙幣の對内價值及び對外價值の開きを接近せしめ、従つて爲替景氣への解消へと作用する。此の問題を、ドイツ資本主義は如何に解決したか。

この過程もまた労働者及びプロレタリア化する中間層の上に不斷に負擔を轉化することによつて遂行されたのである。そしてこの問題はインフレーション下の資本構成の變化として現はれてゐる。

既に述べたやうに、資本の國籍離脱を惹起する貨幣減價は、産業資本殊に重工業資本をして、固定資本と原料のための流動資本とを確保するために資本の集中を急がしめる。この要求は取引が外國貨幣を



以て行はれるとき始めて達せられよう。だが、かかる外國貨幣の獲得は弱少の資本や小商人には出来ない。恩給生活者、労働者、もとより然りである。このこと自身、資本の集中に拍車をかける結果となる。かくて大資本家のみがますますドルやポンドで取引する。だがこの價值安定貨幣による取引は、資本家から労働者へ支拂はれるときには停止される。即ち可變資本部分の支拂ひは、依然減價する紙幣をもつて支拂はれるのである。これに反して、外國資本に屬するものは外國爲替で従つて外國本位で支拂はれるのはむしろであり、更に國內資本のうち固定資本部分及び流通資本部分の一部も漸次に外國本位で支拂はれる。かくてドイツでは労働者及び俸給生活者のみが減價しゆくマルク紙幣で支拂はれた。さうすると資本の構成はこゝで特異なる姿をとるやうになる。

可變資本はこの場合益々減價する貨幣によつて支拂はれてゐる。労働力はこの場合價值以下に賣られてゐる。そこで、この可變資本(V)に比較して不變資本(C)は増大する。CとVの關係はここで一見、資本の有機的組成の高度化を意味するかの如くである。しかしそれは外見のみにすぎない。眞實の有機的組成の向上は、社會的生産力の増大と發展とを伴ふものでなければならぬ。即ち、そこでは、C(機械や原料)の増大或は技術的改善に比例してV(労働力の量)の相對的減少といふ關係が成立しなければならぬ。ところが、こゝに見られるCとVの關係は、本質においてこれと全く異つてゐる。この場合にはC部分は殆んど擴大されてをらぬ。その價值も増大してをらぬし、その質も何ら改良されてはをらぬ。逆に粗悪なる生産手段が極度に利用され、そしてそれが擴大せる労働者數によつて運轉せられるのである。だから労働の量は非常に大きくなり、産業豫備軍は隅々から驅り出され、場合によつては失業群は全部就業へと動いてゆく。しかも、VそのものはCに比例して減少するのである。だから、高度化されたCの回轉のために労働者が節約されるのではなく、實に貨幣減價そのものによつてVの量が節減されてゐるのである。即ち労働力の價值以下の大量使用が、ここで本質的に内容を構成してゐる。爲替景氣によつて「失業者救済」の御利益を宣傳する資本家經濟學の眞理は、もしこれが實現するとすればまさにかういふ内部的な關係において顯はれるのであり、それ以外の仕方によつてではない。この失業の掃蕩は、可變資本部分の一部が資本家階級の利潤として前以つて收奪されるときに可能なのであり、それは労働階級を最低生存線以下へ強壓することをもつてする絶對的餘剩價值の引上げへの努力においてのみ遂行され得るのである。

爲替ダンピング、爲替競争力はこれによつて辛じて保持され得るが、それは他面において大衆飢餓と大衆貧困との不可避的な擴大を道伴れとしなければならぬ。インフレーション爲替景氣の矛盾はその解決を強要すれば、ここに最後の最も大きな矛盾にぶつ突かる。それは、單なる經濟的崩壊過程の進行に加へて政治的危機の切迫に直面せざるを得ない。爲替景氣はここに爲替恐慌として始めて深刻なるその本體を曝露するに至る。

附記

この小篇殊にその後半は E. Ludwig: Geldentwertung (Die Internationale 1929, Heft 5) と負々々多々、一部分はその論旨の紹介にとめた。又數字及び事實については K. Elster: von der Mark zur Reichsmark 等による。

—一九三三・五—

(三) 猪侯氏のインフレーション論

猪侯津南雄氏が新著『金の経済学』並に論文『インフレーションを論ず』(「中央公論」五月號)の中で展開されたインフレーションに關する氏の研究については、私は既に、氏の『金の経済学』を紹介した短文(帝國大學新聞、五月二十五日)において之に觸れ、そしてこの方面に關する氏の研究が確かに新領野の開拓であり、インフレーションに關するマルクス主義文獻に乏しい現状にあつては大なる貢獻であるとともに、それはまた同時に新しき問題を提示せるものでもあることを述べた。が、單にかやうに云ふだけではむろん無責任であり、氏に對する禮でもないので、茲に氏の述作でいろいろと啓發されながらも尙ほ私に疑問として残る問題に對し僅かばかり愚見を述べてみようと思ふのである。事柄は現下の重要な現實問題に於ける理論的問題であり、小篇はその解明のための一個の捨石にでもなり得ればといふ意圖以外の何ものでもない。

1

猪侯氏のインフレーション論は形式上三個の範疇から成立してゐるといつていい。即ち氏は、インフレ

インフレーションを三つの型に分ち、一、本来のインフレーション（紙幣インフレーション）、二、爲替インフレーション、三、信用インフレーションとして取扱はれてゐる。この三つの型のうちで、他の二つは別として、「爲替インフレーション」は、この言葉自身が恐らく猪俣氏の發案であらうと同じやうに、これによつて説明されようとする現象を一つの特種的な範疇として取上げそれを理論づけようとする恐らく氏の獨特の試みであり、これまで多く見當らなかつたものである。むろん、ここに説明されようとしてゐるさうした現象そのものは、誰でも知つてゐるやうなものである。しかし、これを貨幣理論から一つのインフレーション現象として理論的に説明しようとする試みは、卑見では、少くともマルクス主義的な文献には少かつたやうに思ふ。（この問題についてはエ・ルドウィヒが或程度論じてゐる。〔楠田民藏氏譯「マルクス紙幣論の一解釋」大原研究所雑誌第十冊所載参照。〕私もまた上掲の拙論中でこの問題を取扱つた。）この點、猪俣氏の「爲替インフレーション」なるものの論究は、固より意義深きものであるといはねばならぬ。ただ、問題は、その謂ゆる爲替インフレーションなるものの解釋が果して正しいかどうかといふ點である。私自身は、この爲替變動による貨幣價值變動の問題が所謂インフレーションの理論に關しては極めて重要なモメントをなすと考へてゐるので、この猪俣氏の所謂爲替インフレーションの解釋そのものが特に注目すべき問題となると思惟されるのである。

そこで、いま猪俣氏のインフレーション理論一般に對する疑問を提起するに當つて、まづ私は、ここで

猪俣氏の爲替インフレーションに關する所論から這入ることにしよう。

2

猪俣氏は、まづ爲替インフレーションと本来のインフレーション（紙幣インフレーション）とを根本的に區別することによつて、爲替インフレーションの特質を規定しようとしてゐる。「現象形態においてはそれとこれと大した差異はない」（『金の經濟學』五五一頁）のに、猪俣氏がこれを區別せられるのは、この二つのものが原理的に異なるからである。猪俣氏の言葉で云へば、それがインフレーションとして物價騰貴を起すところの「原因が異なる」からである。又「原因が異なる以上、意義と影響を異にする」からである。吾々は「だから、一と他を混同してはならないのだ」と猪俣氏は云はれてゐる。そこで、吾々はそれらが單に物價騰貴を起す原因として異なるばかりではなく、一般にその物價騰貴を起すプロセスを異にし總じて原理を異にすることを知るのである。

さて、それでは、爲替インフレーションの原理はいかに紙幣インフレーションと異つてゐるか。先づ猪俣氏に聞かねばならぬ。「本来の意味のインフレーションは不換紙幣の流通法則に基づいて生ずるものである。……一口に言へば、貨幣の流通必要量を超えて流通に投げ込まれた紙幣が價值減少を起して物價騰貴を招來する、これがインフレーションである。國際的支拂超過をもつところの金輸出禁止國におい

て、爲替相場が下落した場合にも、インフレーションと同じやうな現象が起つてくる。けれども、この場合に物價が騰貴するのは紙幣が價值減少を起すからではない。この場合に價值減少を起すのは通貨一般であつて、その通貨が紙幣であると、兌換券であると、また金鑄貨であるとを問はないのだ。……」(同上、五五〇頁、傍點は私)

これによつて見られる通り、猪俣氏が爲替インフレーションと紙幣インフレーションとを區別する第一の原理は、紙幣インフレーションの場合はまさに紙幣の價值下落だが、爲替インフレーションの場合は紙幣の價值下落ではなくまづ通貨一般の價值下落であるといふ點にある。

ところで通貨一般とは何であるか。辿つてゆくと氏の説明はだん／＼詳細になつてゆく。

「爲替相場が下落すれば、その下落した割合だけ、内國通貨としての圓も下落する、そしてこの下落は、國內の商品價格一般の騰貴を通じて現はれるのだ。」(同上、四四頁)

ここでは「通貨一般が國內通貨としての圓」といふものに歸着してゐるやうだ。「國內通貨としての圓」とはそも／＼何かといふやうな問題に深入りしないで、いまはただ猪俣氏の行文を追ふてゆく。そしてただかかる圓の下落とはいかなる貨幣價值の下落を意味するかと問ふてみよう。

假りに爲替相場が二〇%下落した場合を考へてみる。さうすると、國內では「圓は(金の)一分六厘として通用する」と、猪俣氏はいふ。「その圓とは如何なる圓か? この圓の下落は國內で生じてゐる。

しかしそれは、紙幣としての圓の下落ではない。不換紙幣化した兌換券としての圓の下落ではない。そんな代用貨幣ではなしに正銘の金貨——しかも磨滅したりなんかしない「純眞」の金貨——が流通してゐても、圓の下落は生ずるのだ。また、この圓の下落は、計算貨幣としての圓の下落でもない。正味二分の金を含む一圓金貨を出して米四石を買ふといふと、前には百個渡せばよかつたのに、今度は百二十五個渡さなければならぬのだ! だから、これは正しく流通手段としての圓の下落である。」(四四五頁)

「圓」の下落とはだから要するに「純眞の金貨」の下落である。従つて「通貨一般」の價值減少とは、猪俣氏においては詮ずるところ金貨の相場下落である。氏は、金輸出を禁止して對外爲替が下落すれば國內に於ける「純眞の金貨」の相場が下落するといふ。そして、このことこそ、氏において紙幣インフレーションから區別される所謂爲替インフレーションなる觀念の支柱をなすものである。そこで、吾々の爲替インフレーション批判は、先づ以てこの「純眞の金貨」をめぐることとならう。

さて、この「純眞の金貨」の相場下落は、猪俣氏の場合において、いかなる條件のもとに起つてゐるか? 何がその前提として考へられてゐるか?

猪俣氏はこの問題を「金輸出禁止國の爲替相場」といふ一節の中で取扱はれてゐる。この場合、金の輸出が禁止されてゐることが云ふまでもなく第一の條件であり、それと同時にこの國の國際勘定は支拂超過であることが前提とされてゐる、それ故にこそ爲替の下落が起つてゐる。さてこの第一の條件たる金

の輸出禁止は、一體、何故に茲でこの國によつて採用されたのであらうか。禁止の結果として爲替が下落するくらゐであるから、既に國際勘定が引續き支拂超過であるか、乃至は近く支拂超過に陥るべき可能な状態にあることは明かである。もし支拂超過が一時的のもので、大勢としては受取超過をつづくべき状態にある場合には、恐らくこの爲替の下落は起るまい。また、多少の支拂超過であつても、輸出禁止の主旨が金流出の直接的な危険に脅かされてゐるためでなく、例へば戦争の危機に直面したやうな場合に他國の輸出禁止に對抗する對等的な準備であるやうなときならば、これ又爲替下落は起るまい。要するにこの國の資本主義的發展の總體が相對的に極めて順調であるやうな場合ならば、たとへ輸出禁止をやつても、對外爲替下落の憂ひはなく、又さうした場合には輸出禁止そのものの必要もないのである。ところで、輸出禁止によつて爲替が下落するといった場合は、事態はまさにこれと正反對であらう。當面の支拂差額が逆調であることは云ふまでもなく、全體としての貸借が順調に轉ずる見込の薄弱なときであり、他方、金の保有量も相對的に少なく、金による支拂決済が内外の事情から事實上困難乃至は不可能の状態に陥れるときであらう。この意味において、或る國が輸出禁止の舉に出づるのは——戦争その他の特別の場合をまづ措いて考へるならば——この國の資本主義的發展の相對的地位が現實的にか乃至可能的に金保有の劣悪なる状態の中に表現せられたやうな場合であらう。少くとも、金輸出が禁止されて同時に爲替が下落するやうな場合に、この國の金保有が他の諸國と對比して相對的に豊かであると

いふやうなことは考へ得られないのである。

さて、猪侯氏の金輸出禁止Ⅱ爲替下落の前提はどうなつてゐるか。

さきに引用した猪侯氏の章句にも見られる通り、氏は、對外的に金輸出禁止Ⅱ爲替下落を考へながら、國內では金が單に豊富に保有されてゐるばかりでなく、金が現實に流通してゐることを前提してをられる。

即ち氏は金の相場下落を説明した後に云はれる、——「もつとも、これは金貨が流通してゐる場合である」と。

更に氏は、この金貨が流通の必要に應じていくらでも増大し得ることを假定されてゐる。即ち氏はいふ——「商品の總價格が十億から十二億五千萬圓になれば、流通金量は二十五萬貫になる。そしてそれと共に、二分の金は一分六厘にしか當らないものになる。」(同上、四四八—九頁)

氏は、爲替下落によつて國內の物價が騰貴し、それに應じて貨幣量が増大するとき、それだけの金が——金貨が——どこからか自由に飛出してくると考へ、そしてそれを當然なものと假定してかかつてゐられる。

かういふ前提自身が、先づ甚だ荒唐ではあるまいか？ その理由は、私が前に述べたところからもほぼ明かである。なぜ、この國は、貨幣の對外的價值下落の危険を冒してまでも金輸出禁止の舉に出でた

のか。單に豊富に金を保有するばかりでなく、豊富に現實の金を流通せしめてゐる國が、何のために金流出をおそれねばならないか。例へば現在のフランスを見よ。フランスは、現在金保有は豊かであるが、それを現實に流通せしめるほどではない。それでも、フランスは、輸出禁止の必要を感じてはゐまい。また假令へフランスが、爲替ダンピングのみを目的として輸出禁止を執行したところで、フランスの對外價値は現在の事情の下では下落のしやうがあるまい。

また、猪俣氏の前提されるやうに、國內で自由に金を流通せしめながら、ただ對外的に金輸出を禁止したとき、もし、何らかの事情で爲替が下落すれば、金は密輸出せられるにきまつてゐる。それが現在の如く密輸出せられないのは金核本位乃至金塊本位であり而も國內で兌換が停止されてゐるからに他ならない。

だから、爲替下落といふやうな事情が前提されるれば、そして對外的に金の輸出が禁止されるれば、國內的にもまた、法律上の強制如何を問はず、事實として兌換は停止されると見なければならぬ。大正六年の日本の金輸出禁止直後兌換は法律上停止せられなかつたが、その爲替下落後の事實はまさに兌換停止と同様であつた。

即ち對外爲替の下落は、事實として兌換停止を伴ふ、換言すれば、それは國內における不換紙幣流通の事實と表裏して起るのである。

見來ると、輸出禁止は爲替下落の貨幣價値に及ぼす變動に關する猪俣氏の分析は、まづその據つて立つ前提が甚だ無稽であると云はざるを得ない。

前提がそもそも無理であるから、その爲替インフレーションの全理論は、勢ひ、無理の連続であり擴大再生産であるの外はない。

猪俣氏は爲替インフレーションの現象形態として起る物價騰貴を「純眞の金貨」の相場下落として擱まれるが、いふまでもなくそれは金の價値自體の下落ではない。

それでは如何なる貨幣として金貨の下落であるか？

氏はいふ、「これは正しく流通手段としての圓の下落である」と。さうして氏はこれを次の如く説明される——「圓は先づ世界市場での計算貨幣として——弗に對して——下落した。すると、輸出増大・輸入減退といふ攪亂が起つて、國內で必要な品物の不足が生じて來た。だから、前と同じ品物に對してヨリ多くの金を渡さなければ品物が得られなくなつて來た。……だから、物價騰貴の一步／＼は、實は、國內流通手段としての圓の下落の一步／＼に過ぎなかつたのだ。」(同上、四四五—六頁。傍點私)

ここで猪俣氏が適用しようとする法則は、價値標章としての鑄貨の運動法則であらう。國內流通の

領域が獨立に考へられる限りでは、流通する鑄貨は流通手段としての運動を行ふ。この場合には、流通する商品の價值量が不變であれば、流通手段の値打はそれ自身の分量に依存する。だから、通貨の量は不變であつて、商品量の方に増減があれば、上とは逆に、通貨の機能（値打）は商品の分量の増減に依存するとも云へる。

さていまの場合、猪俣氏の理論では、必要な商品の不足を來すためにこれに支拂ふ金の量が多くなるといふのだから、商品が例へば二割減じて金鑄貨の量が不變と見なければならぬ。そしていま商品の價格が二割上るといふことは、金鑄貨としての圓の値打が二割下るといふことである。だから、この場合の物價騰貴は、それによつて新たな量を必要とするやうな物價騰貴ではなく、一定量の通貨が商品の減少を反映したかぎりで起る物價騰貴である。かくて商品量が減少するに従つて、一圓が金二分としてではなく、金一分六厘、一分四厘、等々として通用する。通貨の値打は下がる。が、新なる金貨が流通に入り込む必要はこの場合起きないのである。即ち、猪俣氏の假定に従つて「必要な商品の不足」が起るとすれば、それだけ所謂貨幣の必要流通量が減るのであり従つてもし金貨がこの場合排他的に流通手段となつてゐると假定するならば、流通手段が過剰であるだけ金貨は價值減少を來すにすぎない。かういふやうに考へれば、前提そのものの無稽を別として、そのあとの理窟はともかくも通ほるのである。しかるに、猪俣氏の理論は、云ふまでもなくさういふ風には運ばれてゐないのである。

氏は曰く、

「爲替の下落に伴つて國內物價が一般に二割五分騰貴する場合には、流通する金量も——流通速度が不變なら——二割五分多くなる。總價格が十億から十二億五千萬圓になれば、流通金量は（二十萬貫から）二十五萬貫になる。そしてそれと共に、二分の金は一分六厘にしか當らないものになる」（同上、四四八頁）と。

「國內物價が一般に二割五分騰貴」したのは、猪俣氏の前提によれば、もともと「必要な商品」がそれだけ「不足」し、そして金貨の相場が二割五分下落したためではなかつたか？ しかるに、貨幣の相場が二割五分低下したからこそ一般物價が二割五分だけ騰貴したといふのに、今度は、また、貨幣量が二割五分だけ増加すると！ 貨幣の相場が二割五分低下したのは、猪俣氏の場合、流通手段としての貨幣の量が、いはゆる必要流通量以上に過剰であつたからではなかつたか？

何んと立派な *circulus vitiosus* !

かくて、猪俣氏が、爲替下落による物價騰貴を「必要な商品の不足」を媒介として考へられ、そしてさうすることによつて金貨の相場下落を一應純粹なる流通手段の法則に従屬せるかの如く考へられるかぎり、この物價騰貴は新たな通貨量の増加を必要とするものではない。だからここでは謂ゆる金の「必要流通量」は商品が不足を來すほど減退しゆくわけなのであるが、猪俣氏では、この必要流通量が

不可思議にもだんだん膨脹してゆく。

假定に従へば金が流通してゐる。ところで爲替低落の度が猛烈で平價の五分の一に落ちたとしよう。そこで物價が五倍に騰貴したとしよう。正に五倍の流通量が、猪俣氏にとつては、必要なわけである。猪俣氏はこの莫大な黄金を、一體どこから持つて來られるのか？

4

『もつとも、これは金貨が流通してゐる場合である』、と猪俣氏はいはれる。

では金が流通しない場合、兌換券か紙幣かが流通してゐる場合はどうか。むろん猪俣氏においては、いづれの場合にもこの原理が徹貫するのであり、別の原理がそこに行はれるのではない。ただ紙幣も兌換券も金貨の相場下落を反映するだけである。

紙幣流通の場合。——上に見た物價二割五分騰貴して流通量が二十五萬貫になるといふ場合に、もし『紙幣が金に代つて流通してゐれば、紙幣額もそれだけ多くなるのは當然だが、それは流通量そのものが多くなるからであるし、紙幣の一圓が一分六厘の金をしか代表しなくなるのは、流通手段として機能する二分の金そのものが一分六厘にしか當らなくなるからなのだ。』(同上、四四九頁。傍點私)

即ち紙幣はこのとき、下落せる金貨の相場を代表すると主張されるに過ぎない。だがこの『主張』は、

ただ猪俣氏の誤まれる出發を徹貫せしめるに役立つばかりであり、客觀的な事柄自體はこの主張の中に既に完全に歪められてゐる。この場合、『二分の金そのもの』は『流通手段』でも何でもなし。流通手段はこの場合まさしく『紙幣』であるのであり、『二分の金そのもの』は觀念的には價格の本位として作用し、現實的には日本銀行のあなぐらにおさまつてゐる。そして流通手段の法則にその身を委ねてゐるのは、正しく『紙幣』であつて、『二分の金』ではないのだ。もしさうでなかつたならば、今日、日本で金一匁が『紙幣』化する日本銀行券で七圓四十何錢してゐる事實はどうして理解されようか。……

ここには根本において流通手段と價値尺度との全き混同以外の何ものもない！

だが吾々は、今暫く猪俣氏の『主張』として紙幣が單に減價せる金貨を代表するに過ぎないものと考へられてゐることを承知してゐてもよいかも知れない。もし、この『主張』が、猪俣氏自身によつて早速別の方面から打破られるのでなかつたならば。

兌換券が流通してゐる場合。——この場合にはどうなるか。

猪俣氏曰く『國內で兌換券が金に代つて流通してゐる場合には、兌換券に對して金は二割五分の打歩を生じて來る。即ち、一匁の金塊は、一圓紙幣五枚ではなく、六枚四分の一と交換される。』そして『若し打歩を與へなければ密輸出される』(同上、四四七頁)と。

金は輸出禁止である。爲替は下落してゐる。そして猪俣氏によれば『金貨の相場自體が下がつてゐる』



のである。それなのに、兌換券が更にこの金よりも二割五分低落してゐる。さうすると、茲では兌換券は二重に減價してゐるのだとしか考へられない。だが、猪俣氏によればさうではないのである。氏は上の句に次で書かれる。「すべてこれらのことは金自體の價值には何の變化もない。そしてその機能こそ、世界市場で發揮され、また國內においても兌換券に對しては發揮されるのだ」(同上)と。

吾々は、爲替下落の場合には金が流通してゐても金貨の相場下落が起るのだ、と氏によつて教へられて來た。ところがその同じ環境のもとで、兌換券に對してだけは金は相場下落なく、金自體の價值通りに通用すると氏は云ふ。でないと「密輸出される」と。現實に金が流通してゐて密輸出の危険に全く曝されてゐる場合にすら、金の相場が下落してゐるのに、輸出禁止下の兌換券と引換へられるときのみ、どうして金は價值通りに通用するか。金流通の場合には一層價值通りの通用を金は要求しさうなものである。

しかし現象そのものは、猪俣氏が云はれる通りである。即ち金輸出禁止の場合に爲替下落して而も國內で兌換が停止されてゐなかつたならば、兌換請求者は發券銀行に殺倒し、金は時價で賣却されるといふことにならう。即ち兌換券は金に對して打歩をもつことは事實であらう。だが、この事態は既に兌換ではなく、事實上の兌換停止ではないか。兌換券は事實上不換紙幣化しつつあるのではないか。だから言ひかへれば、これは不換紙幣に對して金の相場が騰貴したことを意味するのである。かくて問題は再

び前の紙幣流通の場合と全く同一の場所に還つてくる。そしてそれは、明かに、さきの猪俣氏自身の主張を駁撃するのである。

かういふ風に見てくると、問題は簡單に次の一點に集中する。――

現に我國では金一匁は日本銀行券で七圓四十何錢である。これを私どもは普通に紙幣(この場合紙幣化せる日本銀行券)の價值下落と見てゐる。猪俣氏はこれを、紙幣の減價ではなく「二分の金そのものが一分六厘にしか當らなくなるからなのだ」と見、そして、紙幣は單にこの一分六厘の金に代つて流通してゐるに過ぎないと見る。さうすると、この理論からは、金一匁七圓四十何錢を説明することはできない。猪俣氏の「兌換券が金に代つて流通してゐる場合」が却つてこの事實に當はまるやうであるが、理論上それは兌換停止の場合ではないと假定せられるのだから、それをここに適用することも出来ない。さうすると、この金一匁七圓四十何錢を説明するためには、猪俣氏は別の理論をもつて來られねばならぬ。即ち猪俣氏においては、この七圓四十何錢は氏の爲替インフレーションの範疇並に法則以外に逸脱せざるを得ないのである。それが果して妥當かどうか。私の上の敘述は消極的ながらそれを否定する。更に、この問題の焦點を少しく移轉させると次の點で燃え上る。即ち、貨幣の必要流通量の問題にお

570

金輸出禁止前の通貨の必要量を十億とするとき、爲替二割下落、物價二割五分騰貴、かういふ状態を假定するでしょう。このとき必要流通量は十億圓であるか、それとも十二億五千萬圓であるか。この問題に對して、私は、以上において間接的ながら猪俣氏の十二億五千萬圓説を誤謬と見るべきことを明かにしたつもりである。

6

さて以上に要約した問題が、實のところ猪俣氏の所謂「爲替インフレーション」説をささえる中心觀念をなしてゐるのである。私は、本文で問題をただかういふ方面に限定したのであるが、それはただ猪俣氏の「爲替インフレーション」説が單にいけないといふやうな局部的問題をつつためではない。この問題は、勢ひ、氏のインフレーション論の全般に及ぶものであり、しかもそのことは、インフレーションなる現象自體の可能性並に必然性を掴む上で極めて重要な問題となるからにほかならない。

だが、茲では如上の問題が更に如何なる方面と連關するかを、簡單なるメモとして掲げておくに止めよう。

一、猪俣氏の爲替インフレーションの理論では、爲替下落による紙幣量の増大は、それ自身として何ら

紙幣インフレーションとなるものではない。例へば前掲猪俣氏の例によれば二億五千萬圓を増大した十億五千萬圓は「この特殊の場合の通貨必要量であり」、それは紙幣インフレーションとはならない。同様に、爲替の下落がいかに甚しくとも、それに基づいて起るかぎり、紙幣の膨脹は紙幣インフレーションたる性質を帯びない。この見解を押し通すと、紙幣インフレーションの展開・發展・崩壞の過程が必然的に齎らされるについて、爲替下落が重要な役割を演ずるといふ點が、見窮はめられない。(私自身も爲替の暴落によつて通貨は増發されると見てゐるが、しかしそれは紙幣減價のためであると見てをり、従つて必要流通量に對する考へは猪俣氏とは異なる。これについては茲で詳述できない。)

二、そこで、猪俣氏の場合は却つて、紙幣インフレーションの必然的發展は、ただ國內流通紙幣の獨立的な増發といふ側のみ自動的な基礎がある。ヨリ具體的に云へば、國家財政の破綻にもとづく紙幣の造出といふが如きものみに、その窮極的なそして全的な基礎があることになり、従つて一旦紙幣が増發されるれば、それをいはば「最初の一撃」として、それ以下は不可避免的にインフレーションが擴大・崩壞の過程を辿るといふやうな結論を生む。(私もまた一旦展開し出した紙幣インフレーションは不可避免的に擴大せんとする傾向をもつことを猪俣氏と同様に認めるのだが、それが最初の紙幣増發——流通必要以上の増發——から必然するのだとは考へない。)

三、かくて猪俣氏においては紙幣の對外價值下落と對內價值下落との交互作用並にそれが窮極におい

て現實の金——世界貨幣——を基礎とするところの必然的聯關が高調せられず、従つて、インフレーションの必然性に關する理論的な把握が尙ほ問題として残りはないか。

以上、私は、さきに限定した問題で猪俣氏の解釋に對し消極的に抗議するに止まり、問題自體に對する私の積極的な答案を述べることをしなかつた。後者は、本書冒頭の論文に或る程度述べてゐることであり、それに不足の點は次の機會に改めて述べることにはしたいと考へる。猪俣氏並に讀者の諒恕を祈る次第である。

—一九三三・七—

#### (四) 種々のインフレーション論

—指導的經濟雜誌の見解に對する短評—

インフレーションといふ重苦しい雲行に直面して、我が論壇はまさにインフレーション論のインフレーションである。而もそれ等が、それ／＼言ふ事がまち／＼だといふのだから、この明日に迫つてゐる切實な問題を擱まうとしてゐる大衆は、先づそのほん物を見つけ出すのに一骨といふわけだ。尤も此處で火事泥を稼がうと待構へてゐる株屋や山師や資本家達は偽物で一杯喰はせた方がよい事かも知れないが。

1

いふまでもなく現下の日本での問題はインフレーションの現實過程である。この現實の過程を分析し、その見透しを獲得するのが本來の問題であるが、それまで來るに先立つて、これを分析し把握するところの理論が先づ問題である。飛んでもない理屈を土臺にして現實の過程をどうのかうのと言つたとて、もとより始まらない。しかもインフレーション論のインフレーションなるものが、まさにかうした事情に

基づいて起つてゐる。

この短文では、現に登場してゐる種々のインフレーション論を一々批判することはできないので、二二の代表的な同時に有力な所論について、その踏張つてゐる土臺が、如何に危つかしいものか、しかも如何に含蓄が深いか、その一端を指摘するに止めよう。問題は極めて初歩的であり、教科書的である。がそれだからこそ事柄自体は却つて重要である。

2

現實の日本のインフレーション過程の分析に出發する種々のインフレーション論を、その重要なものについて、主張といふ方面から色分けをすと——中間的なものや種變りは色々あらうが——大ざつぱに二つに分けられる。インフレーションは必然的だといふのと、必然的には來ないといふのと。後者は又それを分つて、必然的ではないが可能だといふのと、全く不可能だといふのと、二説とすることが出来る。

まづインフレーション必然論であるが、マルクス主義的な理論に據るものは、議論の枝葉を抜きにすれば、現下の状勢を前にしてはそれが必然的であるといふ點では凡そ一致しなければならぬ。次に謂ゆる資本家經濟學の立場に立つても、貨幣數量説を卒直に振りかざす限り、その結論は大體に前者と同様になる。雑誌「ダイヤモンド」に現はれた所論などにはこの傾向が相當強いやうに見受けられた。もつと

も、だからといつて貨幣數量説が正しいのでもなく、又その結論が左翼的となるわけでもない。

今茲に當面の問題としたいのは、私が第二類に分つたもの、即ちインフレーションは必然的には來ないとする部類で、その一は不可能とし、その二は言はば政策的に可能とするもの。雑誌「エコノミスト」が不可能と主張して居り、雑誌「東洋經濟新報」が可能だと見てゐる。(共に昭和七年四、五月頃の見解である。)

3

先づ「エコノミスト」の所論を見よう。(同誌昭和七年四月十五日、五月一日)エコノミストはインフレーション準備の一切の政策が我國現在の爲政當局によつて必然に取られることを認める。即ち、日銀の利下は既に其の緒について居り、日銀保證準備限度の擴張や兌換券發行税の引下は近き將來に起り得ると見られるし、更に公債發行は本年中に六億に上るべく、それが日銀及び預金部において引受けられること等々を明かに認めてゐる。即ち「インフレーション政策の必然性」を十分に認め之れを前提してゐる。それにも拘らず、エコノミストは、この「インフレーションへの準備が現實のインフレーションになるだらうか」と反問し、そして「インフレーション政策への努力」は「現實のインフレーションとなる可能性は無い」と斷するのである。では、何故不可能だと言ふのか? 要するに事業界の企業採算がとれない

からといふのである。而もこの採算難は「通貨の供給量が少いからでもなければ金利が高いからでもない」、正にその反対で、「企業採算がとれないから経済社會の通貨量は増加しない」のだ。そこで通貨はいくら増發されても、それに對する需要が起らない、結局通貨は膨脹の仕様がな……「かうした環境ではインフレーションは筋書通り實現しない。」かういふのがその主張である。

この主張の陰には如何なる理論があるか。ここに紙幣インフレーションを説くつもりで持出された理論は、實は本來の信用インフレーションの理論であり、従つてここに二つの理論の混合と混亂がある。一體、インフレーションとは通貨の價值が下落することなのか、それとも商品の市場價值が上ることなのか、この第一歩がここでは不問に付されて居る。現實の問題は紙幣の日本であるといはねばならぬ。従つて問題は根本において、紙幣インフレーションとして取上げられねばならない。之れに反して、信用インフレーションは本來金本位の基礎の上に起り、従つてその根本において貨幣流通の一般法則による一定の制限を受ける。過度の信用膨脹は物價昂騰を通じて金流出を呼び發券制度の基礎を揺がす。この限界内においては、信用は流通界の必要を最後の根據として一定の限度内で伸縮し得る。そしてその限りでは、この場合の物價騰貴は通貨の價值下落ではない。ただ信用インフレーションは、それを乗せてゐる金本位の土臺が取去られるとき、換言すれば信用のインフレーションが紙幣流通の上を起るときは、自ら當然に紙幣インフレーションへと移行し、轉化し、紙幣流通の法則に従ふのである。

この點をエコノミストは少しも顧慮しない。紙幣インフレーションの場合には、紙幣の價值自身が下落する。何故なればこの場合には紙幣の價值は現象の表面では、全く數量説の云ふところと同様に、それ自身の分量に依存するからである。流通界が必要とする貨幣（金）量以上に紙幣が流通界に投下されるときは、この紙幣は「資金の新規需要が起つて來ない」(エコノミスト)でも、そも／＼それ自身が減價することによつて流通界に吸収されて行く。なぜならば、これは丁度金本位の場合に平價が切下げられたと同様で、膨脹した全體の紙幣量が依然として從來の商品流通に必要な金量しか代表しないからである。

「紙幣はいくら膨脹しても流通に入り込むやうに見える」(マルクス)。蓋し、膨脹すれば紙幣の價值がそれだけ下落し、従つて膨脹しただけの紙幣は今や流通界に必要とせられるからである。ここではエコノミストの求める「資金の新規需要」は貨幣價值下落とトウトロギーとなる。そこで、エコノミストの杞憂は消えるであらう。そのいふインフレーション不可能の條件は、今や反對に、可能の條件とならう。エコノミストはいふ。

「三億を越ゆる兌換券の増發によつて眞のインフレーションを來し一般購買力を刺激し、好景氣を招來する爲には、企業財政の好轉を始めとし、國際貸借の改善に待たねばならぬ……」と。これに對して今や我々は言ふ、インフレーションを來すためには却て企業財政の惡化と國際貸借の逆轉

とに待たねばならぬと。ただ我々の方では、ここでインフレーションのお伴をさせて『好景氣を招來する』といふことだけは、到底請合ひ兼ねると斷つておかねばならぬ。エコノミストは、ただ、好景氣をインフレーションから引張り出すといふ瓢箪から駒以上の藝當を念願したばかりに、却つてインフレーションそのものの不可能を歎かねばならなかつた。此處に、資本家の顔がひよつこり覗いてゐるのを讀者は見逃されぬであらう。

4

エコノミストの見解と一見對立するかに見える「可能」説、即ち東洋經濟新報を先頭とする一聯の主張は、實は一面においては、上のエコノミストと同一の「理論」の上に立つてゐる。(例へば同誌一四九二—八號、昭和七年三月より五月に亘る連續の論文「インフレーションの意味方法及效果」参照)

東洋經濟も茲ではインフレーションは必しも必然的には將來されないと見るが、而もそれは政策的に可能だと言ふ。そのインフレーションを強要する攻め道具は、やはり日銀の金利政策、オープンマーケット・オペレーション、政府事業、公債發行等々だが——ただここでエコノミストと異なるのは——これらの攻め道具で『その効果を獲得するまで、頑強にインフレーションを續くべし』(そうすれば可能だ)といふ點、要するに、ここではただ執つこさだけが前者と違ふのである。その證據は、東洋經濟もインフレーションが購買力を作り出すものであり、その新たな購買力によつてこそ始めて物價が騰貴するとするのだから。この點で面白いのは、同誌の河上博士説批判——實は完全な自己批判——である。河上肇博士はさきに同誌上でインフレーションは決して景氣を進展させないと主張し、その理由としてインフレーションで勞賃は騰貴するかも知れぬが、それ以上に商品が騰貴するから新たな需要などは起り得ないと、極めて當然な主張をされた(東洋經濟新報昭和七年二月十三日號)。これに對して、同誌は、博士は新購買力は起らぬといふが、然し既に博士は物價騰貴を前提してゐるではないか、

『博士はその物價騰貴といふ事を何處から持込んで來たのであるか。物價はたゞ通貨を増加したとて誰れか其通貨を購買力として働かさねば騰貴するものではない。博士の考へにはそれが抜けてゐる』

と、逆襲を試みてゐる。ところが、何ぞ圖らん、紙幣インフレーションには事業界や消費大衆における新たな需要もへちまも要らないのだ。それを必要と考へるのは、理論的には之れを信用膨脹の場合と混同したものであること前に我々が指摘した通りである。日頃の數量説信奉者が、ここではどうしたものかその基礎理論たる貨幣數量説を振棄ててゐるやうに見える。だがそれはこの場合、理論上の一步前進ではなく却て退却でしかないが、然しこの理論上の退却は實は實踐上の一步前進を意味したであらう。何故か？ それは、東洋經濟がなぜ無理矢理に「需要」を持つて來ねばならなかつたか、更に又、紙幣膨脹の展開過程では却て金利昂騰を伴ふのになぜ高橋龜吉氏は「金融緩漫」の看板をかかげねば

ならなかつたか、といふ單純な問題に歸着するであらう。インフレーションが労働者の腹掛を膨らますことを聲高く宣傳することによつて、その腹掛が膨るれば膨るほど、その中のものが反古に近づくといふことを労働者に知らせまいとする意圖は、その理由の一つであらう。

が、さればといつて東洋經濟新報誌がインフレーションに關するその理論の基礎として謂ゆる數量説を全く放棄したとは云へないであらう。そのことは、現在のインフレーション過程を一つの信用インフレーション的に解釋することを押し通すならば、結局「エコノミスト」の主張の如く「不可能」説に陥らねばならぬにもかかはらず、同誌が結論として「可能」を強要してゐるといふことから想察されよう。表面上「需要」を押し立ててゐながら、根本においては、それは依然として單なる數量説に立つてゐると見なければならず、ここに二つの立場のごつたまぜがあると云はねばなるまい。が、その主張のこの方面（數量説的方面）については、本書中別の個所（第二篇の二で一應の検討を試みてあるので、茲ではこれ以上觸れないでおかう。

## 第二篇 ブルジョア貨幣理論の批判

## （一）「貨幣」に於けるブルジョア・イデオロギー

### 1 金の實踐

一九一七年このかた帝國主義ブルジョアジーにはヴェルサイユにおける平和の鐘にもかかはらず惱みの日がつづく。戦後彼等が直面した「直接的な革命情勢」は一夜の悪夢に過ぎなかつたとしても、さうして間もなく「安定」の朝は到来しはしたが、その安定の彼方には不安のサタンが笑つてゐた。不安は、謂ゆる安定期を過ぐるとともに急速度に擴大していつた。そして、この捉へ難い不安のなかにも、いまや、一つの焦点が見出されるが如くであつた。焦点とは何であつたらう？ それこそは、資本家社會がそれをめぐつて動いて來たところの、資本家社會運行のいはば中軸、——かつて若き資本主義マーカンティリズムの春の目醒めを齎したあの黄金に他ならなかつたのである。壯年の産業資本が見捨てたその姿を、「人は初戀に歸へる」のならばして、いま年老いた帝國主義ブルジョアジーが不安と焦燥のうちに探がし求めてゐる。

帝國主義ブルジョアジーのかうした「金」に對する不安にはおよそ二つの方面があるやうである。その



一つは、金そのものの生産減退、供給不足に對する莫然たるおそれである。この怖れは、既に早く戦後の通貨安定政策の第一歩において表明せられた。一九二二年のゼノア國際經濟會議。その金節約のスコーガン。このための中央銀行協調の勸説。これは殊にインフレーション整理後の金に對する熱狂的需要をおそれたのだ。大戦後各國本位制度は金貨の流通なき金本位に變つた。金爲替本位。金塊本位。これは金節約の積極的實踐であつた。戦前弱小國の本位であつた金爲替本位が大資本家國を通じての一般的制度となつた。それはデフレーションの危機を防がうといふ一時的方策から永續的な新貨幣制度に變つた。だが金不足に對するおそれは、安定後の最近時における物價低落の一般的趨勢にもとづいて新たに再生産されつつあつたのである。一九二九年ヤング委員會の發案になる國際決済銀行の設立、國際聯盟財政委員會金委員會等は、その大きな反映である。

金産出の減少は事實において永續的に見ゆる。一九二四年以後の金産出高は可成りの向上を示したがそれでも戦前水準に及ばざること一〇%以上。他方世界貿易は著しく回復してゐる。一九二五年の世界貿易の量は既に戦前水準を五%超過した。將來は更に悲觀に傾する。國際聯盟金委員會の報告によれば金の使用が節約されざる場合には、貨幣用金は一九三〇年の二二四萬ドルから累年減少して一九四〇年には一七〇萬ドルに落ちるであらう。専門家のほぼ一致せる見當によれば、一九二九年から向ふ五年間において、貨幣用金の産出は、全世界の貨幣用金の蓄積に對して毎年約二%足らずであらう。

「金の産出の數字を世界貿易の數字と比較してみれば、一九二四年から一九二七年に至る期間における金の産出はやや安定への傾向を示してゐるのに、一方、世界貿易の方は増進の傾向を辿つてゐることがわかる。」——元ポロランド銀行總裁、練達なる一金融家は云ふ——「この不釣合が「心配の種」になる<sup>1)</sup>。なぜ心配の種になるのか？ 同じブルジョアが云ふ——「物價の一般的傾向は、歐洲の金に對する需要の割合が金鑛山の生産に相應しないことを、また金の舊ストックの再分割を遂行するには需要があまりに大きいことを示すやうだから。……物價の水準は明らかに下向を辿つてゐる。これは金に對する需要が供給よりもヨリ大きかつたことを示すやうに思はれる。かくて金の購買力は上向を辿つた。この行程が繼續的に續くならば、物價はドシドシ下落してゆくだらう。物價の繼續的の下落は、おそかれ早かれ、生産及び貿易の大混亂を招かざるを得ないから<sup>2)</sup>。」と。

同じことをイギリスのブルジョアが氣づかふ。——「畢竟……この金の明瞭なる不足と、世界物價の下落の趨勢の責とが一體那邊にあるかを決定することは、實に焦眉の必要事だ。最後の最も重要な點はかうだ、假令ひ、金産出高が世界の貨幣的必要に對して充分であることが更に立證されても、そんなことが果して繼續するかどうかは保證の限りではない。また事實、ここ數年内に世界の貨幣金の増加率が目立つて減少するだらうと推定すべき餘地は充分にある。……これは若し世界物價の將來の下落を避けようといふのなら、今のうちにこそ何とか決定されねばならぬ實際問題だ<sup>3)</sup>。」と。

金に對する帝國主義ブルヂョアジ一のもう一つの不安は、資本家諸國における金分配の國際的「不平等」である。金生産の全體的限少は、金本位を中心として獨占資本の搾取形態たる物價に關はるかぎり資本の前途を重苦しくとさしてゐるとは云へ、尙ほ未來にかかる莫然たる怖れにすぎない。これに引かへて金分配の不平等には各國發展の不均衡を基調とするヨリ切迫せる不安がつき纏ふてゐる。

一九二九年末における各中央銀行並に政府保有高。アメリカは八億磅。フランス三億三千六百磅。イギリス僅かに一億四千六百磅。これに次で辛じて一億磅臺を維持せるものドイツ、日本、スペインの順序、他は悉く一億磅に達しない。この不平等はしかし主としてアメリカ及び歐洲諸國の間にある。世界の金保有總計に對して實に三八・五%を擁するアメリカの正貨は確かにドイツとイギリスを犠牲にしてあり、フランスの最近に於ける膨脹（一六・二%、一九二七年には僅かに一〇・二%だつた）は明かに從來の權衡を破壊した。

金分配の不平等が結局において各國生産力の不平等なる發達を表現すること云ふまでもないが、「その狀況を検する時吾々は實際に通貨目的をもつ金と通貨目的をもたざる金との二種類を見る」（ストラコッシュ）。ここに特殊なる新様式がある。過去數年間における激烈なる爭奪戦はあらゆる意味において金武裝以外の何ものでもあり得ない。その流出を堰止めんとする一切の方策。高い關稅の障壁——商品の自由貿易の妨害。金爲替本位の採用——金の自由貿易の妨害。おまけに茶番としての國産品愛用運動。

等。それは、國家の威信のためのインフレーションの放埒であり、同時に新しい金のインフレーションの確立こそ急務であつた。だが次には、世界貨幣としての金の最後の機能が前面におどり出る、即ち文字通りの金による國家の武裝のためであつた。このことは、しかし社會主義者の批判を待たず、ブルヂョア自身の認識するところであつた。International Gold Movement, 1929 の著者パウル・アインチヒはいふ「フランスが世界においてアメリカを除く何れの國に對してもその金本位制を停止せしめ得る地位にあることを考へてみよ。人はフランスの金購入が、過去三ヶ年内において少からぬ災厄を惹起せしめつたことに疑を容れないだらう」と。事實フランスは、一九二九年下半年以來、引きつづきロンドン市場から巨額の金を引上げ、英蘭銀行を脅かし、延いて、世界取引所恐慌の端緒を作つた。金の爭奪はその矛盾において二重に激成される。政治的意味における移動は、金の死藏を惹起しかねない。その限りにおいて生産増加に應ずる通貨の擴張が妨げられる。かかる絶對的不足の外観は、更にその爭奪を激成する。かくして金不足問題は安定後の資本主義において重大なる地位を取るに至つた。

(1) Mlynarsky: Gold und Central Bank, 1929, p. 15.

(2) Ibid, p. 4

(3) "The Economist" Feb. 15, 1930.

(4) H. Strakosch: Gold and the price level. (Supplement to "The Economist", July 5, 1930.)

2 価値なき貨幣

「金」に對するマイダスの執着は、いま見る如く、帝國主義ブルジョアジの實踐である。それが、如何なる認識の過程を経て行はれるかは後で判然しよう。だが、かくの如く金の實踐におけるマイダス王が、そのピカピカの金から生れた「貨幣」の理論的把握においては、全く別人として登場するのは先づもつて不思議ではないだらうか。

先づ彼等における「貨幣」の典型を探して見よう。

戦後の歐洲貨幣問題におけるブルジョアジの最高顧問として、ブラッセル財政會議以來の指導者として、誰れよりも「金の不足」を歎いたグスタフ・カッセルの意見を第一に尊重する義務がある。吾々は問題を貨幣の價值に集中しよう。だが、カッセルの貨幣價值に關する意見は何等深い詮索を要しない。彼の貨幣價值は、彼の著者の隨所に見出されるのである。先づ彼は、到るところで「貨幣價值の安定」といふことを問題にする。それほど彼の貨幣「價值」は不安定な内容をもつてゐるのだ。——「的確な貨幣説に達するために今猶残つてゐるものは、まさしくこの貨幣價值と貨幣の分量との間の數量的な關係を徹底的に研究することだ。」<sup>1)</sup>即ち彼の貨幣價值論はそのまま純粹なる數量説なのである。彼はピカピカの金を價值なき貨幣と見る最も徹底的な代表者として現はれる。

「價值なき」貨幣の理論は決してひとりカッセルのみでない。ノミナリズムの名をもつて貨幣理論の領土に現はれる今日のブルジョアジの貨幣把握の殆んど悉くが、價值なき貨幣の理論を振りかざしてゐる。それは、マルクスがその『經濟學批判』において觀念的尺度單位論として批判したものの復活である。

いまゼームス・スチュアートの再来として、現代における價值なき貨幣論の尖端に立ついま一人を、吾はロバート・リーフマンに見る。リーフマンの貨幣に關する主著『貨幣と金』(Geld und Gold, 1916)はその又の名に『貨幣の經濟的理論』と銘打つてある。だが、それはクナップの國家的理論よりも、ジムメルの哲學的理論よりも、ヨリ經濟的であり得たであらうか。『貨幣そのものとしては、個々の經濟内においても、また交換場裡においても、貨幣單位、計算の單位が、極めて重要な役割を演ずる。』<sup>2)</sup>……『物を買ふのは貨幣ではない、却て收入こそ物を買ふのだ、と人は云ふことが出来る。』<sup>3)</sup>リーフマンの貨幣はそれによつて物を買ふ貨幣ではない。ただ物を買ふ計算の單位である。その貨幣が價值をもつかどうかは、もう問題ではあり得ないのだ。「人は金の「價值」は一體どこから來るかといふ問題など、もう恐れる必要はない。何故ならば金もまた、一國の一般的計算單位に對しては、一個の商品にすぎぬのだから。ただその商品の價格がこの一般的計算單位に自由に刻印する制度を通して固定されてゐるまでだ。ただそのことは、一般的計算單位の主觀的評價における變動にともなつて、金の價值、云ひかへれば他の財に對する金の「交換關係」が變はるといふことを妨げるものでない。」<sup>4)</sup>金は、計算單位の刻印を荷負ふばか

りて、貨幣はしかし金でも商品でもなく單なる計算單位である。貨幣の「價值」はなくなり、一般的計算單位の「評價」といふものが出て来る。ただこれは、限界利用學派の價值概念すら喪失して、利用と費用との比較であるところの「評價」をもつて流通理論を貫かんとするリーフマンにとつては、兎も角もシムメトリカルな裝飾たることを失はない。リーフマンの貨幣は、金も、商品も、そして紙も、要らないところの貨幣である。それは個人々々の頭の中の貨幣であり、従つて茲には頭の中の貨幣論がある。「價值なき」貨幣の理論の第三の型を見よう。所謂指圖證説と呼ばれるものである。これは大戦中金本位廢棄の時代に最も幅をきかせた一群だ。吾々はその現代に於る大立物としてベンディクセンを取り上げよう。ベンディクセンはクナップの國定學説を經濟學的に焼き直すことを自ら買つて出た。だが、クナップの經濟學的再生産たるその試みでは、貨幣價值なき貨幣の理論が、經濟學的技巧に依つてより擴大されたに止まる。クナップを經濟的に翻譯したベンディクセンの貨幣概念は、「共同體のためになされた給付を示す票券であり、既にされた給付に基き反對給付を請求し得る權能若しくは請求權」といふ。ところで、反對給付の請求には計算の單位が必要である。そこで彼の貨幣概念は二又に分かれる。一、抽象的價值單位としての貨幣。二、反對給付請求權の具體的記號としての貨幣。しかしこの二つの概念は楯の両面ではなくして、仰も離れ／＼の二つの事柄である。なぜなれば、ここにはこの概念を統一する實體がないのだ。「價值單位」が主張されるから當然に價值があるだらうと考へては早計である。價值

の單位が決定せられるけれども價值自體がないことが統一的實體を排除することとなるのである。その證據をいま吾々は彼の價值單位に關する見解の中に見よう。

彼はハインとの論争において、金屬主義者の論據たる次の三點を論難した。一、貨幣は價值材である、商品である。二、商品と貨幣との代置は財の交換である。三、故に貨幣は價值評價の對象である。彼は第一の論點に對して云ふ、「貨幣は何ら商品でない」、最も純粹なる姿態における貨幣は實體價值なき貨幣であることを想へと。第二の點に對しては、貨幣は交換財ではない、従つて貨幣と商品の交換は等價の交換ではないと。第三點「吾々が貨幣價值と呼ぶところのものは單に商品價格の反映に過ぎないのだ。」「貨幣は價值の記號であり、象徴的な價值のみをもつ、そしてこの價值はこれによつて購ひ得る商品の價值と一致する。」かくて彼は貨幣の價值を金からさつぱりと切り離す。即ち知る、その「價值單位」の價值とは商品の側の價值であり、單位とは貨幣の側の單位であることを。貨幣自身には價值がないのである。ベンディクセンはその著「貨幣と資本」(一九二〇年)の中の「貨幣價值に就て」と云ふ論文において、「貨幣は全價值の公分母である」と云ふ思想を展開してゐる。「一つの價值はそれ自身に依つては規定されない、他の價值に對するその關係によつて規定される。従つて價值の世界は價值的關係の無際涯の網である。若干の關係を比較するためにはそれらを單一の計算單位に還元する必要がある。」この際各價值は分數の分子であり、貨幣はそれらの公分母である。公分母たる貨幣が無際限の價值の並列を相互

に比較させる。——巧妙な譬喩である。が、この譬喩によれば、分母たる貨幣は、分子たる價值と質的に同一物でなければならぬ。これはベンディクセンがその公分母を純粹抽象的數と假定しようとする要求と正反對の事態である。そこでは分母の貨幣も價值を持たなければならぬことが證明される。しかも、同じ書の序文の中で、『貨幣は交換手段ではない。況んや交換財ではない。ただ社會のためになしたる給付の象徴である、既になされたる給付に基づいて反對給付を受くる權能である』と云ふベンディクセン自身が、この折角の發見を取にがして丁ふ。

ベンディクセン直系の子であるところのエルスターは、指圖證説の完成體を示すと同時に、國家學説より負ひ來つた根本缺陷をも完成した。『内國貨幣は財貨ではない』が、外國貨幣は『他のすべての經濟財と同じく財貨である』といふにおいて、淘汰されたこの變種が粗野なクナップの直系の孫であることを曝露してゐる。と同時に、その個有の發展としては、内國貨幣における無價值論の完成と、無價值論一般の完全なる破綻とが、ゆるぎなき論證を獲得したのである。

さてその實踐においては『金の不足』を嘆じてゐる。そしてその壯麗なる理論的把握においては卑しむべき『金』を却けることに依つて貨幣の無價值を立證しようといふ。これら觀念形態の一般に通ずる明かなる矛盾は何によつて説明されるか。それを説き明すべく、誰れでも先づかやうなお上品な貨幣理論の生活環境を思ひ起すであらう。

古きイギリスのノミナリスト、ローンズやアットウッド等を眩惑せしめた金量不十分な金貨流通の事實が、ここには發展して貨幣形態の分歧、即ち紙幣の發展がある。否、紙幣本位制の立派な(だが長もてしない)典型があつた。更にこの不換紙幣制度の發展であるかの如き外觀をもつところの謂ゆる信用貨幣の發展がある。信用貨幣とは小切手、手形、銀行券から銀行における帳簿上の振替取引(預金貨幣)をも包括する。その發展は無際限なるかの如く見ゆる。最近の發展を一瞥しよう。何といつてもまづアメリカだ。戦前の一九一二年。金塊は約七億ドル。補助貨、紙幣は十億ドル。銀行における預金貨幣八十五億ドル(フィッシャーの計算)。戦後一九二五年。金貨金塊四十四億ドル。これを準備とする銀行券、銀貨は約三十億ドル。銀行預金約五百五億ドル。この預金の八〇パーセントが銀行の信用による造出と云はれる。更に預金貨幣による支拂額は如何なる割合に達してゐるか。同じくアメリカでは、全支拂額中銀行預金に依ると推定される額、一八九六年——八〇パーセント、一九〇九年——九一パーセント(フィッシャー)。ドイツはどうか。ドイツ國立銀行取引について推移の一端を見れば、一八九一年、振替取引八一億マルク。直接取引一七六億マルク。一般取引に對する現金勘定率は二四・七パーセント。二十二年後の一九一三年に於ては、振替取引三、七九二億マルク。直接取引七三六億マルク。一般取引に對する現金勘定率は僅かに九・六パーセント、即ち一八九一年に比して約五分の二に下つた(シュルツェ・ケウエルニッツ)。日本はどうだ。全國手形交換所組合銀行の一年を通じての收納金額中、現金による收納と手形

小切手による收納との比率。全國を通じて見れば、大正三年の現金三二%、手形小切手六八%は、現金において累年減少し、昭和三年現金一八%、小切手手形の役割は八二%に達した。東京のみについて見れば、昭和三年における現金收納一〇%、他の九〇%が預金通貨の役割となつてゐる（東京手形交換所調）。  
 實體的な貨幣なき取引の驚くべき發展が、色盲のリーフマンの網膜に貨幣の輪廓のみが投影せられる雄大な風景を提供し、ハンブルグ銀行頭取としての貨幣造出の優れたる手品師ベンディクセンをして、彼が造り出す貨幣が価値なきただの象徴に過ぎぬといふ種あかしをやらしむるには充分である。しかし、貨幣無価値論者の頭脳を支配するかかる經濟現象自體を展開することだけが、この觀念論の物質的基礎を闡明することにはならぬであらう。何故であるか。いまや貨幣無価値論の觀念形態がそのまま金の争奪に全力をあげつつある實踐の上に立つてゐるといふ事實が、それによつてはまだ何もをも説明せられないからである。

- (1) カッセル『社會經濟原論』邦譯頁六五七。
- (2) Liefmann: Geld und Gold, S. 90.
- (3) Ibid. S. 87.
- (4) Ibid. S. 128.
- (5) Bendixen: Währungspolitik und Geldtheorie im Lichte des Weltkrieges, 1919. S. 135—141.
- (6) Bendixen: Geld und Kapital, 1922. S. 21.

- (7) Ibid. S. V.
- (8) Elster: Die Seele des Geldes, 1920, S. 318.
- (9) この数字は橋爪明男氏著「貨幣理論」に據る。

### 3 空幻なる価値

かくて吾々の任務は、かくの如きイデオロギーの物質的基礎の「曝露」に向ふ。ところで讀者が云ふ。待て、現代ブルジョアの貨幣理論は悉くが無価値論ではない、却つて名目説の新たなる方向は貨幣価値の肯定にあるのではないかと。確かにさうした方角に、ミーゼスがある、ヴィーザーがある、左右田博士がある。そして最後に、その大立物ヘルフェリッヒがある。しからは、吾々の仕事はその前にまづこれらの有価値名目論者の「価値」を取調べてかからねばならぬであらう。

ヘルフェリッヒは貨幣無価値論の反對者として登場する。が、彼は貨幣無価値論者の對立物であり得るだらうか。彼の積極説は、貨幣は「職能価値」をもつといふのであり、この職能価値は貨幣の「素材価値」から獨立たり得るし、素材価値の必然は否定せられる、と云ふのである。彼はその大著『貨幣』(初版一九〇三年)においていふ——「価値性が貨幣の主要なる特質をなすといふことは、貨幣が価値性をただ「それ自らに価値ある素材」からのみ導き出し得るといふ突きつめた見解に従はねばならぬと云ふわけ

はない」と。それから、紙券の価値がかう説明せられる。「紙幣本位制の場合には、貨幣を構成する材料はなるほど無価値なものである、……が、もし、紙幣が交換において何らか他の取引目的物と引換へに收受されるならば、その限りに於いて、それは爾餘のすべての価値物に比例して變化するところの、従つてまた爾餘のすべての価値対象物から獨立するところの価値をもつ。この価値は結局それが貨幣としての機能に歸し得られる。」——紙がここでは勿體ぶつた金と同じ作用をするといふ理由で、価値を與へられる。が、この「価値」の内容が肝要である。それは何ゆゑに作用が価値たるやの問題を通して把握される。彼の貨幣価値は、その価値一般と同様、人間と外界との交渉としての主觀的現象で、従つて價值判斷の対象たり得るものが「価値」の概念を與へられる。従つてこの價值判斷にもとづく價值の交換は常に同一條件の下に生じ得ない。従つてヘルフェリッヒの貨幣価値はそれ自身一定不動でないから、「價值の尺度となり得ない。」ここに吾々は、その職能價值なる概念が、何ら實體的なものでなく、従つてその量の變化においてそれは零（無価値）の状態になり得ることを教へられよう。即ちその「価値」は「無価値」に轉化し得るのである。

吾々がかかる貨幣「価値」の典型を更に追求しよう。

我國貨幣理論の最高峰山崎覺次郎博士は日本におけるヘルフェリッヒの再現と見られないだらうか。吾は博士の貨幣價值を取り上げることができる。だが、山崎博士は既に古典的存在であるといふならば

吾々は我國における最新の産物を取り上げよう。牧野輝智博士は山崎博士の再生産として現はれる。吾は牧野博士の著——その學位論文——『貨幣學の實證的研究』（一九二九年）に就き得るのである。

貨幣が價值をもつことを主張する名目論者であるところの牧野博士は、その貨幣本質論の中で金屬學說とクナッポの國定學說とを批判し、次で、博士自身の本質觀を貨幣流通の原理として述べられる。「然らば貨幣が鑄貨たる紙幣たるを問はず貨幣として流通する所以のものは何に基いてゐるのであるか」と、博士は自問し、答へていふ——「思ふに貨幣の貨幣たり得る所以は、其購買力に基いてゐるのである。而して一般の人々が其購買力を信認するからである」と。この命題で後の一句はまことに蛇足であらう。貨幣に購買力があるのならば、これを信じない者は自己の實在を信ぜぬ懷疑主義の哲學者ぐらひであらうから。しかし博士自身極めて懷疑的で、「購買力を有するだけでは不充分である」と念を押されてゐる。

さて貨幣は購買力をもつから貨幣だと牧野博士は云ふ。だが、貨幣は何によつて購買力をもつかが問題ではなかつたのか！ 博士批判の対象たる金屬學說はこの問題に對して貨幣の素材に價值があるからと答へ、國定學說はこれを國家の布告にもとづくのだと答へて、兎もかくも問題に對する答案を提出したのである。しかるに吾が博士はこの問題に對する答案を書かない。博士はノミナリストたらんとされるのであるが、實は未だメタリストでもなく、ノミナリストでもなく、その前段階に止つてゐる。彼は

ノミナリスト志望者に対する試験問題の答案を提出してゐないのである。

だが吾々の主題は、名目論者たらんとする牧野博士における「貨幣の価値」の本體を見ることである。牧野博士において貨幣の価値とは何ぞや。答。——「貨幣の価値といふのは貨幣の購買力である。」その貨幣本質論において本質を語らなかつた博士は再び説明せられざる本質の前に立つ。だがそれはここで貨幣の価値は貨幣の価値である、貨幣には価値がある、といふ以上を一步も出ない。「要するにベンディクセン等の無価値説は……我々の首肯し得ないことで、貨幣の価値は其購買力である、而して購買力其のものを一つの価値であるとするのが妥當の見解であると信ずる。」この貨幣の「価値」の正體をつきとめるために、吾々はこの貨幣価値が決定せられる道行を辿つて見よう。牧野博士にはヘルフェリッヒの主著と同様に「貨幣価値の決定」といふ一章が「貨幣の価値」の後に加へられる必要があつた。

貨幣の価値は、博士においては「歴史的の産物」として生成した。現在吾々のもつ一圓の価値は「徳川時代の一兩の価値に接続し」、その一兩の価値は「豊臣時代の一兩の価値と連鎖してゐる」。かやうにだん／＼遡つてゆくと「その結局の本源が如何なる時代の如何なる事實に淵源したかを實證的に究明するは困難であるけれども、貨幣の価値は斯く歴史的連鎖的に生成したものと觀察することによりて始めて理論的の解釋を與ふことが出来るやうに」博士は「思ふ」。ここに、一九三一年の工場労働者が、一日の労働を賣つてポケットにねちこむ一圓札の価値が、遙か神代にかかる妙えなる霞の中で消えてゆく。

が、その貨幣価値の現實なる決定といふことになると、博士はすばやく下界に飛び降りる。語を次いでいふ、「而して歴史的に生成せる現在の貨幣価値を騰落せしむるものは主として供給の量である」と。霧のやうに、霞のやうに、上限もなく、下限もない、椅子處もない、本體もないところの茫茫たる貨幣の価値が、今や貨幣の供給量によつて定まる。霞のかかつた方の価値はそらごとであり、お話であることがここに判然するであらう。さうして供給量に依存せる下界における貨幣の価値の正體は、もうたいがい讀者には察しがつく。

山崎博士の貨幣の価値はこれと少しく異なる。博士においても貨幣の価値は、「歴史的産物」であるが、その歴史を遡る価値の發生は、ここでは「事實上においては到底發生の時期を確定」することは出来ないうが「理論上においては貨幣出現の當時に遡り、結局貨幣として最初に用ゐられたる財の使用価値に淵源すと謂はざるを得」ないのである。ここでは霞は、長い歴史の中ほどに垂れかかつてゐる。かくて使用価値から發生した貨幣の価値が、霞の中を抜ける間に、遂に財「金」の価値を決定するといふ逆立ちが出来上る。この點において山崎博士は職能価値に素材価値を對立せしめたヘルフェリッヒに尙ほ一步近かつたのである。逆に見るならば、山崎博士におけるその貨幣価値の正體が牧野博士において愈々面纱をとつたとも云へよう。

ここに貨幣価値の素性を決定的に鑑定する試金石がある。それは他ならぬ貨幣數量説に對するそれぞ



れの貨幣理論の態度である。牧野博士は「従来の學者實際家の態度と異り」貨幣數量説を「商品の側から批判する」といはれる。その批判の立場はかうだ——「元來、數量説なるものは貨幣の量が二倍に増加すれば貨幣の價值は二分の一に減少するといふ學説である」。即ちこの學説は「單純に正面からのみふと貨幣そのものの價值に關する問題であつて、物價の問題即ち商品價格の問題を直接の對象とするのではない」が、元來貨幣價值とはそれによつて購はれ得る財貨の量であり、そして「數量説なるものは貨幣の價值はその購買力である、貨幣にて購買し得べき財貨の分量である」といふ價值概念の上に樹立されたものである。私も貨幣の價值に就てはこの通説を是認する……が、この通説が正しいとすれば貨幣の價值と物價とは、同一の現象を別個の方面から見つたものに外ならないことをも是認せねばならぬ。」この立場から博士は商品の價格騰落と通貨量とを比較して數量説を「批判」する。よろしい。だがこの立場は博士自ら是認する通り、數量説の「價值概念」の上に立つてゐるのではないか。それは、貨幣が豫め價值をもたずに流通場裡に入り込むといふ主張に對する絶対賛成の意を表明する。そこで、博士においては、數量説を「首肯し得ない」と云ふその「批判」が極めて珍妙に遂行される。博士は我國の生絲（といふ一商品群）の市價騰落と我國における貨幣の流通量（日銀兌換券平均流通高）とを直接對置する。（流通兌換券總額が擧げて生絲の取引に充てられるか）かくて「批判」は終つた。「生絲の市價は……貨幣の流通高には殆んど關係なく主として米國の需要の大小により定まるといふ事實からして

（數量説はそのほを向いてゐる!!）……數量説の比例關係による貨幣價值變動は成立し得ないことなる（!!）と。數量説は、だしの俗流化が完成したのである。

數量説へのこのやうな迷路は、山崎博士の場合にはまだ實際よく覆はれてゐるやうである。だが結局博士にとつても、數量説は「正確なる反比例的な關係」が「誇張に過ぎた學説」として取られるに過ぎず、その假定的條件を許せば、「殆んど自明の理」と取られ、「貨幣の數量の増減が物價變動の原因となると云ふことは、大體に於て勿論之を認めねばならぬ」のである。ここでも、貨幣の價值は豫め固有の大きさをもちて交換場裡に現はれない。だが、かやうに、貨幣の價值が本來空であり、それは商品の價値を反映するものに過ぎず、従つて貨幣の「價值」とはそもそもそらごとであり、貨幣價值自體がここに投げ捨てられるてふ立場は、牧野博士においてはるかに發展せしめられた。その再生産は、即ち矛盾と俗流化との擴張再生産だつたのである。

貨幣に價值あることを主張する名目説の看板にはいつはりがある。その價值はみせかけであり、うそである。かうした貨幣價值の虚偽と蒙昧とは次の決定的な一句の中に完全に曝露されてある。——「商品價值は流通手段の數量によつて規定され、後者は更に一國內に存在する貨幣材料の數量によつて規定される、となすところの幻想は、これをその本來の代表者たちについて見れば、商品は價格なしに、貨幣は價值なしに、先づ流通過程に入り、しかる後、其處で商品の雜炊の一部分が金屬の山の一部分と

交換されるといふ、馬鹿／＼しき假説に根ざしてゐる。』この假説の上に、古いパーボンから、ヴァンダリントやモンテスキューから、今日の牧野博士に至るまで幾多の『實證的研究』が積み上げられた。まことに、『數量説は長生きをしてゐる』(ヘルファディング)と云はねばならぬ。

- (1) Helfrich: Das Geld, 5. Aufl. S. 535.
- (2) 牧野輝智氏『貨幣學の實證的研究』頁八九。
- (3) 同右、頁一四六。
- (4) 山崎覺次郎氏『貨幣銀行問題一斑』頁六〇。
- (5) 牧野氏同上書、二二三頁。
- (6) 山崎氏『若干の貨幣問題』頁二二七。
- (7) 『資本論』第一卷、第一篇、第三章。

#### 4 「空幻なる價值」批判——(金の價值)

帝國主義ブルジョアジーにおける支配的貨幣理論は名目説である。それは觀念的價值單位論の最後の満潮である。そこでは、金屬主義の最後の星カール・ディールが、「理論的金屬主義」(Theoretischer Metallismus)とスマイロニカルな尊稱を負ふて、産業資本と歴史主義との殘骸を晒らしてゐる。巨匠ワイルヘルム・レキシスは一九一〇年既に名目説に降服した(一九一〇年、『一般國民經濟學』)。その名目説の教義

としての一般的特徴は、上に見た如くそれが貨幣無價值説たることである。同時にこの教義は、その半面において、欺瞞的なる貨幣價值、或ひは空幻なる貨幣價值の幻覺を抱ける一群の前衛部隊をもつ。網膜における映像としての貨幣無價值論の客觀的風景として、吾々はさきに金融資本下における信用貨幣の老なる發展を眺めた。次に、ここに見る貨幣の欺瞞的なる價值説——名目説の第二の特質——の素地として、苗床としては、貨幣の變態としての不換紙幣の出現——紙幣本位制の一時的存在——の歴史的經驗を擧げねばならない。更に又ここでは、幾多の秀でたるマルクシストをさへ誤らしめたところの一聯の資本主義的事象の發展——即ち金生産並びに金取引における獨占的傾向(大資本の霸制、中央銀行の發展等)を附加する必要がある。これは、高度資本主義における資本の集中と獨占との一結果を反映するものにすぎない。マルクシスト間における金價值無變化の理論。——「金商品の生産には競争はない。新たにヨリ安く生産された地金の一キログラムは、以前と同じだけの枚数の金貨で、若くはそれに相應した商品で、發券銀行に買取られる」(Neue Zeit, Nov. 1911.)——これはマルクスの『同じ金屬の鑄貨で測られる場合、金の價格に變化はあり得ない』といふテーゼの大きな感違ひだ——従つて、金の價值には變化はあり得ない、と主張した當時の社會民主黨員オイゲン・ヴァルガは、その背後に「中央銀行の金の狩立て」を考へ、金における價值法則の止揚に到達した。同じことを、ヘルファディングは、金流通における近代の特徴——と彼が見るところの——中央銀行よりする金に對する「無限の需要」を通して

欺き取られた。この客觀的事象の發展は、ブルヂョア學者の陣營——殊に欺瞞的價値を主張する名目論者——においては、貨幣の價値は金から受取るのではない、逆に金の價値は貨幣から受け取るのだといふ頑強な『通念』となつて現はれてゐる。(例へば、山崎博士、深井英五氏『金の價値と通貨の價値』國家學會雜誌昭和五年十二月、或は同名の著書。殊に兩氏の論争等。尙、本章附録の短文參照。)

名目説の素地をなすものとして流通過程における近代風景を描寫するだけでは、近代ブルヂョアジの貨幣におけるイデオロギーの一般をその物質的基礎において曝露するものとは云へない。貨幣無價値論者は何がゆゑに貨幣の無價値を主張しなければならないのか。價値なき貨幣を把握しながら何がゆゑに貨幣價値の空幻なる霞の幕にかくれなければならないか。乃至は、その實踐におけるさんらんたる黄金の貨幣價値が、何がゆゑにその理論的把握においては欺き取られねばならないのか。この問題が解かれるときはじめて貨幣におけるブルヂョアのイデオロギーはそれがブルヂョア・イデオロギーとしての物質的基礎を見出し得るであらう。

吾々はまづその空幻なる貨幣價値への執着——これは名目主義者の論理的破綻だ——から始めよう。吾々が本論の冒頭において見たやうに、戦後の帝國主義ブルヂョアジは、マーカントリスの再來として、世界の果てまで金の狩獵に出かけてゐる。國際聯盟の金委員會から臺灣の金鑛脈を探索に出かけた日本大新聞の桃太郎劇の茶番に至るまで、ブルヂョアジの政策は大がかりに金の争奪にうづ巻いて

ゐる。その代辯者には『金本位の排棄』を放送させてゐるブルヂョアジは、それではいまや血迷ひでもしたのであるか。決してさうではない。

資本家は『彼といふ人間において意志と意識とを興へられてゐる資本の作用』を代行する。資本家は世界史ドラマの最後の一幕『資本家社會』に出演するところの一人の經濟的『いでたち』である。この資本家といふ『いでたち』を通じて、『經濟』はそれ自身の必然性を遂行するのである。(『資本論』第一卷第廿一章參照) 帝國主義ブルヂョアジの實踐は、金融資本の無上命法の必然性の忠實なる實現である。資本の意志に奉仕するブルヂョアジが、その實踐において、そのエレメントにあつて、何のヘマを仕出かさう。金持立におけるブルヂョアの情熱の一面——經濟的な一面——これが『金不足』説として表明せられた。もう一つの——いはば政治的な——一面、それは『金偏在』説として適當の表現を得たのである。

この世の正常なる經濟的發展のためには、ヨーロッパの金保有の現在高は年々三パーセントづつの増加を必要とする、この三パーセントに満たない現在の世界金産額では『世界は、無限の將來まで、緩慢ながらも、果進的な、ぬきさしならぬ通貨收縮過程に陥る、さうして、あらゆる害毒が……』と豫言者めいたカッセルの宣傳は、必しも地熱の減退による人類滅亡説の恐怖ほど遠い夢の如き假説的な言辭ではなかつた。それは、ブルヂョアジの實踐にねざす一つの正しい知覺を含んでゐた。しかし、『それだか

ら金は即刻廢棄しよう」といふカッセルの頭の中の「合理的」な第二の答案が、ここでは全く落第であつた。そこで北歐の教授カッセルに代つて、新しい使徒として南阿地もとの實際家ストラコッシュが登場した。「重大なる金問題」は引つづいて再生産されつつある。だが知覺はいつまでも知覺である。「およそ神祕につつまれた脅威ほど吾々をおびやかすものはない、世界の金供給高の減少は物價下落の原因だといふ言説は、吾々を神祕につつまれた脅威としておびやかす。」(ナショナル・シティ・バンク月報、一九三〇年九月)貨幣數量説は、この神祕に對する知覺神經の役割を果たしたのである。それは、資本家的流通において繰返へされる現象形態の經驗的知覺であり、いはば資本家のかんである。嘗て戦前の世界的物價騰貴の際に、數量説の誤謬を清算せんとしたマルクス主義者のヴァルガとヒルファディングとが、この資本家のかんを感じがひして却つてうち死をした。それは、數量説を何らかの對等な理論だと買かぶつたため、その結論を顛覆させようとして却つて自分の力で自分達の勞働價值説を顛覆さしてしまつたのである。金と物價との一般的關係は、もとより金と物價との流通過程における直接的對置關係から何ものも引出し得るものではないが、さればとて、單純に流通過程を除外した關係からも説明され得るものではない。(ヴァルガは最近においてこの後の誤謬に陥つたかに見ゆる。「世界經濟年報」第十輯。一五——一六頁。だが、これは嘗つて金の固有價值を否定してゐたヴァルガにとつては數歩の前進であらう。彼は、今度は單に金鑛業における勞働の生産性と商品生産におけるそれとを對置して、問題の金生産額の減少

を取り入れてゐないのだ。)問題は總過程との關聯においてはじめて正當に「認識」され得るであらう。即ち金生産における社會的必要勞働時間に觸れることなくしては「神祕につつまれた脅威」は解體せられ得ないのである。かくてここでの問題の具體的闡明は、まづ第一に、金の生産行程における勞働の技術的組織的なる種々の變化と金鑛自身の變化とに伴ふ勞働の生産性の詳細なる研究を必要とし、更に、金生産額の正確なる決定を要する。假りに、金鑛業における勞働の生産性が不變であるとすれば、世界金生産額の全體的減少は一定量の金の生産に要する社會的必要勞働時間の増大として現はれるであらう。「各一定の商品がその時の社會的欲望以上の程度に生産されるとすれば、社會的勞働時間の一部は浪費されることとなる。そしてこの場合にはかかる商品の總量は現實的に含まれてゐるところよりも遙か少量の社會的勞働を市場において代表することとなる……一定種類の商品の生産に利用される社會的勞働の量が、この商品に依つて充たさるべき特種の社會的欲望の量に比して餘り小さい時には、反對の結果を生ずる」(資本論、第三卷、上、第十章)。金に對する「社會的欲望」(支拂能力ある社會的欲望)は今や増大するとも減少しない。金生産額の減少はかくて金の價值の昂騰に導くであらう。又、假りにもし、金生産額の減少が、金鑛自身の質的貧化に基くならば、金生産における勞働の生産性は減退し、一定量の金に要する勞働時間は増大するであらう。この場合に現實に金生産に用ひられる社會的勞働の量が減少し、しかも金に對する社會的欲望が同一であるとするならば、金の價值はヨリ一層騰貴しよう。商品

生産の側に變化がなければ、物價は、従つて下落しよう。もとより現在の物價の下落がこの局面のみに原因をもつものでないことは云ふまでもなく、寧ろこの局面はその一原因たり得るにすぎないが。

かうした把握の方向は、俗流經濟學の當て推量とは本質的に異なる。ただ資本家社會の本質的發展は、その中において實踐するブルジョアジーにとつては、なみなみの關心では足りぬ生命的關聯において立つ。「資本の作用」の代行者たる資本家は、その實踐における交渉において、固より無批判的ではあるが、資本の進路を把握する。かやうにして、「一般的購買手段」としての金の必要が、この世の最後に生き抜かんとする各國帝國主義ブルジョアジーの制し切れない衝動として、日を追ふて向上する。金に對する「社會的欲望」は異狀に張り切つてゐる。さうして、金生産における労働の生産性は殆んど動かない。

かやうにして、獨占資本のもつ一の搾取形態たる「物價」の永續的なる下落が導かれ得る。爛熟せる資本主義の大きな罅隙が大きな矛盾の一面がここにかうしてのぞいてゐる。資本家の實踐は叫ぶ。「いま世界を甚しく惱ましつたある不可避的なる攪亂状態の再發を除去しうる唯一の方法たる、金使用の節約といふ世界共同の目的のために、英蘭銀行よ、今一度立て！」（一九三〇年、ストラコッシュ）と。

その理論における空幻なる貨幣價值、この價值に對する——論理を暴壓してまでの——執着、それは資本家社會の必然性におけるブルジョアジーの盲目的なる實踐から潛在的欲求として引上げられて「理論」の一隅に醜く存在するのだ、といふことを吾々は以上において發見し得るであらう。だが、同時に

この「價值」の觀念的存在は、窮局においては、金本位維持といふ資本家社會の必然的要求につながる。吾々はこの關聯を次の考察の中から窺ひ得るであらう。

### 5 「價值なき貨幣」批判——（紙幣本位制）

吾々は最後の問題に移る。

近代的名目主義の一般的特徴たる貨幣無價值論の社會的根據は何處にあるか。この問題を、ただ非感性的な信用貨幣の老なる發展そのことの思惟における單なる直接的反映と見るのみではまだ充分ではあるまい。

名目説は何ゆゑに貨幣の無價值を固執しなければならないか。それは、まづ最近世の發展の特徴たる信用貨幣の貨幣としての把握を通じて、紙幣一般を貨幣として押出さんがためである。そして、本來一片の價值なき紙幣を「黄金と眞珠の身代り」だといつはらねばならぬ所以は、經濟學者達が考へるが如く、理論の必然でもなければまた論理の要求でもないのである。

學者達はまづ以つて紙幣と信用券との區別をやらない。彼等に取つては「政府紙幣と銀行紙幣の區別は其名稱の示す紙幣發行者が政府であるか銀行であるかを標準とせる種別である。」<sup>1)</sup>さうして「銀行券の方が經濟界の繁閑に適合して通貨供給の伸縮力を有する。」<sup>2)</sup>それ以上には何ら本質的の區別をもたない

のである。それ以上の分析を試みることは、抑も紙幣の貨幣たることを獲得するに不都合を生ずる！

だが、銀行券、小切手、手形その他の信用貨幣は、もともと商品流通そのものの上に發生する信用關係を基礎とする。商業手形の流通にあつては、結局において手形交換所の決済に残る交換尻が現金にて支拂はれねばならぬ。銀行券は明かに金の保證をもつ、少くとも決済残高が結局において金で支拂はれなければならぬ。「銀行券等々は貨幣流通……に基くものではなく、手形流通に基くものである。」そして「その手形は本来の商業貨幣を構成する」(マルクス)。マルクスはつねに資本家的生産方法の發展に伴ひ信用制度の基礎がすばらしく擴大せられることを云つてゐる。そのことは必然に信用貨幣の老なる發展を伴ふ。従つて、信用貨幣そのものの發展は資本家的生産における一つの必然である。これに對して強制通用力ある國家紙幣、即ち不換紙幣は、何ら信用に基づいて發生するものでなく、國家から與へられた強制通用力により排他的なる流通手段として機能するのみである。信用貨幣の背後には貨幣が金の姿態において立つてゐる。不換紙幣には一般的にこのことがない。しかるにこの信用貨幣の資本家的必然性の中に紙幣の流通を一色に塗り込むことに依つて、紙幣本位制の必然性を欺き取らうとする！またかやうにして紙幣本位制の理論的(?)基礎づけは、同時に、その實踐において、インフレーション政策を是認せしむる一般的基礎を獲得しようとする！

かくて今や「貨幣即ち紙幣である」といふテーゼが、貨幣無價值論の實踐的な進出の第一歩を踏み出

してゐる。そこでは、取引の九〇パーセントを覆ふ信用貨幣發展の事實をもつて紙幣本位制の必然がさむき取られんとする。「大戰時及び大戰後の貨幣現象に基く體験は將來の幣制が漸次正貨から離脱すべきものであることを實證したものと解すべきである。」!! かやうに、「實證的研究」の結果は云ふ。

貨幣價值を通して大衆の手から直接的な收奪を行ふ最も大がかりな最も大膽なる方法であるところのインフレーションは、信用貨幣の幻覺を利用した紙幣本位の是認の下に、はじめて理論的な法衣を纏ふて遂行される。兌換停止下でもなるほど同じ姿の日本銀行券の「十圓札」である。だが、インフレーションの大衆に對する收奪作用については、それが信用貨幣に依る場合と不換紙幣に依る場合とは固より大差がある。ここでは詳しくは觸れ得ないが、大まかに云へば、前者は主として資本家の手を通して間接的に、且つ生産過程を通して、後者は國家自身の信用の需要を充たすために——貨幣流通その物を媒介として——直接的に大衆を收奪する手段として、遂行される。作用の過程も固より異なるが、何よりも前者の發展には一定の限界が存する。老なる無限的なインフレーションは勢ひ紙幣のインフレーションとして發展する。ところで、これらインフレーションの實踐が紙幣本位の可能と必然とを理論的に前提するとすれば、いまや吾々は、紙幣本位の本質を追求することに依つて、その上に立つイデオロギーの一般を解明し得るであらう。

紙幣本位制を單に否認するかの如き口調に對して、或は讀者が反問されるであらう。マルクシストと

いへども紙幣本位制を認めないわけには行かない。これに對して私は然りと答へ、また否と答へる。事實マルクシストの間に於ても、この問題については可成りの議論があるのである。マルクス主義に立脚して紙幣本位制の少くとも可能性を論證しようとした最初の人はヒルファディングであつたらう。彼は、これを、マルクス貨幣論の一發展といふ形において遂行しようとしたやうに見える。——「抽象的には」次のやうな純粹紙幣本位が構成されよう、と彼は考へた。「先づ、強制通用力ある國家紙幣を平均的な流通入用を満足させる量だけ發行するところの、一つの封鎖的商業國家を考へてみる。この紙幣の總額は増加できないものとする。流通界の入用は、この紙幣の外に、恰も金屬本位制の場合と同様、銀行券その他によつて賄はれる。今日の大多數の發券銀行條令に倣つて、紙幣はこの銀行券に對する保證準備の役目をするものとなる。紙幣を増加することは出來ぬから、價值下落の憂はあるまい。然らば紙幣は恰も今日の金の如く時々の流通事情に應じ、流通の範圍が縮少するときには銀行に流入するか若くは個人によつて退藏され……かくして、國家紙幣は價值の安定を保つこととならう」と……この「紙幣の社會的流通價值」を、ヒルファディングは、流通に必要な貨幣としての金量の價值からではなく、直接に、流通する商品價值から引つ張り出す。即ちここでは貨幣の價值が本來空であり、ただそれが商品總量の價值を反映する限りにおいて價值をもつのである。ここでは法式としては數量説がそのままマルクスの扮装をもつて立ち現はれてゐる。だが、ヒルファディングが主として非難せられたのはこの紙幣

本位制における彼獨特の「發見」を、貨幣價值一般に定式化したものとしたためであつた。紙幣本位について近似の見解をとつたものはヴァルグであつた。彼は、數量説をかういふ意味で駁した。——「數量説は、金本位制に對しては正しくない、尤もそれは純粹紙幣本位制又は自由鑄造禁止本位制に對しては正しくない」と。

ヒルファディングやヴァルグに従ふならば、數量説は少くとも紙幣本位制の場合には妥當し、しかるべき、紙幣本位制には價值法則に基づく資本家社會の内在的法則は適用せられず、他の別個の原理が適用されるかを見ゆる。同時に、かかるものが妥當する現象として、紙幣本位制の必然性乃至は少くとも可能性が容認される契機がここに存するのである。事實ヒルファディングは、「紙幣本位が可能となる前に歴史的に金屬本位が先行せねばならぬ」(優點は彼)ことを「高調する必要がある」とする。「抽象的に」考へられたことが、彼にあつては、「歴史的」必然性を主張しようとするのである。ここに問題は次の如く展開されるであらう。——一般に紙幣本位制の必然なるものがあるか。更に、金本位制の必然と紙幣本位制とは如何なる關係に立つか。乃至は、資本家的生産方法の内在的必然性において紙幣本位制は如何なる地位を占め得るか。

この問題を解くためにはマルクスの貨幣把握を嚴密に跡づけて見る必要があらう。だがここでは固より簡單なる指摘に甘んずる他ない。商品より貨幣への轉化を商品自身における矛盾の展開として、三

段に互る價值形態の發展を通じて段階的に把握したマルクスは、それによつて「貨幣の必然」を論理的に掴むと同時に歴史的に捕へた。その發展の特殊なる段階が重要であつた。そこでは一定量の労働時間を含むに過ぎぬものとしての金は商品であるが、「抽象的な人間労働の社會的な實現形態」として一般的労働時間を獨立に體化するものとしては金は自然形態のまま貨幣となる。更に貨幣そのものもそれ自身の發展をもつ。「價値の尺度」としての貨幣（金）の發展を待つて、はじめて「價格の標準」たる機能が生ずる。更に後者の基礎の上において「計算貨幣」として本位の貨幣名への外化が成立し得る。かくして金本位の成立の基礎が、分業と私有財産を前提する社會における商品交換の矛盾から生れ、そして金本位はこの矛盾を一應解決する。しからば、すでに成立したる金本位はさらに如何やうに轉化する必然性をもつか。本位の轉化としてのこの問題提起は、しかしながら何らの意味をなさないであらう。金本位は、私有財産を前提する生産關係の止揚とともに廢棄される必然性があるが、この前提を存せしめるかぎりそれ自身の廢棄には至り得ない。そこには、金本位制の轉化として、紙幣本位制へ至るべき何らの必然性も探し出せないのである。

しからばマルクスにあつて紙幣とは抑も何であるか？「紙幣とは」——マルクスに於ては——「金の標章であり、貨幣の標章である。」それは金の身代りとなる所の一つのしるしである。が、それはただ一定の條件のもとにおいてのみ、價値の身代りたり得るのである。紙幣それ自身としては云ふまでもな

く無價値である。その無價値なる紙幣が金を代位し得るのは「たと金流通手段としてのその機能において孤立化され獨立化される限りにおいてである。」それは、流通手段としての機能のみをもつかぎりでの金量だけを代位し得るのである。この金量とは、言葉をかへれば、商品の流通界が汲收し得る金量である。紙幣はともかくもこの金量の價値だけを代位し得る。この關係から、紙幣流通の特殊の法則は、「紙幣が金の代理となる割合からのみ發生し得る。」従つてこの法則はマルクスによつて次の如く規定せられる。「紙幣の發行は、それによつて象徴的に表示される金がかかる象徴によつて代理されざるかぎり現實に流通せざるを得ざる量に、限らるべきである」と。この限度（金の必要流通量）を越えて紙幣が増發されるれば、紙幣の代表する價値はその紙幣量の膨脹に反比例して下落するであらう。そして、紙幣の膨脹は、紙幣の代表する價値をしてつひに紙幣自身の本來の價値——或ひは零——に達するまで下落せしめ得るであらう。紙幣流通の特殊法則を認めるかぎり、紙幣本位制は少くともかゝる可能性の上に立つことを認めざるを得ない。

不換紙幣の發行、乃至銀行券の不換紙幣への轉化は、資本家社會においては本來何にもとづいて起るか。むしろそれには種々なる場合があり得よう。が、一資本家國が金流出の危機にそなへんとする場合、支拂能力なき國家の需要にそなへんとする場合、等は、それが強制される主たる場合であるだらう。かかる場合は、それ自身既に國家財政の極端なる破綻乃至は資本家的生産の全機構の著しき頹勢を曝露せる



ときである。一個の印刷機をもつて社會的勞働量のいくばくをも含まざる空なる紙幣を、貨幣として、單なる流通手段としてではなく支拂手段として、創造せんとする意圖はむしろこの場合における不換紙幣採用の前提でさへあるであらう。かく何らの社會的勞働をも用ひずして價值を強制せんとするそのことは、既に、資本家社會においてはその矛盾の激化とその一面の現實的露出とを意味するのである。そこでは既に資本家社會を支配する法則の正常なる運動が破壊せられたのであり、かくて不換紙幣制の出現はいはば資本家社會の必然性が貫徹されるために起るところの矛盾の曝露であらう。その資本家社會の必然性は、かくて出現せる紙幣そのものの運動の中をも貫徹する。それは「國家權力はよく貨幣を印刷し得ても、貨幣を創造し得ないことを教へるのであり、」流通手段としての紙幣の法則は、貨幣創造者がさし迫つて印刷機を必要としたとき、常にその意志に反して自己の權利を貫徹したのである。」<sup>9)</sup>

かかる紙幣の法則を根柢とする紙幣をもつて本來の貨幣制度たらしめんとすることは、従つて何ら資本家社會において必然性をもつものでなく、却つて資本家社會の必然が貫徹されるために曝露されるところの内在的矛盾に胚胎するのである。況んや、紙幣本位制といふ言葉を、現今の俗流經濟學がこれを慣用するやうに、價值尺度としての金をも排除して觀念したやうな内容に解する場合においては、その必然性の如きは到底問題たり得るところではない。しかも、寧ろかかる考へられ得ざる紙幣本位制こそ、「價值なき貨幣」の主唱者達が常にまことしやかに考へてゐるところのものではないか。

- (1) 牧野輝智氏『貨幣學の實證的研究』頁三五三。
- (2) 同右、頁三七五。
- (3) 同右、頁二八五。
- (4) 同右、頁三九四。
- (5) 『金融資本論』頁四三—四。林氏譯、改造社版、頁八三—八四。
- (6) 前掲ノイエ・ツァイト論文(拙譯『金と物價』頁四)。
- (7) 拙譯『金と物價』頁五九。
- (8) 『資本論』(岩波版)第一卷第二冊、頁二一〇。
- (9) エ・ルードウィヒ『金、貨幣、紙幣』(柳田民藏氏譯、大原社會問題研究所雜誌、七卷一號所載)

## 6 「證券偽造者」の貨幣論

簡單なむすびをつけておかう。

問題はここでは名目論一般の觀念形態とその社會的實踐との聯關にあつた。いまやこの聯關をめぐつて、價值なき紙に價值をあさむかんとする證券偽造者の貨幣理論の面紗が完全にはぎ取られる。ナポレオン戦争から歐洲大戰に至るまで幾度か繰り返された天罰に懲り性もなく、紙ばかりが貨幣であると、幾多の「歐洲大戰後の貨幣現象を中心としたる貨幣學の實證的研究」が、いまや各資本家國において、

いよいよ紙幣本位制の「理想」を再生産してゐる。だが事實の必然性は正にその反対の方向を指してゐるのだ。これらのことはいまや何を意味するであらうか。貨幣における空なる価値の幻想は、金本位の必然の側を死守せんとするブルジョアジーの本能的知覚であり、反対に、貨幣無価値論一般は、インフレーションの自己矛盾、自己撞着を克服せんとする、言葉をかへれば金本位の必然における矛盾の側を克服せんとする資本家的把握であると云ひ得るであらう。總じて、価値あつて価値なしといひ価値なくして価値ありといふ矛盾し混亂せる表象は、高度の資本家社會の抜きさしならぬ矛盾を體現せる金融ブルジョアジーの悩みを反映するものと云へよう。

—一九三・三—

附

### 山崎博士の譬喩

——貨幣の価値が金の価値を決定するか——

「茲に甲乙大小の二槽があつて、甲の水は一石で乙の水は一升と假定する。此の二槽間に何等の連絡も

なければ二槽の水平は別々に高低するが、一本の管を甲乙の間に通すれば水平は直に同一となる。而して乙槽に若干の水を加へたときに、若し管がなければその水平が五寸高くなるべきであるが、管がある爲に甲槽にも水が移つて而も甲槽は大であるから甲乙兩槽の水平は例へば一分と云ふが如く極めて僅か高くなるに過ぎぬ。之に反して、甲槽に水を入れてその水平が三寸高くなる場合に管を通じて水が乙槽に移つても乙槽は容積が狭いから所謂補正力が微弱で、甲乙兩槽共に水平は矢張り三寸近く高くなる。即ち甲槽の水平の變動が乙槽の水平に及ぼす影響の程度と、乙槽の變動が甲槽の水平に及ぼす影響の程度とは其間に大差があるので、乙槽の水平は甲槽の水平に追隨すると云ふべきである。而して甲槽の水とその水平とを貨幣とその価値とに、乙槽の乙とその水平とを地金とその価値とに見て、「自由鑄造」と「自由鑄潰」とが管であるとしたならば、「メタリスト」の説は乙槽の水平が甲槽の水平を定めると云ふに他ならぬ。是れ即ち、主従の關係を顛倒して居ると云ふ所以である。」

これは、わが國における貨幣論の先覺山崎博士が、その著『若干の貨幣問題』の中にかかけられてゐる「貨幣に關する若干の譬喩」の一節である。一つの譬喩にすぎぬのではあるが、しかしその譬喩をもつて、博士は、長く抱持されてゐるその搖ぎなき自説を主張されてゐるのであつて、博士にとつては大切な譬喩であらう。

さてこの譬喩にはどんな妙味があるだらうか。

山崎博士は貨幣論者としては元來痛烈なメタリスト攻撃論者で、いま猶ほメタリスト排撃者としてはさほど反駁を蒙むこともなく、至極安泰の地位を占めてゐられるやうである。引用の譬喩も近著に始めて收められたのではなく、とうの昔の大正六年に當時のメタリスト河上博士への應酬に使はれた時代つきのもので、今度はそれにまた新たに磨きをかけられたのである。さて當の問題は、金地金の價值が貨幣の價值を定めるか、それとも貨幣の價值が金地金の價值を定めるといふ、例のお定りの、メタリスト對ノミナリストの對決であるが、お定りであるだけ、さう輕々しい問題ではない。山崎博士からすれば、メタリストが主張するやうに金地金の價值が貨幣の價值を定めるといふのは「原因結果の關係を顛倒する謬論」で、事の真相は貨幣が主で地金が従でなくてはならぬといふのである。博士は、この關係を論理的に説明するに代へて、一つの譬喩を以つてした。それが引用の一齣である。

この譬喩の妙を味はんとするには、まづこの譬喩の眞意を捉へてみるものが肝要である。いまここで甲乙二つの水槽に盛られてゐる大小の水量といふのは、一國に存する貨幣——「預金貨幣まで含めばますます然りであるが」——の分量と金地金の分量とで、甲乙二つの水平の高さは各々貨幣の價值と地金の價值とに譬へられてゐる。これを文字通り正直に解釋してゆかうすると、槽の水量即ち貨幣（又は地金）の分量と謂ゆる貨幣（又は地金）の價值との關係が、ここではどうしても考慮されねばならぬ要素

をなしてゐる。で、それを考へに入れてみると、そこでは貨幣量の増加と共に謂ゆる貨幣價值が増加し同時に又、地金量の増加と共に地金價值が増加するといふことになつて、何とも面白くない。また、水平の高さなるものを單に貨幣價值並びに地金價值の高さと解釋しないで、貨幣總量の價值並びに地金總量の價值の高さを指したものと取つてみると、それでは益々もつて譬喩の眞意から遠ざかる。そこで博士の眞意をとつて、博士の眞意を生かすために、譬喩を少しばかり加工してみる。即ち二つの水槽の底面の面積を各々貨幣總量並びに金地金總量とし、水平の高さを各々貨幣價值並びに地金價值とする。従つて、各々の水量は當然に貨幣總量の價值並びに地金總量の價值となる。かうしてみると、なるほど博士の譬喩の如く、甲槽の水平（貨幣價值）を三寸高くすれば乙槽の水平（地金價值）も三寸近くまで高くなる、といへさうである。博士の譬喩はもちろんかう云ひたいのであらう。まづそれを正しいとする。

ところで、問題なのは、いまこの正しいと見られる關係は何を前提としてゐるかである。それは何でもない。（一）まづ甲乙兩槽に出入するものは水といふ全く同一の物質である。（二）二つの槽の間に一本の管を通じてゐる以上はどちらから水を注ぎ込むにしても、二つの槽の水平は同時に動き、そして同じ高さに止まる、といふことを前提してゐる。これを云ひかへると、（一）ここに貨幣といひ地金といふも實は別個のものではなく根柢においては同一物（金）でなくてはならぬ、（二）自由鑄造と自由鑄潰の管が通じてゐる以上は兩者の價值は本來別々に動かず、つねに一緒に動きそして同一の高さにあらねばなら

ぬといふことを前提してゐるのである。

さて、かういふ二つの前提は一體何を意味してゐるであらうか。それは、(一)金、銀、銅、紙片その何たるを問はず、それら各種の貨幣は、それらの各々とは又別個の統一的な貨幣観念をなす、(二)従つて貨幣の価値とはこの貨幣全體が普遍的に有する価値であり、その貨幣の価値とこれを構成する地金の価値とは本來別物である——(博士「貨幣銀行問題一班」第一篇及び第二篇参照)——と主張されるノミナリスト山崎博士の貨幣論の根本命題を自ら覆へしてゐるのではあるまいか。譬喩は正直である。その譬喩自身の間違ひのない構造の中に、譬喩されようとしてゐる事柄自體のほんとうの姿が、そのまま間違ひのないところを表現されてゐる。まさに譬喩の妙であらう。

ところがその譬喩のほんとの構造をつきとめないで現象の皮相だけを見てみると、皮相の現象は硝子コップの水に挿された鉛筆のやうにへし折られてゐる。このへし折られた鉛筆をへし折られた鉛筆としてそのままつと正直に、もつとむき出しに教へてゐる譬喩がある。それは、上に掲げた譬喩が「果して當て嵌つてゐるや否や自ら危ふんで」をられた山崎博士をして「最近……自信を得させ」るに至つたところの、アメリカのフィッシャーの譬喩である。

「山中に往々雙子の湖水があるが、これを連絡する水路があればその水準は略ぼ同一となる。試に、一方を「工藝用金の湖水」The lake of gold-in-the-arts と呼び、他方を「流通する金及び貨幣の湖水」

The lake of gold-and-money-circulation と名づける。……この問題に就て一方に偏する議論を唱へんとすれば、即ち曰く「この貨幣湖の水準を定めるものは工藝湖の水準である。何となれば後者がその水準に前者を導くからである」と。而して他の一方は曰く「貨幣湖の水準を定めるものが何んでも他の湖の水準をしてこれに同じからしめる、従つて金の価値を定める」と。……古い時代に於てこれら兩湖の大きさと重要さに就て云ふたならば、何人でも「地金説」が正當であると唱へるであらう。何となればこの時代には貨幣の本當の流通もなく産業の組織もなく、亦銀行も存在せず、貨幣は使用されても物々交易と大差ないので、實際各種の用途における金の価値を定めるものは裝飾としての価値であつて、貨幣湖は何らの影響をも與へ得ぬほど極めて小さいものであつたからである。然るに、今日は主客全く顛倒した。……」

これがフィッシャーの譬喩である。

大きい湖水の水準が小さい湖水の水準を定める！ さういふ風に見える！ 硝子コップの水に挿し込んだ鉛筆は曲つてゐる！ さういふ風に見える！ その通りである。ところで、大きい湖が大きいからその水準が小さい方の湖の水準を定めるかといふ問題は、U字形のサイフォンの中の水の水準は右の方が定めるのか左の方が定めるのかといふ問題と同様、鉛筆は曲つてゐるやうに見えるから鉛筆は曲つてゐるのかといふ問題と同様、日本では小學生の理科の試験問題である。

が、問題は元來譬喩、竹刀には竹刀で太刀合ふ。そこで私もひとつ猿の人真似をやつてみる。

「茲に甲乙大小の二槽があつて甲の水は一石で乙の水は一升だと假定する。ところで一本の管が甲乙の間に通じてゐるので水平はつねに同一になつてゐるし、また新たに水を加へてもただちに同一となる。いま乙槽に徐々に水を加へてゆく。もし管がなかつたらその水平が五寸ぐらひ高くなるのはすぐであるが、事實は管があるために水は同時に甲槽に移り、しかも甲槽は大であるから、乙槽の水平は實際になかなか上らない。やつと五寸に達したとみれば、甲槽の水平もやはり五寸に達してゐる。これに反し、甲槽の方から水を注いでも、やはり同じ経過をとり同じ結果に到達する。即ち甲槽から注ぎ入れても、乙槽から注ぎ込んでも、同じ量の水であるならばそれが兩方の槽の水平に及ぼす影響は等しい。そしていま兩槽の底面積を各々貨幣總量(甲)並びに地金總量(乙)とし、水平の高さを貨幣價值並びに地金價值の高さとするならば、各々の水量は従つて貨幣總量の價值並びに地金總量の價值となるであらう。そこで管が自由鑄造と自由鑄潰といふことになれば、貨幣の價值が地金の價值と本來別物であるとか又は貨幣價值が地金價值を決定するとかいふノミナリストの主張は、自由鑄造と自由鑄潰の一本の管の存在を忘れたもの、乃至はこの管の口を一寸塞いでおくことを夢想するものに他ならぬであらう。しかも一本の自在管の存在が事實であるとすれば、甲乙兩槽の水平を定めるもの果して何れが原因にして何れが結果であるか？」

が、山崎博士が上のフイシャー教授の譬喩を指して云はれる通り「わが國ではなほ一般に舶來品の方が和製よりも信用が厚い」とすれば、和製どころか Made in Japan のマークさへない私製の譬喩は、到底その妙を博し得まい。

—一九三三・三—

追記

この短文はだいぶ舊作に屬してもをり、もとより収録の價值あるほどのものではない。そして山崎博士自身もその後この長年得意とせられた譬喩を放棄せられるに至つてゐる(昭和五年十月「國家學會雜誌」参照)。しかし、その放棄せられた動機に至つては、私がここに問題としたやうな觀點からではないと思はれるので、その意味では、このナンセンスめいた拙文も猶ほ一片のノミナリズム批判たり得ようか。敢てここに收める所以である。

(一九三三・一)

## (二) 金本位動搖とそのブルジョア的把握

### —「金」の恐慌と「理論」の恐慌—

#### 1 金の恐慌

『金の恐慌』はかれこれも十年もつづく。だが、それはまづ經濟學者の頭の中に於てであつた。……ブラッセルの國際財政會議で教授カッセルが口授した『新説』—金不足論の中に、『金の恐慌』は始めてその姿をあらはした。それは一九二〇年であつた。ちようど、レーニンが、『世界的勝利』の後に世界の主要都市の街上に『黄金の共同便所』を建てるぞと、『三十年後』におけるかくも『人情的』な金の使用道の可能を諷刺した頃のことである。ところでこの『三十年後』は、カッセルによれば、黄金の共同便所どころか、金の飢饉の中に『世界は、緩漫ながらも、累進的な、ぬきさしならぬ通貨收縮過程』へと、漸次的な世界不況へと、陥るはづであつた。金不足—物價漸落の診斷書はその後幾度も書き直ほされた。さうして最後に國際聯盟金委員會によつてそれは太鼓判を捺された。だが一九二九年の夏に任命された

この委員會が一年餘りの討究の結果を『第一回中間報告』として提出した一九三〇年九月の世界市場にはいつたい何があつたか？ 世界市場には、まさに前代未聞の暴風雨がおそひかかつてゐた。『緩漫ながらも、累進的な』金の不足と不況の進展、さういふ生やさしい世界不況は、前年の秋から荒れ出した嵐のためにとつとくに吹き飛ばされてしまつてゐた。第一回中間報告の處方は少々遅過ぎた！ そして、嵐の中には、一方に金の砂丘がもり上り、他方には深い窪地ができてゐた。一般的な金の不足は、この現實の姿のうちにはどこにも見出されなかつたのだ。

『金の恐慌』は、ゼネヴァに集つた經濟學者の頭腦のなかでこんどは『金の偏在』といふ姿をとつた。翌三十一年一月早々提出された『第二回中間報告』は舵を轉じて大急ぎで、『金の分配』に向つてゐた。そして海の彼方イギリスでも、スノーデン幕下の『社會主義者』たちが、同じ『金の偏在』をめぐる生粋のブルジョア學者や銀行保險會社の頭取と鳩首してゐた。かくて『マクミラン委員會報告』ができてゐた。

だが、いづれの『報告』においても、その『金の偏在』は、嵐のあとに出来上つた砂丘だとして討究されたのではなく、盛り上つた砂丘がこんどの大嵐の原因だと宣言されたのである。

マクミラン委員會もまた討議に日をつぶし過ぎた。委員會が世界不況の原因をつきとめて『均等な金の分配へ』の處方箋を書き上げた丁度そのとき、世界では、金の偏在といふ彼等の把握した原因そのも

のがいまや最高潮に達するといふ結果を生んでゐた。それは、何よりも、金流出によるイギリス自身の金本位停止といふ未曾有の出来事をもつて、彼等の擱んだ『原因』が明かに『結果』であつたことを目の前に押しつけたのである。『結果』は、いまやイギリスの金本位停止に前後して世界二十ヶ國の金本位が停止された、三十ヶ國が爲替制限をもつて金の流出を防止した。地球面の八割に亙つて金の自由移動が停止された。金は、流通手段としてはもとより、支拂手段としての機能までも放棄したかに見えた。金は、世界貨幣の王座から落ちたかと信じられた。

『金の恐慌』はここにおいて經濟學者の頭腦の中で三轉せざるを得なかつた。

いまや金本位制の危機として、動搖として、資本主義といふ大きなカラクリを動かす車の中心棒が、金そのものが、搖るぎ出したのだ。これは、金の分量とか分配とかいふ量の問題でなく、金そのものの存立の問題として、質の問題であつた。『金の恐慌』は經濟學者の頭腦の中でもいまや量から質へと轉化せざるを得なかつた。

けれども『金の恐慌』はここでも依然として錯倒して現はれる。戦後資本主義の一般的危機の進展が『金の不足』として經濟學者の腦裡に映じたやうに、そして、いはゆる第三期世界恐慌が『金の偏在』として投影されたやうに、この世界恐慌の新たな發展としての國際金融恐慌の炸裂は、今や『金恐慌』として、ブルジョアのイデオログたちによつて把握された。

しかしながら資本主義の土臺の上においては、およそ『金』の恐慌なるものはない。紙幣の恐慌があり得るのみである。信用の恐慌があり得るのみである。資本主義の土臺の上では、金本位の廢棄はあり得ない、金本位の情け用捨なき必然性のみがあり得るであらう。ある大學教授は『金は罷業する！』といふ新發見を示した。この發見は、せめて、『金は廢業する』といふところまで徹底させたかつた。……だが金はまだなく、廢業しない、そのかぎり金は決して罷業しない。彼は資本主義の工場主だからだ。世界恐慌は經濟學者の頭腦に錯倒し混亂して投映された。この錯倒と混亂とは、恐慌が鋭化し狂暴化するにつれていよゝ表面化するやうである。マルクスは云ふ——『信用制度から現金制度への突如たる變化は、實際上の恐慌に加ふるに理論上の恐慌を以つてする』と。

## 2 理論の恐慌

理論上のパニックは實際上の恐慌が進展するにつれて擴大する。

一九三一年六月中歐に燃え上つた信用恐慌は、ドイツ、イギリスと、國際信用の鎖の環を次々に絶ち切つて、忽ちにして、世界金融恐慌として廣大な部面を火焰に包んだ。日本建築の我が金本位制も一たまりもなく焼け落ちた。それ以前から、金輸出再禁止を寶船と待ちうけてゐたわが國の主たるブルジョア理論家たちの『理論』は、それ自身すでに恐慌におかされてゐた。いまやこれらの理論のパニックはさ

らに騒々しさを加へて來た。けだし、現實の進展はさらに深刻化し、恐慌はさらに一つの轉機の上に立つてゐるからである。ほかでもなく、金本位の停止はそれに必然的につながるインフレーションの問題を課してゐるからである。恐慌の新段階としてインフレーションを目前に控へる理論家たちは、いまやこの重大の事態に際會しわが身をつねつてその『理論』が果して痲痺してゐないかどうかを調べておく必要があつた。——『我々は、も一度ハッキリとゴールド・コントロール・ヴィジをせねばならぬ。』この必要は、たしかにあつたのだ。かくて、このことは、誰よりも金本位への疑惑とインフレーションへの誘惑とに悩む産業資本家の代辯者たちによつて第一に取り上げられたやうである。なかんづく『東洋經濟新報』は、『精彩ある大規模な金論争』を提げて登場した。

(1) 『東洋經濟新報』(昭和七年二月十三日號)

さて同誌上の『金論争』は、この理論を襲ふた恐慌から果して免かれ得たであらうか。吾々はまづこれを當面の問題として取り上げよう。

### 3 金本位の崩壊か通貨説の瓦解か

——(金本位の作用)——

問題は金本位をめぐる。金本位は現に動搖してゐる。さて金本位「動搖」の現實に對するブルジョア・

イデオログの見透しの第一の典型の特徴は、何よりも彼れ自身の見解の甚しく「動搖」せることである。この動搖はいはゆる金本位論者の共通の特徴をなすかに見える。金移動の實際の研究者として、金の現在における機能については可成りの把握を示してゐるポール・アインチックが、金本位の見透しをなすとき既にその金本位に對する確信は大きく動搖を示してゐる。近著『ポンドの悲劇』において彼はいふ——『現在の恐慌の結果は金本位の新しい考察の進展となるだらう。そしてこの考察によれば、金は、それが最も適合してゐるところのこの國際的機能(國際バランス決済における役割)を遂行することを續けるであらう。が、通貨の價値は嚴密に金に釘付けされなければならぬ。』(p. 166)と。更に彼は金と並んで銀貨幣の再起をすら促してゐる。

だがこの種の金本位擁護にかたむく見解を吾々は比較的アカデミックな人々に見出すやうである。東洋經濟新報誌上の論文において、山崎覺次郎博士はスノーデンの演説を引いて云はれる『人間の智能がこれに代るべき一層良好な制度を案出するまでは金本位を維持せねばならぬ』——この語は今後の金本位の復活にも適用せられる、と。ここでは金本位は『他に殆んど方法がないやうに思はれる』からやむを得ず要求されるにすぎない、金本位自體の必要にもとづくものでは固よりないのである。荒木光太郎教授もまた同様のことを述べられる、『金本位制に代るべき「ヨリ良き」通貨制度を見出し得ざる限りに於て』吾々は容易にこれを葬り去り得ない——と。(東洋經濟新報二月十三日特別號、以下出所をかかげないも



のは同誌上の論文によるもの。同様にこれまた一つの便宜主義以外の何ものでもない。服部文四郎教授はまたいふ——紙幣制度は理想的制度であるが「現代人の智識は未だ之を實行するまでに進歩し」てゐない、と。總じて、これらの把握の特徴は、金本位が資本主義の土臺の上にある一つの任意なる制度として取られる點にあり、従つて將來におけるその存在も結局便宜主義にもとづくのほかない。

金本位の見透しに關する第二の典型の特徴は、これに反して、資本主義の土臺の上においてこの土臺はそのままにして今や金本位制が崩壊することを宣言する。高橋龜吉氏云ふ——「今度、金本位が崩壊したと云ふことは、同時に、從來の如き金本位が止揚されねばならぬと云ふ實踐的告白である」と。高木友三郎教授いふ——「金本位時代去る」と。さらに曰く「金本位制度はもはや根本的に不適當」(山崎純氏)と。又曰く「不換紙幣を單なる過渡的現象と見ることは不可能である」(宮川貞一郎教授)と。しかしながらこれらの金本位崩壊の見透しは、いふまでもなく崩壊せざる資本主義の土臺の上においてである。しからば、何をもつて「金本位時代去る」の見透しは可能であつたのか？

金本位の「作用」がいまや作用しなくなつたためだ。いまや、金本位は「野蠻の遺物」(ケーンズ)だ、——これが吾々の受取る答の全部である。

高橋龜吉氏に聞かう——「最近に於ける金本位の停止又は崩壊の根因は……金本位の中心職能たる「物の價の安定」を保つことに失敗したことに基因してゐる。ここに、今度の金本位停止が、單なる停止でな

くて、金本位そのものの崩壊を意味する重點がある」と。そもそも高橋氏によれば、金本位制度の維持される理由はいろいろある、が要約して凡そ六つの作用にもとづくといふ。さらにそのうち「根幹的理由」としては凡そ二つあり、第一は、物價を安定すること、第二は、債權債務其他一切の金錢契約關係の安固を圖ることであつた。……然るに、一九二九——三一年に於ける世界は、金本位の此の經濟的根幹理由、即ち、物價の安定を確保する能力無きことを完全に曝露し、そのため、延いて、債權債務關係其他の金錢契約の安固も亦大規模に破壊せられた。最近に於ける金本位の世界的崩壊はここに淵源してゐる」と。

この見解は正しいであらうか。これについて問題はまづ次の如く提出されよう。——(一)元來、金本位そのものに物價の安定を確保する能力があつたのか？(二)同様にまた本來それは債權債務關係の安固を圖り得るものなのか？と。總じていま高橋氏が金本位の「根幹的」な存在理由として金本位に賦課してゐる諸作用は、そもそも金本位本來の作用なのか？と。

ところでまづ債權債務關係の安固は貨幣價値の絶対不動を前提しなければならぬ。いふまでもなく金の價値は、その生産に要する社會的必要勞働力によつて決定せられるがゆゑに固より變動をまぬがれない。従つて高橋氏の根幹的理由の第二はそも／＼いはれなき要求ではあるまいか。だが、この意味でならば、金本位下の貨幣の價値は最近の恐慌下においても、それが「債權債務關係の安固」を破壊するほ

どの變動を示してはゐない。高橋氏がここにいふ貨幣價値の變動は、むしろ本來の貨幣價値の變動ではなく、むしろ「物價といふ形に起るそれ、即ち物價で秤られた貨幣價値の變化」を指してゐるのである。では、それは貨幣價値ではなく、物價そのものの變動にすぎないではないか。「根幹理由」の第二は、たわいもなく解消されて第一のそれに合流する。

それでは「物價の安定」を、金本位はいつたい約束してゐたであらうか？

山崎純氏はこれを肯定し、氏もまた同様のことを主張してゐられる——「金本位は最早昔の如く、一國經濟の自然調節を爲す力はなく、調節力がない以上、金本位自體も亦遂に崩壊せざるを得ない運命にある……」と。「一國經濟の自然調節を爲す力」——これがここでは金本位の根本的な作用であり、そして金本位の全存在が依據するところのものである。それでは、一國經濟の自然調節をなす力とはいつた何であるか？ 山崎氏はこれを廻りくどく説かれるが、要するにそれは、金本位が「物價を均衡せしめる役割」といふに落ちる。

云ふまでもなく、これは、高橋氏の「物價を安定さす」といふ「根幹理由」と同根である。ただ異なるのは均衡と安定である。山崎氏はこの「均衡」の意味を次のやうに説明される——

『こゝに物價の合致と云はずして均衡と云つた譯は、國際貸借は商品交易ばかりでなく所謂貿易外勘定もあつて、その貿易外勘定の支拂超過國の物價は國際水準よりも低位なるを要し、その受取超過國の物價は國際水準よりも高位なることを許されると云ふ理由から、さう云ふ意味を含んで物價の均衡と云つたのである』と(傍點山崎氏)。

即ち貿易外收支の影響を除いては物價は合致すべきだといふのであり、原則として物價を合致せしめるのが金本位の役割だといふことになる。少くとも國際貸借の差額を範圍として物價が自動的に動くこと、物價がそれに適應することを意味すると見て間違ひあるまい。高橋氏の「物價の安定」といふものこの意味以外には取りやうがない。山崎氏が次のやうにいられるとき、この主張の根本原理が明白に呈露されてゐるのである。

『一體金本位制度が世界の諸國の間に圓滿に維持されんが爲には次のやうな法則が實現されねばならない。それは「金の流入する國の通貨が膨脹して物價が高くなり次第に金の流出する情勢を誘致すると共に、金の流出する國の通貨が縮小して物價が低くなり次第に金の流入する情勢を誘致する」と云ふことであつて、畢竟物價の變動によつて商品取引の消長を促し、以つて國際貸借の均衡を計る作用を意味するのである。』

即ち知る氏らにおいて「物價の均衡」といひ「物價の安定」といふのは、畢竟「物價の變動」であつたのであり、そして「均衡」が必要だつたのは物價ではなくして國際貸借だつたのである。それなのになぜ山崎氏や高橋氏は變動を均衡といひ安定と云はねばならなかつたか？ 云ふまでもなく、それは兩氏が貨幣價値と物價とをけじめもなく混同されてゐるからである。しかもこの混同そのものは尙ほ一つの効果をもつてゐた。なぜか？

問題は本來物價の均衡ではなく物價の變動であり、それが金本位の作用の根本原理だといふのであり、それを換言すれば「金の流入する國の通貨が膨脹して物價が高くなり次第に金の流出する情勢を誘致す

ると共に、金の流出する國の通貨が縮少して物價が低くなり次第に金の流入する情勢を誘致する（山崎氏）といふのである。これ天下周知の古き『通貨説』でないか。ただこの際物價の概念を貨幣價値のそれとスリかへることによつて、物價の變動とはいはず、物價の均衡といひ安定といふ、そしてそれによつて十九世紀初頭の古い装ひを少しばかり煤拂ひしたにすぎない。これ、氏らの「混同」の積極的效果である。

然し、通貨説の誤謬はそれによつて固より拂ひ清められはしない。いま通貨説をここに事改めて批判するのは當を得ないかもしれない。吾々はこの經濟的のイデオロギーの根柢にただ一瞥を投げるに止めてをかう。通貨説は根本において謂ゆる貨幣數量説の上に立つ。そして數量説の誤謬はその本來の形においては殆んど紛碎されてゐるといつていい。だが通貨説は一八四四年のピール條例によつて現實的の勝利を得たかに信じられてゐる。そのピール條例は、イギリス金本位の百年の傳統とこれにならふ各國貨幣制度の實際のなかに固着してをり、かくて通貨説は金本位の實際とともにその解釋として執拗に生きてゐる。金本位が嚴然たる事實である以上、この金本位の實現を齎したかに信じられてゐる通貨説が、金本位の事實を如實に反映する思想でありその唯一の解釋だと信奉せられるのも無理からぬところがある。が、通貨説は金本位の事實の正しい反映ではなくして、金本位をめぐる當時のイギリスの銀行家、金利業者の利益、要するに貨幣資本の利益を反映する一のイデオロギーに過ぎなかつたのである。

通貨説は、それが數量説の上に立つかぎり、貨幣（金乃至銀行券）の數量の増減が直接に貨幣價値を増減するといふことを前提する。この前提に於ては、貨幣が悉く強制通用力をもつ紙幣と同様に流通手段としての機能のみをもつとし、そして支拂手段及び退藏貨幣としての機能をもつ事實が否定される。次に、通貨説は、一國內に流通する貨幣の分量が金の流出入によつて直接的に増減することを前提する。これは一面において貨幣が退藏貨幣たる職能を果すことを無視すると同時に、他方においては、流通貨幣量なるものが、結局において商品價格の總量に依存してゐること、従つてまた發券銀行の意志から獨立してゐることを認識しないといふ主要缺陷をもつてゐる。しかるに事實は、一定の限度内（兌換停止の起り得るほどの極端な場合以外）においては流通貨幣量と金の流出入とは依存しない。そのことは貨幣が流通手段としてのほかに支拂手段及び退藏貨幣としての機能をもつことを一顧することによつて理解し得られよう。しかるにかやうな貨幣機能の根本的諸要素から排他的な流通手段としての貨幣の職能のみを抽象しそれを絶對化することによつて、通貨説——金本位制の自然的調節作用——の主たる基礎は築かれるのである。マクミラン委員會は、『管理された金本位制』の名のもとにこの通貨説を新しく再生産した。さらに、従來の金本位下における物價の安定が必ずしも金自體の自働的調節力ではなく既に管理統制が行はれてゐたといふケーンズの主張が、既に通貨説の改訂増補にすぎない。

(1) マルクス「資本論」第三卷、第五篇、第三十四章參照。

② J. M. Keynes: A Treatise on Money, Vol II, P. 288.

わが通貨説の歸依者たちは、いま動搖しつつある金本位制を批判するに當つて、金本位そのものを批判せず、金本位に對する一つのイデオロギーを金本位そのものとして批判する。これらの批判者はいふ——「金本位制度が内具すると考へられてゐた國際經濟に對する自動調節力は失はれた」(高橋氏)と。またいふ「現段階においては、金本位制度下の物價均衡、言ひ換へれば爲替相場を固定せしめて物價を變動せしめる方法による物價の國際的均衡は次第に困難になつて來た。……そして物價の均衡が無い所にはも早や金本位は成り立たない」(山崎氏)と。……確かにここには金本位動搖の事實が描かれてはゐる。しかしながら金本位そのものの「崩壊する原理」はそこでは少しも説明されてゐない。なぜならばここには通貨説そのものが金本位自體として批判せられてゐるのだから。すなはち、ここでは「金本位制度が内具すると考へられてゐた國際經濟に對する自動調節力が失はれた」のであり、金本位制度そのものの存在理由が失はれたのではない。なぜならば金本位そのものは初めからさういふ「自動調節力」を内具してゐないのだから。すなはち知る、ここに證明せられたことは、なんら金本位の崩壊ではなくて、彼らによつて「考へられてゐた」金本位——即ち通貨説そのものの完全なる瓦解であるといふことを。批判者はまづ通貨説を通貨説として批判すべきであつた。次で彼らは、金本位を金本位として批判すべきであつた。ところが、彼らは、金本位を批判したつもりで實は通貨説を批判してゐたのである。金

本位が崩壊するかはりに、彼らが依つて立つところの通貨説の破綻が立證されたのだ。けれども、わがビール卿のエビゴーンは、決して無益にその抱ける通貨説をぶち壊しはしなかつた。そして通貨説は徒らに恐慌の唯中に立ちあらはれたのではなかつた。彼らは、その抱懐する通貨説を破壊することによつて、實に嘗つてのビール卿の批判者トマス・アットウッドの割役を演じたのである。だが、その割役は固より資本主義擡頭期のイギリスにおける金融貴族に對する單なる債務者の擁護(アットウッド)としてではなくして、わが「バーミンガム學派」は、實に没落資本主義の日本に殺到する労働大衆を向ふに廻して産業資本家及び地主の利益を代辯したのである。

#### 4 金本位の必然とその廢棄の必然

——(金本位の性質)——

しかしながらわが新バーミンガム學派は通貨説を瓦解せしめることではなく金本位制を破壊することこそ望んでゐたのであり、その破壊を主張してゐるのである。

今度の金本位停止は「單なる停止ではなく金本位そのものの崩壊を意味する」——と高橋氏はいふ。この「崩壊」を氏らが金本位の機能における故障に歸せしめたことは既に吾々の見た如くである。だが金本位の機能に故障が起きたことは金本位の動搖を説明するにしても、まだそれによつて金本位が崩壊

したとも廢棄さるべきだとも主張されるわけにはゆかないであらう。これらの人々が崩壊した乃至崩壊すると主張する金本位とはそれでは一體どんな金本位なのか？

『金本位制度は現段階のかういふ状態の下に於ては、少しもそれ自體の機能を發揮しないで、井上前蔵相が行つた様に財界に對して極端な壓迫を加へる事によつてのみ短日月の維持は可能であるが、結局は崩壊するの外はない。』——かう山崎靖純氏がいふとき、金本位は、第一にそれ／＼の國家において獨立に採用され廢棄され得る一つの制度であり、従つてそれは一國政策の對象たるものである。この考へは石橋湛山氏によつてヨリ直截に表現せられてゐる、曰く『私は金本位は、既に久しく世界の諸國の國內に於ては、其名を存して實を存しなかつたと考へる』と。石橋氏においては、國際通貨の場合においてのみ金が問題となる、だが『これとて果して「金」と云ふ如き共通の本位を絶対不可缺少なものだらうか』と否定的に反問されるくらいである。要するに、ここでは「國際通貨」といふやうな國內流通貨幣と同一の基礎に立たない貨幣制度さへが想像される。少くとも、これらの人々の表象においては、一國の幣制は外國の幣制に對して全く別個の立場の上に立つてゐる。

第二に、この表象における金本位は、資本家社會の基礎の上において採られ得る貨幣制度のうちの一つでしかない。高橋龜吉氏が『金本位維持の諸目的』を云爲されるとき、特にその主張は、維持される金本位なるものが一つの政策の對象であることと、またそれが資本家社會の必然から生れ出でたものでは

なく資本家社會から一應離れた別個の意志發動にもとづく產物であることを物語つてゐる。

かうした見解にもとづいて、人々は主要國における今度の金本位停止をもつて直ちに金本位の崩壊を主張した。なるほど金本位は法制的に諸國において停止され放棄されたが、金本位そのものは一般的に崩壊したとは云へない。たしかに、日本においても、イギリスにおいても、圓やポンドは直接に金の一定量目たることをやめた。わが貨幣法第二條は廢止されたわけではないが、兌換の停止によつてそれは有名無實となつた。即ち圓は、一定の金屬重量を表はすものとしての價格の標準たることをやめた。けれども價值の尺度は、兌換停止の日本において依然として金だ。百圓が現在三十五ドルだとすれば、それは現實に金二十匁の約7/10を示してをり、そのかぎり圓は價值尺度たる金につながつてゐる。かくて金本位を停止せる一切の國の貨幣(紙幣)が、減價せる姿においてではあるがみな悉く價值尺度たる金につながつてゐる。金本位が崩壊したと見る人々は、抽象的、孤立的に一國幣制の法律的外觀のみを見、そして支拂手段が建前において紙に變じたことのみを見るが、この紙がたとへ額面の7/10にしる價值をもつのはその背後に金があるからだといふことを見ない。人々は、金本位制の法制上の定在のみを見て、その眞實の經濟的、貨幣的方面を無視する。支拂手段は一應紙に變じたが、それは終局までも紙で押し通すことはできない。無理を押せば減價する。依然として金は價值の尺度であり支拂手段である。そして世界貨幣はあくまでも金だ。このことは單なる理論ではなく却て嚴然たる現在の事實である。そ

したとも廢棄さるべきだとも主張されるわけにはゆかないであらう。これらの人々が崩壊した乃至崩壊すると主張する金本位とはそれでは一體どんな金本位なのか？

「金本位制度は現段階のかういふ状態の下に於ては、少しもそれ自體の機能を發揮しないで、井上前蔵相が行つた様に財界に對して極端な壓迫を加へる事によつてのみ短日月の維持は可能であるが、結局は崩壊するの外はない。」——かう山崎純氏がいふとき、金本位は、第一にそれ／＼の國家において獨立に採用され廢棄され得る一つの制度であり、従つてそれは一國政策の對象たるものである。この考へは石橋湛山氏によつてヨリ直截に表現せられてゐる、曰く「私は金本位は、既に久しく世界の諸國の國內に於ては、其名を存して實を存しなかつたと考へる」と。石橋氏においては、國際通貨の場合においてのみ金が問題となる、だが「これとて果して「金」と云ふ如き共通の本位を絶対不可欠とするものだらうか」と否定的に反問されるくらひである。要するに、ここでは「國際通貨」といふやうな國內流通貨幣と同一の基礎に立たない貨幣制度さへが想像される。少くとも、これらの人々の表象においては、一國の幣制は外國の幣制に對して全く別個の立場の上に立つてゐる。

第二に、この表象における金本位は、資本家社會の基礎の上において採られ得る貨幣制度のうちの一つでしかない。高橋龜吉氏が「金本位維持の諸目的」を云爲されるとき、特にその主張は、維持される金本位なるものが一つの政策の對象であることと、またそれが資本家社會の必然から生れ出でたのでは

なく資本家社會から一應離れた別個の意志發動にもとづく産物であることを物語つてゐる。

かうした見解にもとづいて、人々は主要國における今度の金本位停止をもつて直ちに金本位の崩壊を主張した。なるほど金本位は法制的に諸國において停止され放棄されたが、金本位そのものは一般的に崩壊したとは云へない。たしかに、日本においても、イギリスにおいても、圓やポンドは直接に金の一定量目たることをやめた。わが貨幣法第二條は廢止されたわけではないが、兌換の停止によつてそれは有名無實となつた。即ち圓は、一定の金屬重量を表はすものとしての價格の標準たることをやめた。けれども價值の尺度は、兌換停止の日本において依然として金だ。百圓が現在三十五ドルだとすれば、それは現實に金二十匁の約7/10を示してをり、そのかぎり圓は價值尺度たる金につながつてゐる。かくて金本位を停止せる一切の國の貨幣（紙幣）が、減價せる姿においてではあるがみな悉く價值尺度たる金につながつてゐる。金本位が崩壊したと見る人々は、抽象的、孤立的に一國幣制の法律的外觀のみを見、そして支拂手段が建前において紙に變じたことのみを見るが、この紙がたとへ額面の7/10にしろ價值をもつのはその背後に金があるからだといふことを見ない。人々は、金本位制の法制上の定在のみを見て、その眞實の經濟的、貨幣的方面を無視する。支拂手段は一應紙に變じたが、それは終局までも紙で押し通すことはできない。無理を押せば減價する。依然として金は價值の尺度であり支拂手段である。そして世界貨幣はあくまでも金だ。このことは單なる理論ではなく却て嚴然たる現在の事實である。そ

して、なぜ世界貨幣が金でなければならないかの理由が、資本家社会における金本位の必然性にほかならないのである。いま本論が批判の対象の一つとしてゐる東洋經濟新報誌上の金論争において、木村禧八郎氏は、河上博士とともに金本位の必然性を主張せられる数少き中の一人であるが、氏は、金本位の必然性を専ら金の價值尺度たる機能の不變なる點から導かうとされた。しかしこれと同時に氏は金の支拂手段たる職能を無視されてゐる、——曰く、「金それ自身は交換手段、支拂手段としての貨幣の職能を行はなくなつたが、最も重要な價值の尺度としての貨幣職能は依然として行つてゐる……。」そして「金の價值尺度としての職能は資本主義が没落せぬ限り存続されるものと信ずる」と。金の價值尺度に關する限り、氏の主張に固より間違ひはないであらう。また氏の謂ゆる「交換手段」を流通手段の意味にとれば、流通手段としての金の機能はもとより他のものによつて代位され得る。が、それに反して、支拂手段の機能はますます重要を加へるのである。「種々なる國家的流通領域の間における商品交換が發展すればするほど、國際的差額決済のための、支拂手段としての世界貨幣の機能は、ますます發展するのである。」(マルクス)。金の支拂手段並に蓄藏手段としての機能を度外視しては、金本位の成生の説明としてはともかく、發展せる資本家社会におけるその必然性、わけても金本位動搖の現段階を把へることは困難であらう。けだし、現在、世界の金本位を震撼せしめてゐるものは、金本位制の作用に狂ひが出來たためではなく、却つて金本位の必然性そのものの發展であると見なければならぬからである。金本位はそれ本來

の作用を貫徹することによつて、おのづから自身自身を動搖に導くのである。こんどの金本位動搖の主たる現象形態は、金流出として現はれた支拂手段「金」の異常なる強調である。それは、絶對的商品としての一般的な支拂手段と購買手段とが世界市場における狂氣じみた熱求の對象となつたことを物語つてゐる。ここでは貨幣としての金の必然性が、金本位そのものの動搖を招來したのである。吾々は、金本位の必然性と同時に金本位動搖へのまた破壊への必然性を含むといふことを知る。だが金本位の眞の破壊の必然性は、窮局において、金本位を必然ならしめてゐる基礎條件——私有財産と分業Ⅱ私生産關係——の××に俟たなければならぬ。しかも、かかる基礎條件の××の豫震は、金本位の前代未聞の動搖としていまや地震計の針を強く動かしつつある。

### 5 インフレーションへ！

——(その一)——

金本位の崩壊はここにおいてはそれ自身の必然性をもつと云へる。しかし、この金本位崩壊は、吾々が上に問題にした金本位破壊の政策家たちが待望してゐたところのそれとは全く違つたものである、といふことも最早や明かであらう。なぜなれば、この人々が口にした金本位の崩壊は、それによつて「金本位の後に來る」何らかの新たなるものへの期待ではなく、ただそれによつて將來されるところのイン

フレキシオンへの待望にほかならなかつたからである。かくて、現在の瞬間における金本位問題、ヨリ適切には金本位動搖の問題は、一つの新たな段階にあることを知ることが出来る。この新段階は、直接的な金本位崩壊の問題としては現はれずして、この崩壊へ至るまでの一過程としてのインフレキシオン問題として現はれてゐるのである。

そこで吾々もまた問題をインフレキシオンへと進めなければならない。が、ここでは問題を根本から掘り起してインフレキシオンの本質に深く立入ることは敢てしないであらう。(問題のこの方面については本書第一篇の諸論文が不十分ながら觸れてゐる。)ここでは、矢張り、インフレキシオンをめぐる主要なる二三の『理論上の恐慌』を指摘するにとどめる。

何よりもまづ謂ゆるインフレキシオニストのインフレキシオン論が問題でなくてはならぬ。インフレキシオンに關するこの種の見解を、吾々は我が國の金輸出禁止インフレキシオン政策の主唱者たりし政友會の代表者の言説に見得るし、殊に、當の政策實行者たる高橋藏相の見解に見得る。さらにインフレキシオン謳歌の諸新聞並に諸雑誌の主張に見得るが、いまは試みに『讀賣』の主張を引用しよう。同紙(昭和七年一月十三日)は『インフレキシオンは此際に特に必要』と題して次の如く論じてゐる。

『金再禁止の最大目的は何處までも我が國內の價格體系の訂正にあることを忘れてはならぬ。民政黨内閣が出来てからそれが倒壊するまでに、わが物價は、高値を標準にすれば三割三分、安値を標準に

すれば五割の暴落を來してゐる。ここでは何うしても現在の安値を標準にして、平均二割や二割五分の物價引上げは必要なのだ。そしてそのためには三割や四割の爲替引下と通貨の膨脹とを行はねばならぬ。當面の急務としては、爲替相場の位置を三十五ドル以下に保つことと、徐々に三四割程度のインフレキシオンに轉向して行くことは絶対に必要だ。』

同じやうな主張は、同じころの東洋經濟新報等においてヨリ詳細に述べられてゐる。ただこの『三四割』といふ主張は、二三割でもあり得たし、四五割でもあり得た。が、その程度の如何にかかはらず、これらインフレキシオニストの主張の特徴は、一方において對外爲替を一定の程度(例へば對米三十ドル乃至三十五ドル)に保ちつつ、他方、通貨増發によつて内地物價を相當程度に引上げそしてその地位に物價を保つといふにある。

かういふ主張がいかなる政治的意圖をもつかといふヨリ具體的問題はここには取扱はない。ここでは、かやうなインフレキシオニストの皮算用は現實に可能かといふ理論的な方面に問題を限つておく。

さて、上の主張において問題は先づ二つに別つことが出来る。一は、一定標準に爲替相場を釘付けし得るや否やといふ問題。二は、内地物價は通貨の増發によつて一定の高さに保たれ得るや否やといふ問題。二つの問題は結局相互に關聯してはゐるのだが、先づ別々に考察して行くことが出来る。吾々は先づ第二問から吟味を始める。しかもこの問題に對する解答の中に既に第一問への解答をも含ませ



得るであらう。

わがインフレーションニストの主張によれば、「徐々に三四割程度のインフレーションに轉向して行く」とが必要とせられ、その可能が主張される。云ふまでもなくこの「三四割程度のインフレーション」とはそれだけの「通貨の膨脹」を意味する。「五割餘の物價騰貴」を主張される石橋湛山氏は、この「物價を騰貴せしむる方法」として、「この際五億圓までの新公債を發行」し、これを中央銀行に買取らしめて「通貨の供給を國內に増加する方法」を提唱されてゐる。(昭和六年十二月十九日東洋經濟新報所載、同氏「金輸出再禁止の目的と其效果」參照)。三割であらうと五割であらうと、そのいづれにしろ、これらの主張の主要特徴は、通貨増發によつて物價の一定の程度における騰貴を策したことであり、具體的にはそれを行ふに金輸出禁止下の不換銀行券を前提せることである。これらの主張が、その表面上の修飾と變容の如何にかかはらず、根本において謂ゆる貨幣數量説の上に立つてゐることは云ふまでもない。數量説の主たる特徴は、通貨の數量が物價を左右するといふ一方向的な因果關係を主張するのであるが、その際、この通貨の數量と物價との關係を特に不換紙幣の場合に限つて適用しようといふのではなく、一般的な通貨流通の法則として主張するのである。ただ不換紙幣乃至不換銀行券の場合にあつては、あたかもこのために貨幣量の増加が國家の意のままになり得るといふ點から見て、その理論の實踐的な效果に於て單なる銀行券乃至金貨流通の場合に比し雲泥の差を見出し得るに止まるのであるのだから、この點を度外視

すれば、インフレーションは、貨幣數量説の信奉者にとつては、金本位下におけると兌換停止におけると原理上相違なしと見られるであらう。否、貨幣數量説そのものは、その本來の姿において見れば、兌換停止下におけるインフレーションの特殊なる現象形態をもつて貨幣流通の一般的な場合に押しひろげたものにほかならぬのである。

ところで貨幣數量説が貨幣流通の一般的な現象を説明するものとして誤謬であることは今更ら云ふまでもない。ただこの數量説の主張するやうな通貨量と物價との關係は、謂ゆる不換紙幣が流通する場合には一應適用され得るのである。なぜならば、この場合にこそ通貨が膨脹して物價が騰貴するといふ數量説の原理的に固守する現象が明かに見られ得るからである。が、この場合といへども、數量説が原理的に正しいといふことを證することになるのではなく、ただ現象の表面が數量説的な運動を示すと云ひ得るにすぎないのである。これ、數量説に基づく見解が現下のインフレーションを(殊にその發現の可能を)説明する上に於て一應正しいにもかかはらず、結局において根本的な誤謬を脱し得ない理由である。

\*現在のインフレーションの見透しについて最も純粹に數量説に據つたものは雑誌「ダイヤモンド」所載の所論等に散見された。(同誌昭和七年三月一日號「インフレーションは必至」その他)。「東洋經濟新報」も根本において同見解であつたとも見られる(例へば同誌五月七日號「インフレーションへ導く七年度豫算」、四月十六日號、討論會上の石橋氏所論等)。この數量説一本論的な見解はインフレの見透しについては正しいところを擲んでゐると云へよう。これと正反對に對立してインフレーション發現の不可能を説いてゐた雑誌「エコノミスト」は、數

量説に據らずして却つて見透しを誤つた。これについては本書第一篇第四の論文参照。根本において数量説に立つにも拘はらず紙幣増發を純粹なる流通手段の増加と見ずしてエコノミスト流の見解を混へてゐた『東洋經濟新報』は、インフレーションの出足のはかばかしくないのを見たとき、時に、インフレーションは必然でないが尙ほ政策的に可能であるといふ風にも論じた(同誌四月三十日號)。同上の拙論参照。

なるほど不換紙幣のインフレーションの場合には、紙幣の價値は紙幣の増發されるに従つて下落し、數量説が説くと同様の現象を呈する。若し『三四割』の紙幣増發が行はるれば、それに應じて(むしろ厳密に三四割とはゆかぬにしろ)何程かの物價騰貴を起すであらう。その騰貴が望み通りの三四割乃至五割にまでに達しないならば、更に紙幣を増發することにより結局は目標の高さにまで物價を騰貴せしめ得るであらう。この點は固より問題はない。ところで、わがインフレーションニストの主張の要點は、單に物價を目標の高さに騰貴せしめるのではなく、この三割高なり五割高なりの状態に物價を維持して置くことである。しかも單に數量説的に考へるならば、物價を例へばこの五割高の状態に保つておくといふことは、紙幣をそれ以上増發しなせなければ可能でなければならぬ。ところでもしそれが眞實に可能だとすれば、そのことは、資本家階級が望み通りの價格をもち得るといふことであり、しかもそのことを資本家階級は殆んどコストを要せぬ紙幣の印刷によつて到達し得るといふことである。はたしてさうであるならば、それは何と素晴らしい考へではあるまいか。そしてさういふ名案がなぜ恐慌になやみ抜いた今頃になつて飛び出して來たのか。なぜそれは、もつと早く考へつかれなかつたのだらうか。

これに對する解答は、一面において數量説が依然一つの資本家的イデオロギーに過ぎぬものとして現象の一面的把握であることを曝露するであらうと同時に、他方において紙幣本位の本質を明かにするであらう。私はこの問題を本書第一篇第一の論文で一應明かにしてゐるので、ここでは詳しく繰返へさないことにする。ただ行論に必要な點を極めて簡単に述べておくにとどめよう。

謂ゆるインフレーションニストの主張は極めて具體的な現下の日本經濟の情勢の上で論じられてゐるのであるが、要するにそれが『適度』のインフレーションの可能を理論的に前提してゐることは確かであらう。ヨリ具體的に見るならば、その主張には、日本の財政破綻の情勢に對する過少評價、更にわが經濟情勢一般の類勢、殊にはその對外的地位の劣惡に對する過少評價、等々があり、それらが彼等のインフレーション見透しを誤謬に導いてゐることは確かであるが、いまはそれを別にしてただこれを貨幣理論の領域内において見ようといふのである。かやうに問題を限定するとき、その理論の根本缺陷は、國內における紙幣の價値下落の運動を單に通貨量との關聯において孤立的に抽象的に把握してゐることにあり。(尤もこの際増發された通貨が一應「購買力」の増加を通して物價に作用するといふことが考慮せられてはゐるが、極端なる不況期にもかかはらずこの増發された通貨があくまで購買手段として作用し一般的に物價騰貴を惹起し得ると考へることは、究極において、流通手段の數量が商品價格を規定するといふことを一般的に信奉するものにほかならない。この點は重要である。そしてこの際「購買力」を

云爲するのは、一方においては好況期の信用膨脹の際における觀念の混同であるが、他方においてはインフレーションが新たなる「購買力」を生むものといふ虚偽の表象を與へる効果をもつものである。(一)従つてそれは、對外關係から來るこの紙幣價值の運動を考慮しないといつてよい。これを逆にいへば、(イ)國內における通貨の數量の如何にかかはらず、爲替相場は一定標準に政策的に維持され得ると見るか、(ロ)もしくは、爲替相場の動きといふものを通貨の對内價值を反映するものとしてただ一方的に考へるのである。前に吾々が引用した『讀賣』の主張においては、爲替は『三十五ドル以下に保つ』ことが、もしくは保てるといふことが、前提されてゐる。同じやうな考へは石橋湛山氏の前掲の論文にも見られる。石橋氏は次の如く云はれてゐる。

『……私は或は我物價を平均五割程度に引上ぐるときは、爲替相場は事實二十五ドル程度に下落せしむる必要があるかと考へる』と。

即ちここに見られるかぎりでは、爲替相場を一定の高さに肆意に維持するといふことが前提されてゐる。しかし、石橋氏の眞意は、むしろ爲替相場は通貨の對内價值を反映してのみ動くとされる(上の「に當る」)のであらう。そのことは、氏が『爲替相場と金本位制度』(昭和六年十月廿四日東洋經濟新報)なる論文中で購買力平價説が單に金輸出禁止下においてのみならず、金本位下においても原理的に支配するといふことを説かれるのを見れば思ひ半ばに過ぎるであらう。このかぎりにおいては、氏は爲替相場が

國內通貨の購買力平價をもつて定まると見られる、即ち爲替相場は通貨の對内價值を一方的に反映するといふ思想をもつて一貫してゐられる、と見られよう。以上、爲替相場が國內における紙幣流通量の如何にかかはらず一定標準に維持され得ると考へるにしろ、又は、爲替相場はただ通貨の對内價值を反映するにすぎぬと考へるにしろ、何れにしろ、それらの考へが、對外爲替は國內における紙幣流通量からは一應別に、それ自身に、その相場を決定する要素をもつことを否定する點では接を一にしてゐる。即ち紙幣の對外價值が先づあつて、それが對内價值に向つて反映するといふ、爲替相場と對内價值との相互關係の中の一つの方面をそれは全然没却してゐるのである。しかもこの對外價值の獨自性こそ、ある程度に展開された國內のインフレーションをヨリ以上に發展せしめようとする一つの大きい契機となるのである。むしろ、對外價值自身も對内價值を反映する。そのことは云ふまでもない。が、對外價值が單なる對内價值の反映以上のもので、直接的に一國の資本家的生産の發展傾向を反映するモメントをもつといふ點に力點をおいて、それが逆に對内價值に反作用するところの一聯の因果關係がここでは把握されねばならぬ。對外價值におけるかうした要素は、一國の金本位停止そのものが、金の流出による本位維持の困難、畢竟はその國自身の資本家的經營の劣悪なる情勢にもとづいて起つたものであるとき、特に前面にあらはれるであらうし、さうした場合にはこの對外價值の低落は恐らく對内價值の低落より遙かに先驅けするであらう。そして、對内價值がこれを反映して同じく低落し、その兩者間の開きが縮

少するか乃至消滅するとき、しかもその背後の經濟情勢一般が依然變らぬ状態にあるならば、對外價值は更に一段と低落せざるを得ないであらう。ただこの間、何等かの事情でこの國の經濟情勢が好轉するか特に財政の著しい好轉でもあれば、對外價值の下落は一應停止することもあり得よう。しかし爲替下落によつて促進され展開される謂ゆる爲替景氣といふが如きものが如何なる性質の景氣であるかを考へてみれば、以上のやうな場合における國內の情勢好轉が爲替下落そのものからは招來され得ないことは明かである。ここにおいて、不換紙幣と、金本位から不換紙幣への轉換を必要としたやうな一般的情勢とを前提するかぎり、この不換紙幣によるインフレーションはそれ自體においては自らを一定の程度において停止せしめそしてその點で安定せしめるやうなブレイキをもたないと見なければならぬ。ただかういふ過程がいかなる形態をもつて起り、殊にいかなるテンポをもつて進むかといふことに至つては、ひとへにヨリ以上の具體的事情に依據すること云ふまでもない。それは、奔流の如き姿をもつてではなく、極めて遅々として或は時に停滞をしてすら、なほ徐々として發展することもあり得よう。

ただ茲において吾々は、三四割、五割、等々の安定せるインフレーションを企圖するわがインフレーションの理論は、依然としてその根本において貨幣數量説乃至は購買力平價説の眞理への信奉の上に立つことを知り得るのである。三四割乃至五割といふ目安そのものの實現は一應は可能であらう。が、それはただヨリ以上の法外なる物價騰貴につづく一過程においてのみ可能であるだらう。事實、六月以後

のわが爲替の漸落は、刻々にこれらインフレーションの理論を粉碎しつつある。が、この理論によつて代表せられた資本そのものは、この理論を越えて進展する『爲替景氣』の中で、意外にも素晴らしい獲物を見つけ出して今や盲滅法に奔狂してゐる。この利潤がいかなるものを犠牲としてをり、そしてそれは結局いかなるところへ導いてゆくかについては、資本は全く無關心である。その水先案内人たるかの理論もそれは教へない。

恐慌渦中における資本のただ一寸先の進路を案内してゆくのが、これらの理論の實踐的任務であつたのである。

## 6 インフレーション！

——(その二)——

吾々は以上で所謂インフレーションニストと呼ばれる人々の所論の主要特徴を見たのであるが、云ふまでもなくブルジョア・イデオログのすべてが現下においてインフレーション謳歌者でもなく、またインフレーションの可能乃至必然を信奉してゐるわけでもない。私は、いま謂ゆるインフレーションニストとは一見正反對の見解に立つかに見ゆるインフレーション不可能論の典型をとり、その『理論』の解體を試みるであらう。